建築と社会

特　集

● 関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる
—東畑謙三先生追悼一周忌—

5
1999

日本建築協会

日本建築協会企画・販売

出版図書一覧

1917年3月に創設された日本建築協会（当時・関西建築協会）は、すでに昭和初期には大阪近辺で住宅博覧会や建築講演会を開く一方、当時は入手しにくかった建築の情報を図書の出版という形で会員に提供していた。

＊

以後、創立周年記念事業として、その時代の動きをとらえて単行本を出版している。

50周年、60周年、70周年、そして80周年に、図書の出版が企画され、現在も継続して発行・販売されている出版物は、以下のとおり。

＊

購入希望者は、㈱日本建築協会事務局（TEL06－6348－0635、FAX06－6348－0634）まで。

日本建築協会創立60周年記念事業

建築技術選書

A５判・130頁～160頁　発行:学芸出版社　本体価格¥1,200～¥1,400

1 茶室の話　岡田孝男
3 マイコンによる構造設計のすすめ（改訂版）　魚木晴夫
5 すまいの語録　茶谷正洋
7 構造計画とやさしい力学 1　須賀好富
8 建具の知識と意匠　山片三郎
9 エレベータ・エスカレータ 立体駐車場　木村利雄
10 構造計画とやさしい力学 2　須賀好富
13 医院・診療所の計画と設計　池田有隣・船越輝由
14 設計のコンピューター手法　飯塚英雄
16 石垣と石積壁　窪田祐
17 基礎と地盤の手ほどき　中堀和英
18 ショッピングセンターの計画　西脇顕正
19 住宅設計とインテリア　福岡喜久雄
21 住宅の家具　光藤俊夫
23 設備技術者のための建築再入門　光安義光
24 鉄骨構造の話　金多潔・甲津功夫・西沢英和
26 建物と地震災害　竹内吉弘・島田耕一
28 建築金物の知識　立野一郎
30 住宅三備心得帳　平田純一
31 住宅のエレクトロニクス　監修　小林郁
32 建築塗装の手引き　児島修二
33 建築式典の実際　若林嘉津雄
34 建築設計と高齢者・身障者　吉田あこ
36 日本壁　山田幸一
37 身近な耐震設計法　前川陽一
38 住宅の照明　監修　大島博
39 建築を志す人びとへ　日本建築協会出版委員会
特装本 火災安全学入門　岡田光正

選書シリーズは、在庫図書を掲載

日本建築協会創立60周年記念事業「建築技術選書」姉妹篇

〈プロのノウハウ〉シリーズ

四六判２色刷り　発行:学芸出版社　本体価格¥1,600～¥2,500

TQCから見た建設業　荒木陸彦
躯体工事監理のチェックポイント100　須賀好富
空調設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
衛生設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
現場マンのアイデア発想　合原一夫
建築基準法の実際　矢吹茂郎
ニュー組積建築のすすめ　福島孝之　他
建築物の消防法を読みこなすコツ　高木任之
鉄筋工事・本音の現場学　荒川治徳
建築基準法の難解条文を読みこなすコツ　高木任之
工業化住宅・考 これからのプレハブ住宅　松村秀一
鉄骨工事の現場学　石田満喬
建築紛争の実際　岡本辰義
仕上工事監理のチェックポイント　日建設計監理業務研究会
ゼロ災への道 建設現場の安全管理活動　表　一郎
木造住宅のしくみ 在来工法の基本と応用　浅野平八・東　敏博
コンクリート工事のチェックポイント100　加賀秀治
インテリアコーディネートの100ポイント　町田ひろ子監修／松本　茂・村元俊子著
新版 建築基準法を読みこなすコツ　高木任之
木づくりの常識非常識　上村　武
建築関連法規を読みこなすコツ　高木任之
都市計画法読みこなすコツ　高木任之

日本建築協会創立70周年記念事業

選書特装版

B５判　発行:学芸出版社　本体価格¥2,800～¥3,800

構造コストと経済設計　須賀好富
新・建築と設備の接点　宮脇　毅・南部　武
建築設備の健康診断　牧野　茂
外壁構法チェックリスト　飯塚五郎蔵
水にまつわるトラブルの事例・解決策〈建築篇〉　「建築漏水」編集委員会
建築・都市・住宅・土木一情報アクセスブック　菊岡倶也
建築デザインのための構造計画　須賀好富
場所打ち杭の設計と施工　阪口　理
建築と緑　瀧　光夫
入門・建築積算　生島道春
水にまつわるトラブルの事例・解決策〈設備篇〉　「設備漏水」編集委員会

昭和生まれ　関西の建築家50　1987年

A４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会建築クラブ朝食会300回記念

講演記録集 **話のはなし**　1997年

B６判５分冊　企画:日本建築協会建築クラブ　１セット10,000円（消費税含む）

民間（旧四会）連合協定

工事請負契約約款　A４判のみ取り扱い

工事請負契約書・仲裁合意書・契約書使用上の留意事項

１部¥230（消費税含）送料 実費

日本建築協会創立70周年記念出版

住宅近代化への歩みと日本建築協会　1988年

A４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会創立75周年記念出版

工高生デザインコンクール入選作品集　1992年

A４判　企画・発行：日本建築協会　定価2,000円

日本建築協会創立80周年記念出版

建築を志す人びとへ

A５判　日本建築協会出版委員会編著　本体価格1,800円

定時評議員会議決お知らせ

平成11年３月24日の定時評議員会において、平成11年度評議員会議長・副議長が選出されるとともに、平成11年度の役員が改選されましたのでここに会告いたします。

1. 平成11年度評議員会正副議長

議　長　鶴田　昭一（建築工房和泉屋）
副議長　三木　敏男（サングローブ）

2. 平成11年度会長・副会長・理事

右表のとおり

	留　任	新(重)任　＊印　新任
会　長	市川　宏（東畑建築事務所）	
副会長	金多　潔（元京都大学） 三品　哲夫（元大阪市） 岡本　行善（昭和設計）	薬袋　公明（日建設計） 銭高　善雄（銭高組）
理事（技術）	井上　豊（大阪大学） 遠藤　郁夫（大成建設） 多井　幸男（多井建築研究所） 太田　隆信（坂倉建築研究所） 金井　弘次（阪急エンジニアリング） 小島　雄（鹿島建設） 佐野　吉彦（安井建築設計事務所） 真塚　達夫（日本建築構造技術者協会） 松村　慶三（浦辺設計） 山田　修（修建築事務所） 古林　敏郎（中国支部） 小宮　三辰（東海支部）	片倉　健雄（元近畿大学） ＊川口　順弘（竹中工務店） 坂　雅勝（大阪市計画調整局） 實藤　清二（日本建築総合試験所） 塚本　幸三（住宅・都市整備公団） 松原　徹雄（大阪府建築都市部） ＊宮田　照久（昭和設計） ＊山下　健一（大林組） 和田　克朗（大阪住宅センター）
（総合）	淺沼　誠夫（淺沼組） 井上　利美（熊谷組） 河口　允昭（戸田建設） 久米　宏和（大阪建設業協会） 原田　敬三（フジタ） 藤木　鐵三（藤木工務店）	大林　芳郎（大林組） 奥村正太郎（奥村組） 鴻池　一季（鴻池組） 竹中　統一（竹中工務店） 友原　譲（間組） 松村　雄吾（松村組） 村上謙一郎（清水建設）
		松丸　哲也（豊國建設）
（電気）	小林　四郎（住友電設） 菅谷　節（ダイダン）	荒巻　恭士（きんでん） 栗原　信英（栗原工業）
（管工）	近藤　徹（不二熱学工業） 伴　昭秀（西原衛生工業所大阪店）	清水義一郎（清水工業所） 仙田　良行（カンダン）
（建材）	立野　一郎（ユニオン） 原田孝太郎（原田セメント化工）	恩庄　二郎（大阪化工） 永原　義夫（王建工業）
常務理事	加藤　三郎（事務局）	

（敬称略）

「日本建築協会80年史」近く発刊!頒布予約開始

平成９年度から進めてまいりました「日本建築協会80年史」の編纂事業も、長谷部朔郎委員長以下編纂委員会関係各位のご努力により、近く発刊の運びとなりました。
1917年（大正６年）に関西建築協会として呱々の声をあげた日本建築協会の歴史がA4判・240頁程度にまとめられています。
この「年史」の発行にあたり、多くの団体の皆様からご支援を頂きましたことを厚く御礼申し上げます。
おって、この「日本建築協会80年史」は非売品扱いとしておりますが、本会会員には印刷実費にて頒布いたします。ご希望の方は右記要領でお申し込み下さい。

＊
申込先　日本建築協会総務課
TEL 06-6348-0635
FAX 06-6348-0634
申込締切　1999年５月21日（金）
体　裁　A4判・240頁程度・並製本
頒　価　１部5,000円程度（未定）

「日本建築協会80年史」内容

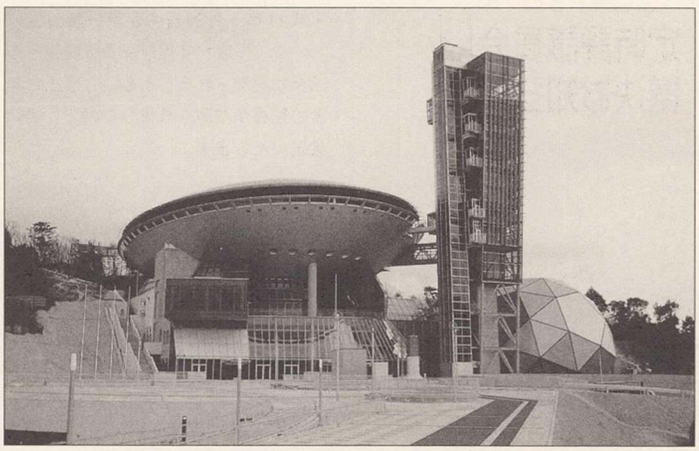
●日本建築協会の沿革／委員会活動／「建築と社会」の変遷／大正時代から現在までの本会主催の博覧会・展覧会・講演会／よろず相談住宅展／青年建築家・青年技術者顕彰／工高生デザインコンクール入選者etc.
●日本建築協会創立者と会を支えた38人のプロフィール（片岡安・武田五一・池田実・設楽貞雄・波江悌夫・竹腰健造・尾崎久助・東畑謙三・塚本猛次・葛野壮一郎・横浜勉・宗兵蔵・松本禹象・園部文雄・日高胖・野村一郎・古宇田実・松室重光・松井貴太郎・安井武雄・中沢誠一郎・坂靜雄・今林彦太郎・井上新二・松本儀八・池田宮彦・銭高輝之・中西六郎・大林芳郎・伊東五郎・鴻池藤一・竹中錬一・福田朝生・佐野正一・鷲尾健三・松村雄吉・横尾義貫・足立孝）etc.
●座談会「戦中から戦後初期の協会活動」―尾亀清四郎・大林芳郎・小西岬・佐野正一・横尾義貫・三品哲夫の6氏による終戦前後の協会活動の証言―

■執筆ワーキンググループ
坂本勝比古／安達英俊／石田潤一郎／植松清志／梅宮弘光／桐浴邦夫／酒井一光／橋寺知子／山形政昭／吉田高子／和田康由

■80年史編纂委員会
長谷部朔郎／安達英俊／近藤達夫／谷淳之介／十倉毅／原見昌志／和田康由／吉田悦二

大型児童館 ビッグバン（仮称） 見学会

日　時　1999年 5 月18日㈫
　　13:30―16:30
講　師　橋本博雅／会館準備室長
　　太田隆信／坂倉建築研究所代表
　　取締役大阪事務所長
集　合　現地
　　＊泉北高速鉄道「泉ヶ丘」駅前
定　員　40人＊申込多数の場合は抽選
参加費　会員 1,000円、一般 2,000円／税込
申　込　5 月11日㈫までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　　①催し名：ビッグバン見学会
　　②氏名
　　③個人会員・団体会員・一般の別
　　④職場・学校名
　　⑤参加証郵送先
　　⑥連絡先電話番号
　　をお知らせ願います。
　　＊参加証を 5 月12日㈬に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
　　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　　TEL.06-6348-0633
　　FAX.06-6348-0634
　　〒530-0001
主　催　㈳日本建築協会
　　事業委員会見学会小委員会
　　担当主査：松本　剛／大阪府



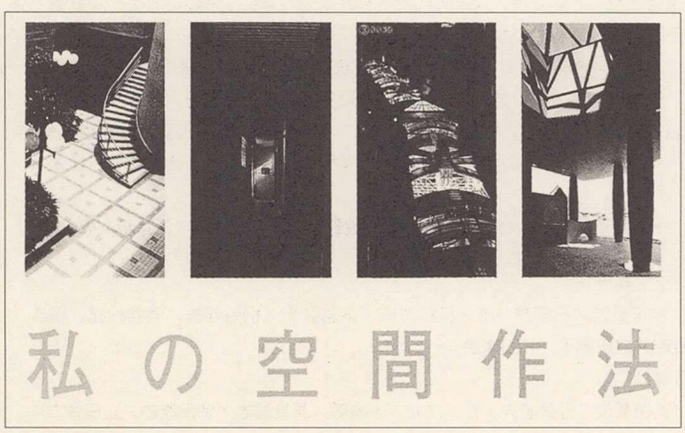
ビッグバンは、泉北ニュータウンの地区センターに隣接し、池や雑木林などの起伏に富んだ自然環境が残る敷地の中に計画されている。建物は、このような貴重な周辺の緑と調和し、敷地の地形を生かしたダイナミックな構成となっている。

「本館」は、円盤をイメージしており、内部はあそびゾーンとおもちゃ体験館とで構成されている。「遊具の塔」は、地上53mの高さを有し、最上階から４階まで約24mの間に垂直遊具を取り付け、こども達が中に入って楽しめる巨大遊具である。「こども劇場」は、人形劇を主体とする、惑星をイメージした球形の劇場で、約300人収容できる。

●建築概要
所 在 地　堺市茶山台1-9-1
設　　計　坂倉建築研究所大阪事務所
施　　工　大成・三菱・森本建設JV
敷地面積　106,170㎡
建築面積　4,423㎡
延床面積　10,332㎡
構造規模　RC・S、B2・8F
工　　期　1996年８月～1998年12月
オープン　1999年６月（予定）

「建築と社会」99/11 会員作品特集号 “私の空間作法” 作品募集

「建築と社会」では、今年も11月号誌面で、広く会員の優れた作品をご紹介するため、ここ数年間に会員各位が設計された作品で、誌面に取り上げられていないものを掲載、“私の空間作法”というタイトルで特集号を組むことにいたしました。
建築作品やランドスケープデザイン、インテリアデザイン等、建築に関係のあるものなら種別は問いませんので、下記要領に基づいて原稿資料をご送付下さるようご案内申し上げます。



＊

この特集も今年で６回目を迎え、ますます充実した内容にするべく一同努力しておりますので、みなさまからのふるってのご応募お待ちしております。

■ご用意願う原稿（提出資料）
1．写　真　外観、内部のプリント２～３枚程度（サイズはキャビネ判程度）
2．概　要　作品名称、所在地、設計者、施工者名、建築面積、延床面積、構造規模、工期など。
3．説明文　設計上の特徴や苦心された点などについて300字以内にまとめて下さい。

■掲載に際しての補足
1．掲載料は無料です。但し、写真は原則として白黒とし、ご提出写真を掲載しますが、委員会の判断で一部カラー掲載をすることがありますのでご了承下さい。
※写真の撮影者名は必ず付記願います。
※写真に著作権等が生ずる場合は、応募者にて処理願います。
2．掲載作品数はご協力頂ける点数にもよりますが、原則として、１社（１人）１作品とします。
また、8月末までに竣工予定作品のもので写真をご用意していただける作品の場合は一度、ご連絡下さい。
3．作品の掲載順、及び誌面レイアウトにつきましては委員会で行いますので、ご了承下さい。
4．建物の特徴や特殊な事柄については簡単な補足説明をお願いする場合がありますので、その折にはご協力下さるようお願いいたします。
5．応募作品が多数の場合等は、誌面編集上、掲載できないこともありますのでご了承下さい。

■原稿期日及び送付先
1．期　日　1999年7 月21日㈬必着
2．送付先　社団法人　日本建築協会
　　編集委員会
　　「会員作品特集号」係
　　〒530-0001
　　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　　（大阪駅前第３ビル21階）
　　TEL 06-6348-0632
　　FAX 06-6348-0634

主催　日本建築協会

平成11年度　第45回工高生デザインコンクール

設計課題　道の駅

課題の趣旨


入選賞牌

近年、道路網の充実にともなって、長距離や夜間のドライブをする人のほか、高齢者や女性の中にもドライブを楽しむ人も増え、快適で安心して立ち寄れる休憩施設が一般道路にも求められています。

道の駅は、このような背景から、主要な幹線道路沿いに整備が進められている公共の施設です。これは、単なる休息の場としてだけではなく、地域の活性化を図る目的で、地域に関わるさまざまな情報を提供する場としての利用も期待されています。

本課題では、ドライブを楽しむ人やそこを訪れるさまざまな人がわくわくするような使い方のできる「道の駅」の提案を求めます。車社会と地域のよりよい関係がそこに築かれるような、既存のかたちにこだわらないアイデアあふれる作品を期待します。

設計条件

1. 敷　　地：敷地の大きさ、形状ともに自由。
2. 規　　模：延べ面積は自由とする(ただし、500㎡程度)。
   構造・階数は自由。
3. 所 要 室：休憩スペース
   情報スペース
   その他必要なスペースを適宜設ける。
4. そ の 他：24時間利用できる駐車場、便所、電話を設ける。

所要図面

1. 配 置 図：縮尺自由(敷地・道路・建築物・駐車場の関係を示し、植栽などを記入する)
2. 各階平面図：縮尺1：100
3. 立 面 図：縮尺1：100（2面以上）
4. 断 面 図：縮尺1：100（1面以上）
5. 透 視 図：設計意図を示すところ（アイソメも可)。着彩仕上げ。模型写真に替えてもよい。
6. 設計説明：設計趣旨（立地・周囲の状況などについての説明を含む)および建築概要(敷地面積、建築物の構造・階数および床面積など）を示す。設計意図を表すサブタイトルをつけてもよい。
7. そ の 他：平面図・断面図には、室名・寸法を記入する。その他必要と思われる図面を描いてもよい。

応募条件

1. 用　　紙：製図用紙A1判（594㎜×841㎜）1枚を使用し、その中にすべての要求図面を描くこと。
2. 仕 上 げ：図面は黒色鉛筆仕上げとし、ワープロ・CGやCAD・スクリーントーンなどによる仕上げは禁止する(ただし、色鉛筆等による着色は可)。透視図は彩色用紙に描き、製図用紙にのりづけしてもよい。透視図や模型写真以外の貼りつけ、図面のパネル化は行わない。
3. 応募資格：平成11年4月現在、高等学校在籍の生徒で、個人または共同で制作したものとする。
4. そ の 他：用紙や図面には、学校名・学年・氏名など応募者がわかるような表示は行わないこと。
   ※以上の条件に違反した応募作品は、失格とすることがある。

応募方法

1. 別紙用紙に、学校名・所在地・学年・氏名を記入し、封筒に入れ密封し、図面の裏に貼りつけること(記入用紙が足りない場合は複写して下さい)。
2. 共同制作で応募する者は、1.の記入用紙に連名のうえ、代表者に丸印をつけること。
3. 応募作品は学校を通じて提出すること。

締切期日

平成11年9月30日㈭付の消印をもって締め切る。

送付先

〒530-0001 大阪市北区梅田1-1-3-2100　大阪駅前第3ビル21階
社団法人 日本建築協会　第45回 工高生デザインコンクール係
TEL. 06-6348-0633　FAX. 06-6348-0634

入選作品の数および賞

1. 入選作品は10点とする。
2. 入選作品のうちから最優秀賞1点、優秀賞2点以内を選び、賞状・賞牌および記念品を贈る。
3. 他の入選作品には、賞状および賞牌を贈る。
4. 応募者全員に参加賞を贈る。
   ※入選作品の版権は本会に属し、また入選作品は本会にて保管する。

入選者発表

審査の結果は、各学校ならびに本人に通知するほか、本会の会誌「建築と社会」11月号に発表し、入選作品は翌1月号に掲載する。

審査員（50音順・敬称略）

委員長　石川　康介／近畿大学理工学部建築学科助教授

委　員　柏木　浩一／㈱竹中工務店大阪本店設計部 プリンシパルアーキテクト
貴志　雅樹／㈱貴志雅樹環境企画室代表
北村　　潤／㈱東畑建築事務所設計部設計課長
栗原　幸二／㈱大林組本店建築設計第4部副部長
黒田　智子／武庫川女子大学生活環境学部生活環境学科講師
設楽　貞樹／㈱安井建築設計事務所設計部専門部長
島崎　昭彦／建設省近畿地方建設局営繕部建築課建築課長
遠松　展弘／㈱日建設計取締役大阪本社副代表兼設計室長
長坂　　大／京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科助手
松本　　明／松本明建築研究所代表
安原　盛彦／秋田県立大学建築環境システム学科教授
山本　光良／㈱昭和設計企画設計部部長
吉羽　裕子／㈱アイ・エフ建築設計研究所代表取締役
吉村　英祐／大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻助教授

このコンクールは、高校生の設計技能の向上を目的とし、昭和30年より毎年テーマを替えて開催しています。

「建築と社会」誌

特集一覧● 1978~1998

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。昭和42年からは体裁をA4変形判に変え、特集と作品作風頁を二本柱に、シリーズものの頁を織り込み、その時々の社会を反映したテーマを選んで掲載してきた。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-348-0635、FAX 06-348-0634）まで。

販売価格は1200円（送料・消費税含）。なお、「建築と社会」創刊号～昭和30年12月号まで全87巻の復刻版が、1991年10月から順次発行（不二出版）・配本されているので、詳細は日本建築協会事務局へお問い合わせ願いたい。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1978 Vol. 59	●デザインの動向―新旧のコントラスト	●水*	●医療施設―病院建築と情報システム	●外壁塗装材料*	●電波障害と建築*	●組合方式による集合住宅計画*	●住宅設備	●新しい耐震設計	●CAD―設計とコンピュータ	●一般号*	●第25回青年技術者*	●ビル環境
1979 Vol. 60	●転換期の再開発*	●大阪南港ポートタウン*	●商業空間*	●コンクリートのひびわれ	●日影規制*	●ホテル建築と情報システム	●農村施設の変貌*	●建築の終局強度の検討	●庄内のまちづくり*	●80年代のインテリア*	●第26回青年技術者*	●建設業の労務事情*
1980 Vol. 61	●80年代の都市と建築―まちづくりの歴史と展望	●今後の省エネルギーの趨勢 ●建設金物	●最近の銀行建築 ●安井建築設計事務所作品集	●住宅の耐久性*	●建築行政と法規*	●最近の防水工法	●都市景観とアメニティ*	●屋内体育施設の設備*	●水ぎわのまちづくり	●今後の外装吹付仕上材*	●第27回青年技術者 ●転機にたつマンション集合住宅	●これからの建築設計と新耐震設計法*
1981 Vol. 62	●職能論*	●中国の論文―北京の都市計画*	●ポートピア'81*	●台所まわりの計画と設備*	●シーリング材の知識*	●災害と法―安全な環境をめざして*	●都市住宅―住まい手からの発想*	●建築物と風―デザイナーのために ●日建設計作品集*	●住宅・都市整備公団―関西における都市整備を中心とした新公団の役割*	●間仕切壁の性能評価*	●第28回青年技術者*	●障害者の暮らしやすい環境と設備
1982 Vol. 63	●新たな商業空間の展開*	●省エネルギーと開口部*	●医療施設―地域医療と設備計画*	●近畿の地盤と地質*	●都市景観―まちなみ美観への誘い*	●大阪市庁舎（第一期）*	●ホール建築と音*	●大スパン構造*	●昭和設計作品集*	●絵本にみるすまいとまちづくり ●オー・エム・ホテル日航ビル	●第29回青年技術者 ●地方の庁舎建築*	●風土・空気と人間*
1983 Vol. 64	●関西の建築文化を考える	●マイコンの建築への利用	●多様化する運動施設*	●建築と品質管理	●計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	●大阪駅とターミナルビル	●維持管理と設備更新	●東海の将来と文化を考える	●オフィス・インテリアの変革	●プレストレスト・鉄筋・コンクリート構造	●第30回青年技術者 ●大阪城国際文化スポーツホール*	●集合住宅と生活音
1984 Vol. 65	●21世紀への関西―魅力あるまちづくりを問う	●関西の超高層ビル*	●ビルのリフレッシュ―内外装補修技術の現状と発展―*	●建設産業とロボット開発*	●住環境と法制度	●まちの活性化と商業空間 ●京都駅南口再開発ビル*	●消防設備のポイント	●みどりとそれをとりまく人々	●高齢化社会と生活空間	●床の構工法	●第31回青年技術者 ●ディテールの思想	●光応用システムと建築
1985 Vol. 66	●大阪湾物語*	●東海の現在と近未来	●自由様式への道―建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホール―それが生みだす文化―	●建物の表情―最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合―人体と建築にみる― ●日建設計作品	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 Vol. 67	●これからの住空間―都市型集合住宅にみる	●屋根―そのデザインと素材	●現代デザイン―ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住宅と設備	●開発―その創造的仕掛けの鍵をもとめて― ●ツイン21	●CAD―その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 Vol. 68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚のまちづくり	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 Vol. 69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統―東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ*	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明*	●制振*	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ* ●大阪府営繕	●第35回青年技術者 ●800号記念*	●讀賣テレビ
1989 Vol. 70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術*	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備Ⅰ	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備Ⅱ ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 Vol. 71	●商品化住宅のデザイン*	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館*	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識―中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化―設計の多様化をめざして―*	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営繕の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観*	●高級感―建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 Vol. 72	●新しい都市空間づくりーⅠー	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくりーⅡー ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念*	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識―複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号*	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木―構造技術の世界―	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 Vol. 73	●夢物語―人がかわる、まちがかわる―	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン―東海支部―	●建築家のための設備知識―集合高層住宅の設備システム―	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り―住宅・都市整備公団関西支社10周年―	●木構造を使ってみませんか―集成材による構造―	●接着―建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」	●屋台・仮設の魅力に学ぶ―ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 Vol. 74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営繕	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境―限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生―構造技術の役割― ●大阪市営繕	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境―人にやさしい空間創造をめざして
1994 Vol. 75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと観	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって―会員作品	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美―建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 Vol. 76	●光がつくる風合の世界*	●音―騒音から操音／創音へ	●飛騨・美濃―まちの活性化と地方文化	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法―会員作品	●新しい「都市・建築」の視点	●建築構造と社会の接点 ●日建設計*	●ライフラインと建築設備*	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 Vol. 77	●阪神大震災から学ぶ*	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念	●遠江―その地域振興と文化	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害!非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 Vol. 78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり*	●東海支部会員作品 ●金沢・能登―風土・文化とまちなみ・建築	●創立80周年記念／建築と私と社会―80人の眼―	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興―世・制度の連環と新たな展開へ― ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA*	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法―会員作品―	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 Vol. 79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州―諏訪とその周辺―	●街並みの演出―最近の外構材料*	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備―ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98―21世紀に向けて	●ゆれをとめる―たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年

*は欠号

建築と社会 5 1999
ARCHITECTURE AND SOCIETY
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN
1917年創刊　第80集／通巻926号

今年の表紙
表紙デザイン　安里俊久

■特集予告
6月号／大阪城天守閣平成の大改修・堂島アバンザ
7月号／改正建築基準法
8月号／環境・近畿郵政局

編集委員会（平成11年度）
■副会長　近藤　正一
金多　潔　田ノ畑好幸
薬袋　公明　西岡　道雄
■編集理事　野口　太郎
荒巻　恭士　堀内　一夫
井上　豊　桝井　貴廣
小島　雄　山根　敏和
佐野　吉彦　村上幸三郎
竹中　統一　※谷津　和久
立野　一郎　□施工材料分科会
真塚　達夫　植田　実
松村　慶三　小椎八重猛
宮田　照久　太刀川丈爾
山田　修　十倉　毅
■特集小委員会　能美　敏男
□計画分科会　野口　幸忠
★計画系　福井　茂和
伊縫　憲幸　□法令分科会
梅村　宏尚　池口　和雄
小浦　久子　黒木　省二
※鈴木　克彦　椎名　辰之
田中　直人　田村　俊郎
紅谷　昇平　中　勝生
松川　敏正　※浜野　幸雄
松田奈緒子　■作品作風小委員会
横関　真紀　赤木　隆
吉村　英祐　秋山　克彦
★建築計画系　秋山　茂
上杉　秀隆　朝倉　一晃
江副　敏史　小笠原絵理
大村　昌聡　川上比奈子
※荻窪　伸彦　倉渕奈千子
菅野　忠司　杉原　繁
笹村　欽也　寺岡　宏治
佐藤不二男　中村　文紀
塚本　史郎　藤城　義丈
刃金　国雄　△前川　治彦
服部　光宏　前田　幸宏
山本　匡　牧野　雅一
★インテリア・住宅系　増田　敬彦
石川　佳子　増田　俊哉
加藤　力　■会員企画小委員会
北浦かほる　伊藤　郁郎
小梶　吉隆　池田　聡実
小島　保人　稲木　裕子
中田　誠　大谷由紀子
中村　孝之　糟谷　浩史
中村　雅人　河崎　敦子
西田　和子　高岡　伸一
畑　康之　高田　光雄
ベリー史子　高橋　麗子
水谷　美香　△塚口　明洋
□構造分科会　辻川ひとみ
岩永　速典　長友理津子
※大氏　正嗣　土田　伸二
金田　興熙　福田　瑞穂
河野　隆史　山嵜　章子
木下　隆嗣　■広告企画小委員会
岸本　一蔵　岩井　武夫
楠本　隆　小幡　義明
佐治　明志　加納伸太郎
田中　剛　家森　康彰
田辺　太一　片山　恒男
陶器　浩一　勝　一弘
松村　和夫　小山　昭
□設備分科会　平松　勉
梶井　宏修　前田　衛
河津　隆之　渡邊　浩文
◎委員長　○委員長代行
△副委員長　※幹事

印　刷　平成11年4月25日
発　行　平成11年5月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　話　06-6348-0635
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
日本電植株式会社
定　価　1200円〔本体価格1143円〕

CONTENTS

特集●
東畑謙三先生追悼一周忌——
関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる
関西建築界での東畑謙三●向井正也 14
大阪のまちづくりと東畑謙三●大島　靖 16
関西実業界と東畑謙三の縁—私的な思い出を含めて—●田中益夫 18
文化人としての東畑謙三●伊藤郁太郎 20
教育者としての東畑謙三●紙野桂人 22
京都大学建築学科と東畑謙三●金多　潔 24
日本建築総合試験所設立と東畑謙三●横尾義貫 26
東畑謙三と日本建築協会●佐野正一 28
東畑謙三先生の思い出
製図室の思い出●東　孝光 30
ベントパイプのことなど●尾亀清四郎 30
十二支の話●小西　岬 31
東畑謙三先生を憶う●西川幸治 31
阪急・石橋の事務所●平田定男 32
『空間』という言葉●藤森照信 32
堅実で繊細なデザイナー●三宗司郎 33
学成りますか。●森田司郎 33
関西建築界の巨人たち—リアリズムの風土のなかで●石田潤一郎 34
東畑謙三・東畑建築事務所年譜 38

会告　定時評議員会議決お知らせ.「日本建築協会80年史」近く発刊！頒布予約開始.ビッグバン見学会.11月号「会員作品」特集作品募集のお知らせ.工高生デザインコンクール—道の駅—. 1

作品作風　篠山市立大山小学校・幼稚園 6
小野市匠台公園体育館 8

gallery　195ストリート（佐藤　祐）●前川治彦 10

建築の眼　急変●本多友常　彫刻のいのち●安永三郎
下町のおばちゃんとツッカケ●森崎輝行　情報ネットワーク時代を生きる（5）建築の協調設計●本間利雄 12

素材と技術が生み出すデザイン　「緑」—芝生から●桑原誠二 42

法令コーナー　“人間サイズのまちづくり”の始動●宮本比佐志 44

設備の頁　低電圧床埋込式ネオンサイン●東　信良 47

施工材料の頁　2成分形ポリイソブチレン系シーリング材●村瀬雅明 48

基礎講座　連結送水管●由上雅章 49

Book Station　書名紹介8点 50

information　フォーラム「いま危ない日本の宝」.「建築設備診断技術者」講習会.第15回'99総合建築材料・設備展.5人の舞台裏—竹中・意匠展—.1999年作品展&記念セミナー.村井修写真展『港まちグラフィックス』.「ノート'99」—アートスペース虹で—.'99建築プロフェッショナルセミナー. 51

Sketch Book　各地にみる建築作品8点 52

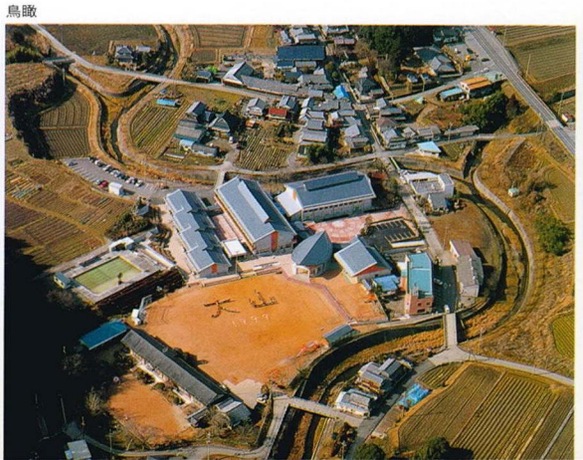
月間の動き　平成11年2月分 54



外観



鳥瞰



作品
作風

設計監理■
安井建築設計事務所

施工■
フジタ

篠山市立大山小学校·幼稚園

『山よ緑よふるさとよ』をテーマに掲げ平成９年７月にスタートした『ふるさとの学び舎』づくりが、４町合併後に篠山市となる丹南町の最後の事業としてこの春竣工を迎えた。山と緑に囲まれた何ものにも代え難い自然環境の中で、この施設がさらなる魅力をもって地域のシンボルとなるよう心掛けた。

１学年１クラスの小学校にふさわしいスケール感を出すために、建物は分棟化し屋根も分節化することで周囲の景観になじませた。そして切妻・越屋根・瓦棒葺と平葺の葺分けといった伝統のモチーフを、金属素材で構成して『新しい伝統』の表現を試みた。

建物の内装材には、子供の手が触れる部分に木材をふんだんに使用し、木の持つぬくもりと安らぎを感じる室内空間とした。また外装材についても効果的に木材を使用し、コンクリートの表情と対比させながら周囲の景観へのアクセントを持たせている。

木の葉型の視聴覚棟『ふれあい館』は、小学校と幼稚園の中心に配置し、回廊で接続して子供たちの交流の場となることを期待した。さらに地域に開放され、大人も含めた地域一体での文化創造がここで展開されることにもなる。旧木造校舎解体の折に、外された階段の床板材は、『ふれあい館』の玄関床に再利用され、卒業生の思い出と共に新しい校舎の一部になった。

（守安聡司・中村篤史／安井建築設計事務所）



配置図　1：3000

所 在 地 ―― 兵庫県篠山市大山新100
敷地面積 ―― 16,645.88㎡
建築面積 ―― 3,447.46㎡
延床面積 ―― 3,973.43㎡
構造規模 ―― RC、3F
工　　期 ―― 1997年７月～1999年１月
最 寄 駅 ―― JR福知山線・篠山口駅
撮　　影 ―― 藤　義則（エスエス大阪）


正面外観


校舎棟屋根


幼稚園内観

▼校舎棟内観



公園東側より

▼夕景



作品
作風

設計■（公園基本計画設計）
アルパック地域計画建築研究所

監理■
小野市・アルパック地域計画研究所

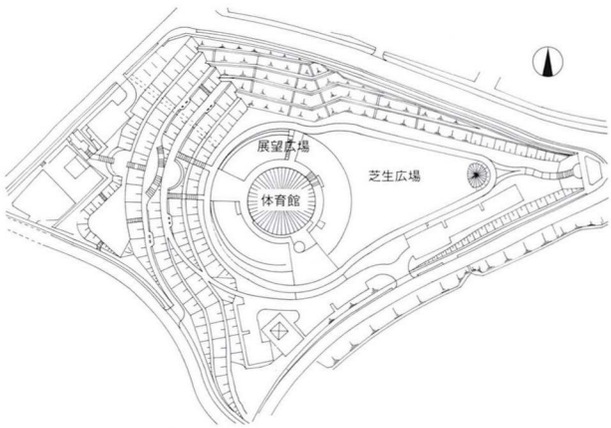
設計監理■（公園実施）
小野市・玉野コンサルタント

施工■
戸田建設

小野市匠台公園体育館

小野市匠台公園体育館『おのアクト』は、小野市南部、山陽自動車道、三木・小野インターから車で５分、小野工業団地、小野流通団地の間に位置する小野市匠台公園内にある。市民と新都市の方々の交流施設として、また、グリーンネットワークの核として、計画された。
敷地は、北側道路と南側道路で、20～30mの差がある丘で、敷地周辺はなだらかな丘陵地がつづく。
施設は、このなだらかな丘をコンセプトに、直径54.7mの円の中に、練習用バレーボール２面程度の競技スペースとトレーニングルーム、管理部門をもつ小体育館とし、建物は、全体のボリュームを突出しないように、１階部分をドライエリアを挟んで、芝生の丘の下に埋め、公園部分と一体となるように計画した。屋根は、20本のビルドHとコンプレッションリングで構成し、アルミ板で葺き、緑との対比でみせた。内部空間は、外部の土に埋まったというイメージとは対をなすように、自然光が充分入るようにした。
公園部分は、人口５万人達成の記念植樹、法面も含め、高木は雑木と桜を主体に植栽され、それらが育ち、桜の丘となる春を待ちわびている。

（前田怜嗣／アルパック地域計画建築研究所）



配置図　1：1000

所 在 地 ―― 兵庫県小野市匠台34
敷地面積 ――44,518㎡
建築面積 ―― 2,144㎡
延床面積 ―― 2,740㎡
構造規模 ――RC、2F、屋根S・一部RC
工　　期 ――1997年６月～1999年２月
最 寄 駅 ――JR福知山線・篠山口駅
撮　　影 ――清水向山（エスエス大阪）


1階競技スペース


2階アルコーブ


1階ロビー

▼階段室見上げ



gallery

195ストリート

設計
佐藤　祐

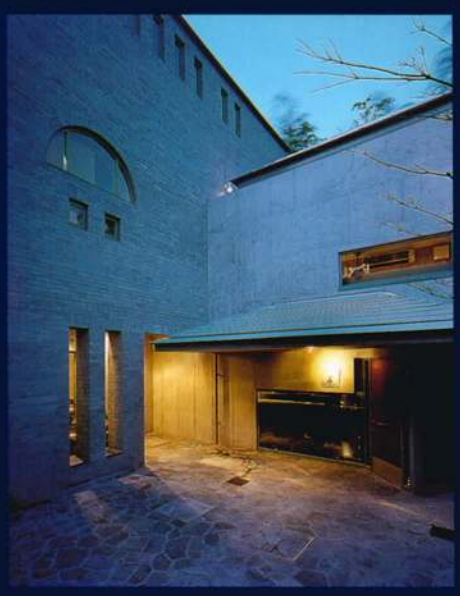
都市中心部にある複合商業施設の自己主張は、湧き上がるような狭雑さの内に自らが発する、彩りの強いディスプレイ性をもって人々を誘い、都市空間の遊びの振動とエネルギーの源となっている。
一方、小型で郊外型の複合商業施設と言える195ストリートは、外部からの光やエネルギーを受けとめ、その力を自己のものに変換し、生命体の象徴の月のように静かに人に語りかける、都市空間のインテリア性を持った建築として計画された。
奥行きの深い敷地に露地を通し、スカイラインを奥に入るほど低く下げ、人々が自由に出入り出来るオープンなサンクンガーデンを設け、近隣住環境への影響を配慮し、行き止まりの空間に開放感を与えた。また、街並みへの調和を思い、建築の素材を壁には燻んだセメントレンガ、露地とサンクンガーデンの床には、グレーの鉄平石を用い、控えめなサインと照明デザインのもと、静かな自己主張を持つ建物となることを願った。



佐藤（さとう）　祐（ひろし）
1945　熊本県生まれ
熊本県立熊本工業高等学校建築科卒業
竹中工務店大阪本店設計部
松村佐藤建築研究所
1987　佑建築設計室設立

撮　　影—福本正明
企画編集—前川治彦（作品作風小委員会）









急変

本多　友常

生活環境の地形に着目すると、傾斜環境そのものが、住・生産・交通・バリアー・境界などの集落の特性を左右する要因となっていることはいうまでもない。前回雑賀崎における陸屋根の急増について触れたが、61年当時は集落のほぼ全数が勾配屋根の風景であった。しかし、60年代後半から陸屋根の家屋が急激に増加し続け、80年代半ばには約4割が2階建・陸屋根ラーメン構造に取って代わっている。しかしその後85年から96年にかけての変化はほとんど無い。

つまりわずか20年間のうちに、生活空間は激変し、しかもその傾向は2階建・陸屋根という同一の形式を受け入れたものとして現象し、突然に休止した。

変容の契機となった大きな出来事のひとつに、1961年の第二室戸台風が上げられる。元来、この集落の景観を特徴付けていたのは、強風にたいする家の構えであり、低い軒高、高密度立地による相互防風効果の獲得などであった。強固な構造の出現は、一種の流行を生み出した。

これは神戸大震災後の環境の激変に似た傾向を連想させる。変容は突然に訪れ、そこにはトレンドが発生する。その影響力は、一設計者の力をはるかに超えて作用する。建築家が目をむけるべき大きな対象がここにはある。

和歌山大学教授システム工学部環境システム学科

彫刻のいのち

安永　三郎

奈良市を訪れるとき、探索の前後に興福寺に立ち寄るのが習慣になった。実は「友の会」という仕組みがあり、会員になると国宝館等への入場がフリーになるので、旧山田寺仏頭や、阿修羅像などを心ゆくまで鑑賞することができるのである。

興福寺は戦乱やたびたびの大火に見舞われ、そのつど復興を繰り返してきた。建築群のなかで一番古い建物は北円堂（1210年）であり、鎌倉期の再建になるが、創建当初の姿で復興されたと考えられている。本来、藤原不比等の追悼のために建立されたものであり、重要な位置を占める建物であった。

北円堂は春秋2回の特別開扉があり、内外を鑑賞することができる。当時の彫刻界は時代の機運を反映した写実的で清新な作風が好まれ、その奈良仏師の総リーダーが運慶であった。堂内には運慶一門の素晴らしい彫刻群が安置されているが、最高傑作は無著・世親像（1212年頃）である。深い精神性をたたえた一対の像は、見るものに畏敬の念を抱かせずにはおられない。洋の東西を通じてもこれほどの彫刻は例を見ない。ミケランジェロが活躍した時期が1500年前後であったことを思うと、その先進性に改めて驚かされる。

木は形を刻まれ、永遠の命を得た。

近畿郵政局施設部長

下町のおばちゃんとツッカケ

森崎　輝行

下町のおばちゃんにとって、町はコレクティブタウンと呼べる。協同居住のまちなのである。あるものはすべて、自分の物なのである。銭湯に行くときシャンプーを借りにくるが、実は、返さない。隣のプライバシーまでも自分の物なのだ。隣りがどういう生活をし、誰と付き合っているか等までまるでわかっている。路地は、自分の家の中の廊下なのだから。普通、家の中の廊下を歩く時、その足触りもあって、スリッパを履く人が多い。今では少なくなったが、下町の路地では、ツッカケ（今、この履物は、ヘップとよばれ、下町のディスカウントショップで売られている。）という履物が履かれている。これは、靴ではなく、下駄の様に、木の板に足止め（ハナオではない）がついたものであって、サンダルではない。これは、安易さの象徴である。簡単にツッカケれるのである。路地での往来に不可欠な物である。自宅での作業を家の外に迄継続させる為に必要なのである。例えば、煮物をしている途中に醤油を隣りに借りに行く時等である。下町のおばちゃんは、ハイソックスを着用している。為に、鼻緒の付いている下駄では容易に、この緊急の用をたせない。行動範囲は広く、市場と銭湯もまるで自分の家の中の台所の冷蔵庫であり、浴室となっている。気軽に、又は、緊急の用を足す為に、今日も下町のおばちゃんは、ツッカケを履いて町中を闊歩している。

森崎建築設計事務所

情報ネットワーク時代を生きる (5) 建築の協調設計

本間　利雄

建築設計と情報ネットワークが結び付けばどうなるのか。その具体例を2件紹介したい。1件は顧客と設計者が、ほとんど情報ネットワーク上で打合せただけで設計した話である。大阪から5時間近くもかかる山間の地に建つ温泉施設の計画である。顧客と当方をネットワーク回線で結び、双方のインターフェイスはパソコンとTVモニター。TVモニターはTV会議機能を受け持ち、パソコンはWWWサーバー上の図面やデータをブラウザで表示する機能と画面に書き込める白板機能を受け持つという遠隔協調設計システムを構築した。その結果、現地調査に1回出張しただけで、あとはすべてこのシステムで済んでしまったという実験プロジェクトである。もう1件は、2001年の春に大阪でオープン予定の大型テーマパークの設計である。これはアメリカの設計チームとゼネコンの設計チーム、協力事務所チームの三つのチームが情報ネットワークを利用して、主要施設数60余棟、延べ面積約14万㎡の設計をした話である。アメリカとの間では、図面や各種情報のやり取りはインターネットとISDN専用回線で行い、また日本の協力事務所とはISDN公衆回線を通じて図面のやり取りをした。建設省が目指している2004年の建設CALS元年に向けて、さまざまな試みがすでに始まっている。

大林組建築設計第2部部長

関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる



「東畑謙三60歳の像」小磯良平画

東畑謙三先生追悼一周忌特集

関西建築界での東畑謙三

向井　正也
神戸大学名誉教授

京都大学と東畑謙三

「1932年12月創設の東畑建築事務所が一昨年創設65周年を迎えた。この65年の間、建築の「職能集団」として、関西、西日本はもとより、首都圏を始めとして全国で、企画・提案・設計活動を展開し、官民を問わず、多くのクライアントから高い評価と信頼を得、わが国の建築設計界にあって確固たる地位を築いている。」(「日刊建設通信新聞」97年12月15日号)

東畑先生の死はこれよりわずか半年にも満たぬ翌98年4月29日、享年97歳の御高齢で、まさに功成り名遂げた上での大往生であった。先生の生地は三重県の松坂市に近い嬉野町で、有名な農政学者の東畑精一を長兄とする秀才四兄弟の三男だったが、他の兄弟がみな名古屋の八高から東大へと文科系に進んだのに、先生だけが京都の三高から京大の建築学科に進まれることになる。これには何かいわれがあっての事らしいが、この一事こそ東畑建築事務所をして今日あらしめたものといえるのであって、その成功の源は何よりも先生が、なにわのド真中に腰をすえての御活躍にあったものと思われる。

先生が京大建築学科を志望された理由として、下宿の北白川から三高へ通う途中で目にした、武田五一博士設計のチョコレート色のタイル張りのモダンな建築学科の新校舎(大正12年完成)に惹かれたからだといわれるが、この年、先生は建築学科に入学されている。当時建築学科では意匠学の武田先生の後継者として、東京から分離派同人の一人、わが師森田慶一先生を助教授として迎えている。

本邦初のル・コルビュジエ紹介

私は終戦直後、軍隊から建築教室に復帰し、大学院から、しばらく森田先生の助手をつとめていた頃、戦前に建築教室が編集・発行していた学術雑誌「建築学研究」の復刊の編集を手伝うことになる。(編集長:西山夘三)

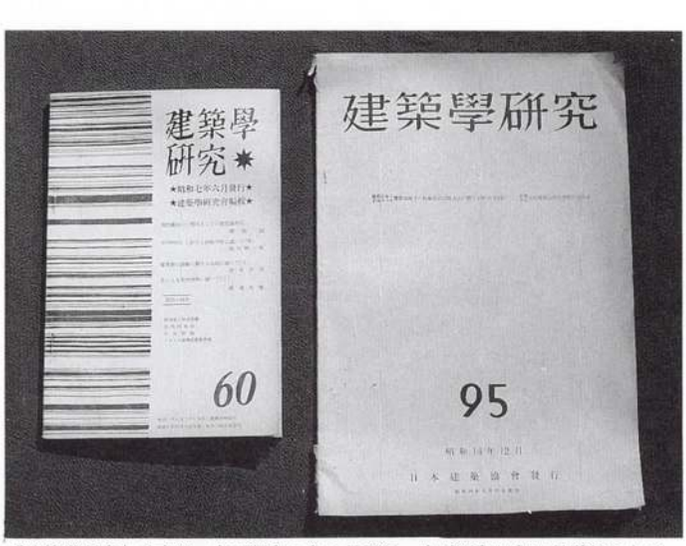
そもそもこの雑誌はその昔、当時大学院生だった東畑先生が主としてその編集に当っておられたもので、時として、先生はこの雑誌の表紙のデザインまでされた事は、戦後の私の場合と同様である。だが問題は、東畑先生がさらにこの雑誌に、研究中の建築論をも執筆されていることで、私が森田教授の下でモダニズムの研究をはじめていた頃、オランダ・スティール派の理論家、テォ・ファン・ドゥースブルグの「新構成芸術の基礎概念」をかじり読みした記憶があるが、この論文は既に戦前の「建築学研究」に東畑謙三の手により翻訳掲載されているという事実を知り、先生とちがってドイツ語が苦手だった私は、何とかしてそれを入手したいと思いつつも果し得なかったことを思いだす。

先生が自ら本邦初を誇りとされたル・コルビュジエ紹介の記事を載せられたのもまたこの雑誌であった。当時はあの分離派の運動などに示されるプレ・モダニズムの時期に当たっていたことは、余談ながら、武田博士が「きょう日コルブッシェルとかいう輩が……」などともらされたと伝え聞くことからもおしはかられよう。

東方文化学院京都研究所

東畑先生の数少ない作品の中での代表作といえる京都北白川の東方文化学院京都研究所の設計で、コルビュジエに深く傾倒していた先生としては、この建物が性格的にコルブからはほど遠いと考え、最初は断るつもりだったというが、この計画の中心人物、文学部の浜田耕作教授から、自作のスペインの僧院風のスケッチなどで説得されてつくったというロマネスク風の建物は「一言にして尽せば、関西でなくては見られない濃かな気韻のある建物である。かかる感じは関東地方に見る鈍重な厚ぼったい建物とは正反対である」(「新建築」1931)と、当時はなかなか好評だったようだ。今見ても、かなりの線を行くもので、後年の東畑謙三からは想像もつかぬ意匠的な才気の片鱗がうかがわれる。

ところが先生は、上記の学生時代におけるスティール派の理論の研究やコルビュジエの紹介などについては、時折回顧談の中で、かなり力を入れて語られる半面、こうした自作の建築に関しては、その後の数少ない作例のすべてをも含めて、ほとんど口を閉ざして語ろうとされなかったのは何故だったのか。もとより上述のプレモダニズムの時期に、いち早くモダニズムのスタイルでやりたかった先生としては不本意な作品だったのも事実であろうが、その後の経過から考えても、先生は建築作品の芸術的な質などにはそれほど関心



「建築学研究」の表紙。左が昭和7年6月発行、右が昭和14年12月発行のもの。

がなかったようなのである。後に先生は建築はサイエンスだといい、自ら建築家ではなく構成技師だなどと規定したりされているのだが、東畑建築事務所がなにわの地で、他に類のない「工場建築」専門の設計事務所として目覚しい発展をするのも、もとより先生のこうした考え方が基礎にあったからであろう。

「学究」から「実務」への転換

ところでこの「設計事務所の設立」という、先生の「学究」から「実務」への思い切った転換は、かなり唐突の感があるのだが、これについて先生は、その理由として、上記の建物の「設計の実作をやっている中に、建築家としての仕事をやるにはどうしても実務に携わらねばと考えるようになったからだ。」などと述べられるのだが、これがすべてではあるまい。これには他にもっと有力な契機と思われるものがある。その一つは先生が師事して来た武田五一博士の定年退官であり、今一つは先生御自身の結婚であった。結婚の相手は「日商岩井」の創業者岩井勝次郎の令嬢で、勝次郎から縁談を頼まれた関一（後の大阪市長）夫人が、武田博士に相談したことから、武田を媒酌人としての結婚であったという。結婚は昭和5年だが、東畑謙三建築事務所の開設は昭和7年、武田博士の退官もまた同じ年であった。

そして、その後の先生の事務所経営の成功については、何より義父勝次郎の影響が大と見られる。上記の工場建築への転換も、またそれを目的として計画された、事務所開設に先立っての海外視察旅行も、みな義父のさしがねによるものだったという。

東畑先生が「工場建築」の設計を始める動機となったというアルバート・カーンの設計によるシカゴのゼネラル・モーターズの自動車工場の見学も、また義父からの指示で前もってリストに上っていたものであった。

なにわの気風と後継者育て

なにわの商人は往々よく出来る若者を選んで娘婿とし、後継者に育て上げる例が多いといわれるが、建築の世界でも同様で、東畑先生は御自身のことについては棚上げだが、他の目ぼしい先例についてはよく御存知で、「建築と社会」70周年記念号（87-3月）の白石登喜男氏との対談の中で、後の日本建築協会の初代会長片岡安氏が、日本銀行大阪支店長だった片岡直温に見込まれてその養子になったいきさつに言及されている。「あの時片岡安先生は（旧姓が）細野安でした。それが東大を出て日銀の現場の監督に来たんです。『あいつ、ようやる男やな、おれの娘の婿にしようか』と言って、口説き落としたんです。」さらに「鹿島守之助がそうでしたね。あれも鹿島建設のおやじさんが外国へ行くとき同じ船に乗ってて、『ようやる外交官やな、あれ、なんとかならんか』ということで、守之助が鹿島家へ入ったんです。」

もとより先生も、御自身の経験から、また同じ心で「ようやる男」を求めて娘婿にし、後を継がせるやり方を実行されたと見られるのだが、この対談の時点（1982）で、既に社長の座を、娘婿の市川宏氏に譲られてしまっている。

市川氏が「ようやる男」である事は今更いうまでもないが、先生がどうして彼に白羽の矢を立てられたかについては詳でない。戦後私が京大で、森田先生の助手をしていた頃、卒業したばかりの市川さんと教授室の隣の小部屋で机を並べていた一時期があった。当時、市川さんは森田先生の設計のお手伝いで、「湯川記念館」のインテリアと取り組んでおられたのを思い出す。その頃だったか、はっきりとはしないが、風の便りに東畑先生が卒業生の中で「ようやる男」を所員に求められていると聞いたおぼえがあるのだが……。

建築家と経営の才覚

堀田善衛がガウディの弱点について、「建築家が芸術家であることをみとめながらも、なおかつ他の芸術家とちがう点は、何より才覚が必要なことだと痛感した」と述べたことがある。いかに芸術的、技術的に豊かな才能があっても、その才を発揮させるためには仕事をとることが先決で、それには何よりも経営上の才覚が必要となってくる。この才覚なるものは、もともと身についたものかもしれないが、建築家の中にはすぐれた設計の能力をもちながら、才覚に欠けた人が多いのも事実である。

私は大学で2人の建築家の講義を聞いた。東畑先生（工場建築）と今一人は安井武雄先生（施工法）であるが、御両所は何よりもこの才覚の有無をめぐって、まったく対蹠的だったようである。

それはあの戦争をはさむ冬の時代において何より両先生の事務所のあり方のおどろくべき差異として示されている。大手各社の製鉄所の仕事から軍関係の仕事へと、てんてこ舞の忙しさだった東畑事務所に対して、肝心かなめの事務所そのものを海軍に接収されるという安井先生の運命がこのことを何よりも雄弁に物語っていよう。

一方、安井先生に優るともおとらぬすぐれた建築家—芸術家でありながら、村野藤吾先生は、一面かなりやり手の商売人でもあったようで、ソロバン片手のかけひきの老獪さが伝えられていたりだが、その村野先生にしても、戦時中は晴耕雨読の生活を送られたとか。

東畑先生は自分と村野先生との違いを建築の手法の違いとして次のように述べておられる。「……村野先生と違いまして、私には芸術的な天性というものがないと思います。私には構成技師たる才はあるかもしれませんが、それ故始めからそういう式でやっております。やはり建築もこれだけ専門が分かれてくると、一人の人間だけではやれない、組織でやらなければならないというのが私の主義で、そのため構成してゆく人が上に立たないとできない。その点で私は構成技師だといいたいのです。」（「日刊建設通信新聞」85年1月30日号）

これにはかなり先見性に富んだ新しい考え方がふくまれているようだ。今や建築は、先生もいわれるように、規模的、機能的に巨大化、複雑化し、建築家個人の力ではやって行けないものが多くなろうとしている。その意味で、われわれは、21世紀を目前に今一度、東畑先生の考え方を再検討すべき時ではないかと思われる。

（むかい　まさや）

大阪のまちづくりと東畑謙三

大島　靖
元・大阪市長、現・財団法人 大阪国際交流センター会長

大阪万博、日本建築祭での活躍

東畑謙三先生は、そのお姿と同じように人間としての大きさを感じさせる方でした。厳しさの中にもいつも優しさをたたえた眼差しが印象的な温かいお人柄で、包み込むような大きな包容力がありました。

先生は京都の第三高等学校を大正12年に御卒業されました。同期には近鉄の佐伯勇さんがおられ、１級上には東洋紡の谷口豊三郎さんがおられました。三高の集まりで皆さんとよく御一緒しましたが、私は昭和10年の卒業で東畑先生は大先輩でしたが、後輩の私に親しみをもっていただいて、いろいろと教えて下さいました。

私は大阪市の助役時代、まちづくりを担当しており、総合計画局（現・計画調整局）、土木局（現・建設局）、建築局（現・都市整備局）などを見ていましたが、そうしたまちづくりの仕事に関して、東畑先生からさまざまなアドバイスをいただきました。そうした中で昭和45年に日本万国博が千里丘陵を会場に開かれ、東畑先生は、丹下健三先生、西山夘三先生などとともに万博会場の建設委員として参画され、会場で万博会期中に開催された「日本建築祭」では実行委員長として采配をふるわれ見事なイベントとして成し遂げられました。その後の沖縄海洋博では建設顧問として指導にあたられ、鶴見の大阪花博では政府苑の設計をされました。大阪万博当時は、大阪はもとより日本の高度成長の絶頂期で東畑先生御自身、油の乗り切っていちばん活躍されていた時期ではなかったでしょうか。

インテックス大阪と大阪駅前再開発事業

その翌年の昭和46年に、私は大阪市長に就任しました。まちづくりについてやりたいことは数多くありましたが、大きな都市計画というのは計画から完成まで30年～40年もかかり、１代の市長で出来上がることは少なく２代～３代にわたる場合も多々あります。そうした年月のかかる仕事なので、私は自分のやるべき大阪のまちづくりは、都市の基盤整備ではないかと考えました。もちろん市民のための美術館やスポーツ施設もつくりたいと思いましたが、当時まだ市民の生活環境整備が先進国の大都市に比べ遅れており、まず都市の根幹であるインフラを整備していこうと決心しました。

まず最初にとりかかったのは、ゴミ処理と下水処理の問題です。もともと市町村などの地方自治体の成り立ちは、隣同士住み合っている各家庭で出来ないゴミ処理、下水の処理など生活から出てくる汚いものの処理を皆で一緒にやろう、お金が必要なら出し合ってやっていこうというのが原点なのです。私はやるにあたって、大阪市内のゴミ処理、下水処理を100%やろう、そしてきれいな住みよい大阪の土台をつくろうと考えました。ちょうどその頃、スイスの環境設備メーカーの開発した「デロール式」というあまり公害の出ない新しいゴミ焼却装置があることを聞き、これを輸入して大阪市内に清掃工場をつくりました。東畑先生には西淀川の清掃工場を設計していただきました。そうしたことで大阪市内から出るゴミの全量を処理出来る体制を整えました。

一方、下水処理は地下に下水管を埋設する、人の目に触れない仕事で苦労と大変なお金のかかる性質のものですが、皆さんの努力でこれも100%完成しました。市内の道路舗装は、就任当時は砕石にアスファルトを流して固めた簡易舗装のものが大半でしたが、そうしたものをきちんとした舗装にしていき、これも計画を完全に達成しました。

こうした都市計画という仕事は、大変な年月のかかる仕事で南港の埋め立てなど、私の２代前の中井市長の頃に計画され、当時の吉田茂首相の尽力でドイツのマルク債から資金調達を行って実施し、私の在任中に完成しました。その南港ニュータウンの未来を象徴する建築物として「インテックス大阪」を東畑先生に設計していただきました。完成した「インテックス大阪」を目にした時、南港の事業に取り組んださまざまな思い出が蘇り、その素晴らしい建築デザインと相まってほんとうに感動しました。その後、「インテックス大阪」を会場として、数多くの国際見本市が開かれ、大阪の国際化に大きく貢献しました。

もうひとつ忘れてはならないのは、大阪駅前の再開発事業です。



大阪駅前再開発事業



大島元市長と東畑謙三氏

戦後、大阪駅前には日本最大の闇市があり、ここの整理、立ち退きには大変苦労しましたが、ここを再開発する構想も中井市長の時代から考えられ、私の頃になって本格的に動き出し、4棟の高層ビルが完成しました。ここでも東畑先生に構想段階から参画していただき随分とご苦労をおかけしました。

大阪市建築審査会会長時代の東畑先生

また、大阪のまちづくりの根幹ともいえる大阪市建築審査会の会長を東畑先生にお願いし、12年もの長きにわたって務めていただきました(昭和44年8月～56年7月)。そこで東畑先生には、建築、土木、都市計画、交通などさまざまな分野の専門家の意見を聞き、まちづくりの方針をまとめていただきました。その手際はまさにオーケストラの指揮者のようで、数多くの音を合わせる才能は見事でした。そこには、先生の建築や都市にかかわる技術と文化への深い洞察と、意見を集約して構想をまとめあげる手腕があり、先生が本来備えていた建築家の総合力を見る思いでした。

大阪はもともと商業都市として発展し、土地の区画そのものが非常に小さく、そこを再開発するにはさまざまな工夫が必要でした。そこで東畑先生は、審査会会長時代に小区画の敷地をまとめて開発し、都心の良好な公開空地の創出を誘導する「総合設計制度」の推進に力を入れられ、都市の快適性—アメニティの向上に力を尽くされました。また、大阪の景観づくりのひとつのアイデアとして、東畑先生が提唱されていたものに、水辺の景観整備があります。先生は中之島などの川の両岸の防潮堤の上に遊歩道をつくることを提案され、のちに緑のプロムナードとしてこれが実現しました。先年、亡くなられた元・関経連会長の日向方斉さんは、晩年、ロイヤルホテルで暮らしておられましたが、毎朝、その遊歩道を散歩するのを楽しみにされていたとお聞きしております。

水辺の整備にかかせない川の水質保全については、大阪市内の下水処理施設や下水道の整備を完全に行いましたが、市外の寝屋川上流から汚れた真っ黒い水が大川を経て道頓堀に流れ込んでくるのが残念でした。市長在任中に、パリで「第3ミレニアムの都市計画」に関する世界会議が開かれ、日本からは東京都の鈴木知事と私が招かれました。この会議は紀元2001年から3000年までの都市問題を話し合う壮大な会議でしたが、私が基調講演を行うことになり、高速道路などの通過交通路をすべて地下化し、地上の交通は早朝から深夜まで市民の足代わりになる無料バスを走らせる、寝屋川の川の中に下水処理施設をつくり水質浄化を図るなど、都市の未来像を話しますと、各国の代表者から非常に好評を得ました。

私は、大阪のまちづくりを考える時、いつも大阪市という地域だけを限定するのではなく、もっと広く大阪府全体、そして京阪神、関西というグローバルな視点で、近畿一円が共に発展していきたいという願いを込めています。そうしたところから大阪市の人口減少問題については、私自身、あまり気になりませんでした。大阪市内の地価上昇のため、郊外に家を持ち市内に通勤する人が増えるのは当然で、市内の人口が減っても府下全体で増えればいいと思っていました。但し、市内の若年労働者の減少は都市の活性化において非常に大きな問題で、活気あるまちづくりに若い人の力はかかせないものです。そうした若い人たちを呼び戻す方策のひとつとして、新婚者向け住宅をつくることにし、東畑先生にも御相談して何件かを手掛けていただきました。

その頃、庁内を見て回っていた時、たまたま新婚者向け住宅の設計をしていた若い独身の職員を見かけ「独身者が新婚者向け住宅を設計できるのか」と問いますと「僕の新婚の夢を託してこの住宅を設計しています」と答えたのが、今でも印象に残っています。多分、今では結婚して子供の2、3人持っている年齢になっていると思いますが。

趣味の世界に遊ばれた晩年

東畑先生のご趣味にふれますと、先生は国内外の建築や都市に関する古書や古地図を熱心に収集され、多くの貴重な文献を集められていたと伺っています。また、古い陶磁器などにも関心が深く、大阪市が中之島に東洋陶磁美術館をつくった際、先生から皿(青花牡丹唐草文盤／元時代1271年～1368年)と壺(青花雲龍文梅瓶／明時代洪部1368年～1398年)のご寄贈があり、とくに皿は重要文化財の指定をうけたもので、大阪市の貴重な文化的財産となっています。

先生は、第一線を退いてから、神戸の御影の御自宅で静かにお暮らしであったとお聞きします。永年培われた幅広い文化に対する造詣の深さが礎となり、おそらく晩年は、古書、古地図、古陶磁器に囲まれた薫り高い雰囲気の中で、広く深い教養の世界に遊ばれていたのではないでしょうか。私も83歳という年齢になりますと、そうした先生の心境がわかるようになってきました。

先生の御葬儀に参列させていただいた時、遺影の前で手を合わせながら、生前お好きだった三高の寮歌をお経の代わりに口ずさみ、先生にお別れを申し上げました。(談)

(おおしま　やすし)

関西実業界と東畑謙三の縁

——私的な思い出を含めて——

田中　益夫
関西ペイント株式会社相談役

古代エジプトの油壺

関西ペイント本社ビルの玄関脇に、御影石でできた優雅な形の壺が置いてあります。本社ビルの設計者、東畑謙三先生のデザインによるものでありますが、先生によると、この原型は古代エジプトの油壺で、当時の女性が化粧に使っていた植物油を入れる器だったそうです。ある時先生から、「君のところはペンキ屋で、建物を美しくする仕事をしているから、化粧油の壺を置くのがちょうどいいんだ。」と話していただいたことを記憶しています。先生が亡くなられてからもう1年近く経ちますが、玄関の脇の優美な壺を目にする度に、先生のお話ぶりの洒脱さや、時折「にやっ」とした表情で笑われるお顔を思い出します。

岩井勝次郎と東畑謙三

関西ペイントと東畑先生との関係は、関西ペイントの創業者岩井勝次郎と先生とが姻戚関係にあったことから始まりました。岩井勝次郎は、文久3年（1863年）、京都府北桑田郡旭村（現・亀岡市旭町）の農家に蔭山源右衛門の次男として生まれました。13歳の時、勝次郎の将来を考えた母のはからいで、母方のいとこにあたる岩井文助が大阪で営んでいた岩井商店に見習いとして入ります。岩井商店は、当時、神戸の外国人居留地で、主にアメリカ人、イギリス人、ドイツ人との交易を行なっており、彼らが母国から持ってきたランプのほや、釘、ねじなどの品物を引き取り、これらを大阪の雑貨商等に卸すのが仕事でした。外国人相手の商売に使う言葉はほとんどが英語でしたが、勝次郎は丹波の田舎の出身ゆえ、教育らしい教育を受けていなかったにもかかわらず、わずか2～3年で不自由なく外国人相手の商売ができるようになったといわれています。おそらく語学には天賦の才があったのでしょう。やがて、先輩格の店員が皆辞めてしまうにいたり、16歳の勝次郎が実質的に店を切り盛りすることになりました。それが店主の岩井文助に認められて、27歳の時には入り婿として文助の娘と結婚し、岩井勝次郎と名のるようになりました。

勝次郎の岩井商店は順調に業績を伸ばし、日本を代表する総合商社（現・日商岩井㈱）にまで発展しましたが、卓越した起業家であった勝次郎は、当時の国益にもかなう製造業の重要さを認識しており、各分野に計7社の製造会社を起こしました。そのうちの1社が関西ペイントで、大正7年に設立されました。

この岩井勝次郎の三女博子の嫁いだ先が東畑謙三先生であったわけです。東畑先生は、当時京都大学建築学科の武田五一教授のもとにおり、その武田教授の勧めで縁談がまとまりました。先生は三重県松阪の名家の生まれですが、地元では「東畑四兄弟」といわれた秀才の誉れ高い兄弟（長男精一は農学者、次男敬二は哲学者、三男が謙三、四男四郎は農林政務次官、いずれも故人）のひとりに娘を嫁がせることに、勝次郎はたいそう満足していたといわれます。

このとき、勝次郎は娘に宛てて、嫁としての心得をしたためた手紙を書きました。このことは先生には知らされておりませんでした。しかし、先生の奥様の没後たんすの中から勝次郎直筆の手紙を見つけて、ずいぶん驚かれたそうです。私どもにはその手紙を見せてもらうことはできませんでしたが、それは、「主人を大事にすること。お前も身体に気をつけよ。仲人さんには毎月あいさつに伺うこと。」などと、娘を案じる親心に満ちた内容であったといいます。

結婚後、先生は、「それだけ建築が好きで熱中するなら学究に留まらず、具体的な成果をあげる実務家になってはどうか。」との勝次郎の勧めもあり、昭和7年に大阪で東畑謙三建築事務所を設立しまし



関西ペイント本社ビルの玄関脇の壺



関西ペイント本社ビル外観

た。30歳の時のことです。さらに、「建築をやるなら住宅のようなものよりも、工場などの大きなものをやれ」という勝次郎の助言とともに資金援助を受け、欧米各地に先進の近代建築を視察しました。中でもアメリカの合理主義的な工場建築に大きな刺激を受けたそうですが、帰国後の初仕事が、勝次郎の会社のひとつ中央毛糸（現・東亜紡績㈱）の八日市工場で、昭和８年に完成しました。「餅は餅屋に」と考える勝次郎は、建築設計にあたっては一切口を出さず、東畑先生に存分に腕を振るわせたと聞いています。その後、勝次郎の事業が拡大するにつれ、関西ペイントを含む岩井産業グループの多くの施設の設計が先生に任されました。

勝次郎が東畑先生を高く評価するこんな話が残っています。当時の関西実業界を代表するひとりの伊藤忠兵衛（伊藤忠の創業者）が先生を非常に可愛がり、その熱心な仕事ぶりを誉めると、勝次郎はわがことのように喜び、目を細めていっしょに誉めたといいます。また、ある日勝次郎夫人が「邸の屋根が雨漏りするので見てくれ。」と先生にいったところ、勝次郎は「つまらないことをさせるな。設計家は屋根屋ではない。」と一喝し、これには先生も驚いたと後に語っておいででした。

関西ペイントの建築物の設計

岩井勝次郎が実業家として成功した秘訣のひとつに、人の能力を見抜き、優秀な人材を育てる才に長けていた点があったと思います。勝次郎が見込んだ人材が、関西ペイントをここまで成長させ、また岩井産業グループを含む関西実業界の発展に大きく貢献したといっても過言ではないと思います。そして建築家として見いだした人材はといえば、娘婿の東畑先生であったわけです。私は若い頃、創業者の意志で当社の建築物の大半を先生に設計してもらっていることを知りましたが、それを教えてくれた上司（生田さんという人でした）が、「あの親父はいつも気むずかしい顔をしておるが間違いのない偉い先生だ。」といっていたのを今も覚えています。

私が社長の時代（平成元年～平成７年）にも、建物の設計は基本的に東畑先生にお願いすることにしました。創業者の基本方針を堅持すべきだと思いましたし、設計と施工とを同じところでやると甘いところができる、施工から独立しきちっとした設計をするという業務が大切だ、と考えたからです。

その判断が間違いなかったことを思い知ったのが、阪神大震災の時でした。関西ペイントの尼崎工場には、製造工程別に多くの工場があります。その内のいくつかは震災で大きな被害を受けました。しかし東畑先生に設計していただいた合成樹脂製造工場はビクともせず、すぐに操業を再開することができました。私は、すぐさま東畑先生のところへそのことをご報告に伺いました。その日、私の話を聞いたあとの、先生の「にやっ」と笑われた表情を私は生涯忘れることができないでしょう。「田中君、私に任せておけば大丈夫ということがやっとわかったか。」とおっしゃりたかったに違いありません。「すぐにとんで来よって、かわいいやっちゃなあ。」と思って下さったかもしれません。それまで、東畑先生とは長いおつき合いでしたが、敬愛すべき先生であると同時に、厳しさや不可思議な怖さを秘めた方でもありました。しかし、震災の後のその日の先生は、まるで幼児のような無垢な笑顔で私を迎え入れてくれました。先生が私を認めてくれたようでもあり、また、達観した表情の先生にそれまでとは違った親しみを感じるようになりました。ただ、残念ながら、先生の生前のお姿を目にしたのは、この日が最後となりました。

偉大な親父

東畑先生は、若くして設計事務所を起こし、戦後の厳しい時代にも家族的経営で社員の生活を守り、一代で事務所をここまで大きくされました。また、清林社という不動産別会社をつくって事務所の経営基盤を強化したとも聞きますから、経営の才にも長けた方であったと思いますし、戦前戦後の関西実業界の発展に寄与した功績も忘れることはできません。ただ、私にとっては終生厳しい設計の先生であり、また、大きな書斎の内で海外の書物に囲まれて日々研鑽に励まれる教養人としての先生であり、あの「にやっ」とした笑顔に親愛の情を込めていえば「偉大な親父」でした。その「親父」から私が最後に受け取ったものは、ロータリークラブの会員でした。東畑先生の推薦で入会することになったのですが、実はこのところ、毎週の出席義務に少々閉口しているところでもあります。しかし、先生に泣きごとをいってみても、「君はまだわかっていない、そのうちにわかるよ。」といわれるだけでしょう。

私もそろそろ会社を離れる年齢に差しかかってきましたが、人が長生きすることは良いことだと思います。子孫に目標と生きる勇気を授け、まわりの人間に喜びと安心感を与えることができます。その意味で、齢（よわい）96で天寿を全うされた東畑先生は、私たちに大きな勇気を与え、様々な教訓を残してくれました。まさに、自分の人生の目標としたい敬愛すべき先生でした。私にとっては、96歳という年齢も、あの度量の大きさもなかなか越えがたい目標ではありますが、いつの日か先生にご報告できるようないい人生を送ってみたいものだと思っているところです。

（たなか　ますお）

文化人としての東畑謙三

伊藤郁太郎
大阪市立東洋陶磁美術館館長

青花牡丹唐草文盤と洪武の梅瓶

東畑謙三先生に最初にお目にかかったのは、先生が永年愛蔵されていた中国陶磁を当館に、ご寄贈いただけるとのお話があったのがきっかけです。

大阪市立東洋陶磁美術館の開館５年目にあたる昭和62年のある日、突然、東畑先生より直接お電話があり、じつは自分の持っている陶磁器を２点寄贈したいといわれました。私がどのようなものでしょうかとお尋ねすると何と「元染付の牡丹文の皿です」とおっしゃる。私は思わず「えっ、本当ですか」と大声をあげてしまいました。それほど先生からお申し出のあった「青花牡丹唐草文盤」は貴重なものです。重要文化財で、しかも元染付の皿の中で世界一との高い評価があり、古美術界で知らぬ人すらないほどの名品だったのです。私の声と対照的に、先生は落ち着いたお声で「美術館で貰って頂けますか」と言われました。私は「勿論です。当館にとってこれほど嬉しいことはございません」とお答えいたしましたが、その時の私は、まさに天にも昇る気持ちでした。同時にそれほどの貴重なものを「貰って頂けますか」とおっしゃる先生の謙虚さに心打たれる思いがいたしました。

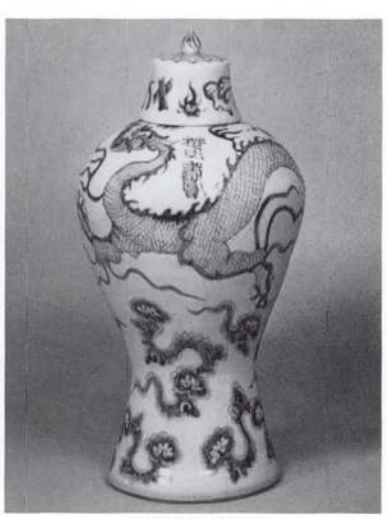
さらに先生は「東洋陶磁美術館を何度か訪ね、展示されている陶磁器の数々を拝見したが、明時代の洪武年間に作られた染付が無いので、それもあわせて寄贈しましょう」とおっしゃいました。重文の牡丹文の皿をいただけるだけでも素晴らしいことなのに、洪武の梅瓶までも、とのお話に私は２度驚かされました。

「青花牡丹唐草文盤」は、牡丹の花が違った角度で四輪描かれており、生地はあくまで白く、染付のコバルトの発色が目に痛いほど濃く強い。そして、文様自体が力強く、しかも傷が一点もない。これらの条件が見事にそろった元染付の世界一の皿です。一方、洪武の梅瓶は、そもそも洪武年間の焼き物自体が非常に少なく価値が高い上、その中でも先生がお持ちの梅瓶は非常に稀な蓋付のものです。このような素晴らしい名品をご寄贈いただけることは、当館にとって非常に光栄なことであり、大阪市民にとっても大きな財産となりました。じつは、この寄贈の話には後日談がありまして、先生にお聞きしますと、はじめは東京国立博物館に重文の元染付の皿を寄贈されるお積もりだったそうです。しかし、当館が開館されてから何度か訪れているうちに、当館の運営方針が気にいられ、翻意されたと伺いました。開館以来、一生懸命やっておりました当館のそうした姿勢が、厳しい先生のお目に適ったということは二重の喜びで、館長である私としましては一生涯忘れられない感慨を味わうことができました。

厳しい眼をもつコレクター

これを契機としまして、幾度か先生にお目にかかり、お話を伺うことが出来ました。中国陶磁の収集家としての東畑先生は、少し古いコレクターなら御名前を知らぬ人はいないほど高名で、しかも「厳しい眼をもつコレクター」として知られた存在でした。コレクターといっても、さまざまな方がおられ、ただ集められたコレクションの量の大きさを誇る人も数多い中、「厳しい眼」という評価は古美術界では最高の賛辞です。そもそも中国陶磁の価値はその凛とした厳しい美しさにあり、内面を厳しく律する人のみ、その真の美しさと価値が理解できます。おそらく先生は御自身にも非常に厳しい方で、その厳しさが先生を中国陶磁の世界へ向かわせたのだと思います。


青花牡丹唐草文盤


青花雲龍文梅瓶

また、先生は素晴らしい文章を書かれる方でもあり、平成２年に上梓された『ねずみ色からぼたん鍋まで』は、先生の真髄の一端を窺わせるすぐれた随筆集です。干支にちなんだ話を集められたものですが、題名からして洒脱さが滲み出ていますし、その題材が洋の東西を問わず、とりあげ方も斬新で語り口は絶妙、すべてにおいて含蓄の深いものです。これを拝見しますと、先生はおそらく文筆家としても名を残したであろうと思われるほどで、まさに「文人東畑謙三ここに在り」といった感がします。

ここに書かれた文章からだけでも、古美術への造詣の深さが窺われます。例えば「寅」については、おそらく世界最古の虎であろう中国殷時代の大理石製の虎に関するエピソード、ワシントンのフリア一美術館にある虎のブロンズ像の話、「卯」の章での「鳥獣戯画絵巻」に表された筆遣いにいたるまで、その指摘は徹に入り細に入り書かれています。読者が思わず「あっそうだったのか」と納得させられるほど専門家はだしであるが、決してペダンティックでなく、さりげなく教養の深さが滲み出るところに先生のお人柄がしのばれます。この随筆集はすでに絶版ということですが、ぜひ復刻して、一人でも多くの方に読んでいただきたいと思います。

心の広さ、自由さを象徴

先生の御趣味の広さは、こと陶磁器だけでなく、青銅器、拓本、油絵、建築・美術・工芸に関する古書、さらに晩年には古地図にも領域が広がっておられたとお聞きします。そうした収集の対象の広さは先生の心の広さ、自由さを象徴するものではないでしょうか。芸術は本質においてどれも同じで、精神の自由な人は自由に対象を選べます。その時々で最高なものを求めていくと、決して一つのジャンルにとどまっておられないのです。

このように芸術のあらゆる分野に感応する心をもっておられたからこそ、東畑先生は建築家として成功を収められたのでしょう。建築は総合的なもので、見る力、聞く力、感じる力があれば、おのずと空間が見えてくるものです。しかも秀でた人には優れた空間を感得し、それを表現することができます。先生は優れた建築家でしたが、ほかの分野の芸術家としても十分に大成されたと思います。

先生は、明治の人の気骨を感じさせる厳しさと同時に、慈愛の心をお持ちでした。私どものような若い者に対しても柔らかい気さくな態度で接せられ、お目にかかるとつい話が弾んでしまう方でしたが、そうした雰囲気にこちらが気を許して馴れ馴れしくすると、一喝されそうな緊張感をいつも感じながらお付き合いさせていただきました。私も仕事柄、さまざまな分野の優れた方々にお会いいたしますが、そうした中でも先生は非常に魅力のある方の最右翼に位置づけられました。

一度ゆっくりと先生のお宅にお伺いして、収集されたコレクションを拝見しながら、お話をお聞きしたいとずっと思っておりました。その人の持ち物を３点見れば、その人が分かるといいますが、先生のお都屋に一歩入るだけで、先生のお心を感じさせるものが満ち満ちており、そこにあるものの一点一点に先生のお心が通っていたに違いありません。それが実現できなかったことが残念でなりません。しかし、先生の最も愛されたもの２点を当館が所蔵しているわけで、いわば東畑先生は、東洋陶磁美術館の中に生き続けられているとも言えます。先生の中国陶磁への温かく厳しい眼差しを受け継ぎ、先生とお話ししているような気持ちで日々を過ごしています。（談）

（いとう　いくたろう）



清林文庫の目録と随筆集「ねずみ色からぼたん鍋まで」



清林文庫の一部

教育者としての東畑謙三

紙野　桂人
大阪大学名誉教授

昭和30年という時勢

私が大阪大学で東畑先生の指導を受けたのは、昭和30年（1955）の春から秋の初めにかけて、約半年間のことであった。先生が指導されたのは、最終学年前期における設計計画演習の総仕上げにあたる科目で、学生としては過去２年間の設計演習を通じて積み上げて来た建築計画・建築デザインの思考力、表現力を改めて設計実務の客観的な眼で洗い直される貴重な機会であった。このような科目の趣旨については、それまで設計指導を受けてきた足立 孝助教授（当時）からしっかり伝えられていたので、受講する約20名の学生は、設計に自信のある者も無い者もそれぞれに思いを新たにしてこの科目にのぞんだものであった。

当時、大阪大学工学部は大阪市内の都島区東野田町にあり、すでに戦後10年を経ていたが、まだ多くの校舎が空襲によって焼失した影響から脱け出せてはいなかった。そのため施設環境は極めて悪かった。設計指導が行われた建築コースの製図室は、実は戦前に機械工学科の実習工場として建てられたもので、屋根・外壁とも石綿スレート張りの建屋の一部に間借りしていたのである。天井はうんと高いが床はモルタル土間でほこりぽっく、設備としては製図板と木の丸椅子が雑然と詰め込まれただけであった。空中を配線が渡って、裸電球がぶら下がっていた。このような状況の下、先生の指導を受けるにあたって、そのつど、製図板を片寄せて部屋の中央に空きスペースを造り、そこに一台の製図台と椅子を置いて先生を迎えた。そこで批評を受ける学生と先生の廻りを全学生が囲んで、そのやりとりを聞かせていただくという形であった。先生は決して口数多く批評されることはなかったが、そのご指摘は的確で言葉はユーモアを含んで鋭かったことを良く覚えている。

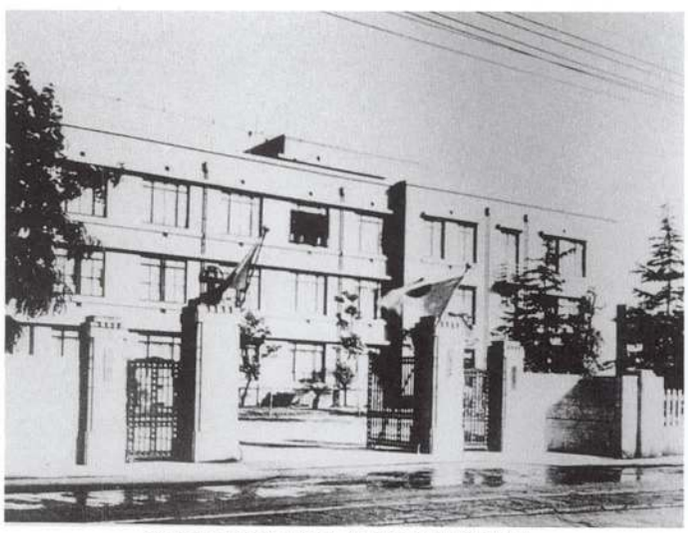
ところで昭和30年の時勢はどのようであったか。それを少しふり返っておこう。

戦後のわが国の立ち直りを指導して来た吉田茂内閣が前年の12月に総辞職し、リベラリストと言われた鳩山一郎氏の内閣となって、わが国の動きが新しい局面を迎え初めたのがこの年であった。いわば、戦後処理の時代から戦後成長の時代へと入る節目と言えよう。日本の総人口は約8930万人で、人口増加率はこの年あたりから第一次ベビーブームによる急増期を過ぎて、年平均１％程度の安定成長期に入っている。この年の産米は戦後最高との発表が秋にはあって、世に明るさが見えつつあった。しかし、建築学生の就職状況は、同じ工学部で造船学科卒業生などが恵まれていたのに比して、決して良いものではなかった。

社会の移り目を象徴する文化事象をあげると、文壇の旧世代を代表する広津和郎が「松川事件」を小説として発表し、他方、私らと同年齢の石原慎太郎が「太陽の季節」を刊行して世に衝撃を与えている。京大カラコルム探検隊の出発や南極観測参加の決定、原子力研究所の発足など新しい世界への参入が見え初めている。

大阪の建築界では、富士写真フイルムビル（東畑謙三）、クラブ関西（坂倉準三）、大阪厚生年金病院（山田守）などが前年までに完成し、この年には朝日座（旧文楽座・吉田五十八）が竣工している。また、新大阪ビル（村野藤吾）が着工している。これらの建築は、すでに姿を消したものもあるが、それぞれが人間的なスケールでデザインされた都市の建築として、私の心に今なお残っている優品である。特に東畑先生の富士写真フイルムビルは、今も御堂筋の一角に優雅な姿を見せてくれていることがうれしい。

東畑先生の指導を受ける前年、私は大倉三郎先生（京都工芸繊維大学教授・当時）の建築計画学を受講した。その講義でいまなお鮮


当時の大阪大学工学部（大阪市都島区東野田）


富士写真フイルムビル

明に記憶しているのが次の言葉である。それは銀行建築とはいかなる計画条件を持っているかについて話された後で、「ところで君達は、一生のうち銀行建築やオフィスビルを設計する機会が一度でもあれば幸運なのだ。大部分の人はそんな機会に出会うことは無いだろう。」という一言であった。私はこの言葉で、建築家というものへの道のけわしさ、その社会的な意味の重さ、それを目指すことへの覚悟のほどを教えられた。それだけに、その建築界の中心にあって活動しておられる東畑先生は、実に大きく見えたものであった。これに対して先生は、常に私たちと違わない座にあって厳しく批評を加えて下さった。有難いことであったと思う。

東畑先生の設計指導から

ほこりっぽい倉庫のような灰色の製図室に、先生はいつもきちっとした背広姿で姿勢正しく入って来られた。そして室中央に私たちが急ごしらえした指導の座を前にして一言。「ここは建築の設計をする所ではありませんな」と、決して嫌味に聞こえない気楽な雰囲気で言われたものであった。設計をする場所ではないと言われた意味について私は後でこう理解した。それはひとつに、建築設計をするもののマインドが豊かであるべきことの重要性を何かにつけて指導された点と結びついている。

例えばホテル建築の設計について、当時たいへん貴重であった米国出版の設計集を持参して見せて下さったが、言わば当時最先端の計画・デザインの情報に接することを大切にしておられたと思う。貧しい情報からは貧しい空間しか生まれて来ない。貧しい時代にあっても豊かなものを知る機会を持つこと、それを教えられたのである。そしてまた一言、建築家は機会があれば一流ホテルで食事するくらいでありたい。学生でも思い切ってホテルのロビーには入れ、あれはオープンな場所だから入れる。これは都市にある学生の特権だよと。ところで、当時の大阪ではホテルと言えば堂島河畔の新大阪ホテルぐらいであった。それは今はない。

そしてもうひとつ、これは私自身が先生に言われたことである。当時の設計草案は、全紙大のケント紙に直接書き込んで出すのが普通であった。このケント紙なるものは、少々消して書き直してもびくともしない。設計は、草案段階からこれに書き込んでいって修正を重ねて最後に仕上げる。だから私は、草案図面が多少汚れていても平気のくせがついていた。先生は私の図面を広げさせて、まずふっと息を吹いてほこりを飛ばして図面が良く見えないよと言われたものである。そして指導を受けたのは、君、図面は商品だよと。どんなに良いものが書かれていても汚れた図面は駄目だとおしかりを受けた。実はその背景にほこりっぽいわが製図室の環境があった。そして私自身の不精もわざわいしていた。だから先生は毎回、私の図面を見る時はあきらめたようにほこりを払われるのであった。こいつは駄目だと思っておられたかもしれない。

私の図面が汚れて見にくい理由のもうひとつは、他の人のように別の紙にスケッチして納得の上で書くことをしないで、思ったらそのまま書いたり消したりする少々いらちの性格から来ていたと思う。結果の良し悪しは別として苦労の跡が見えている所でもあった。先生はそのことは良く判っておられて、苦情を言われながらも図面は良く見ていただいた。逆に、いかにもすっきりとして清々しいが、内容は型通りという草案や図面については、「この人は真面目な人です。」あるいは「構造のできる人です。」という一言で終りであった。最終学年ではすでにゼミが決って、構造か材料か計画かという方向づけは学生自身一応持っていた。だから、構造学の方に興味があって設計はその次という者について、少々皮肉っておられた所もあった。

先生の指導で心に残っているのは、計画条件の解決を積み上げていって答えを出すことを重視する合理性を比較的強く求められたことである。それに対して私らは少々生意気になって、わざと斜行する空間軸を持ち込んだ平面を書いてみたりしたこともあった。そんな時先生は、「君は形から入っているな。」と指摘されて、建築の基本は直角に交差する所にあってそれなくして人は安心できないのだと諭されるのであった。建築の基本はライト・アングルにあるということの重要さについては、その後、私自身の考え方に大きな影響を及ぼしていると思う。それは真理だと私は考えている。

それと並んで先生が重視されたのは、窓と壁の相互の響き合いを外観の形に向けていかに心地良く定めるかというデザイン力にあったように思う。私は関西のとりわけビル建築に、その良い伝統があったように思う。大阪ガスビルにそれがあり、富士写真フイルムビルにもそれがある。新大阪ビルの村野藤吾先生は、そこからさらに新しい形を意図されたように思う。

東畑先生は、当時われわれが盛んに真似をしたル・コルビュジエの作風について、良いとも悪いとも言われはしなかった。ただ一度言われたのは、ル・コルビュジエの本を日本で最初に翻訳して、それを京大のセミナーで報告したのは私ですよ、と言うことであった。

それが「輝やける都市」であったかどうかは残念ながらうかがってはいない。またそれについて、どのように考えられたかもお聞きする時間が無かった。残念に思っている。

後年、私も大阪大学で建築学の一端を担うようになって、何かの機会にお会いした時、よく先生はこう言われたものであった。「学なりますか？」。その度に私は恐縮した。　（かみの　けいじん）

京都大学建築学科と東畑謙三

金多　潔
京都大学名誉教授

京都大学建築学教室本館

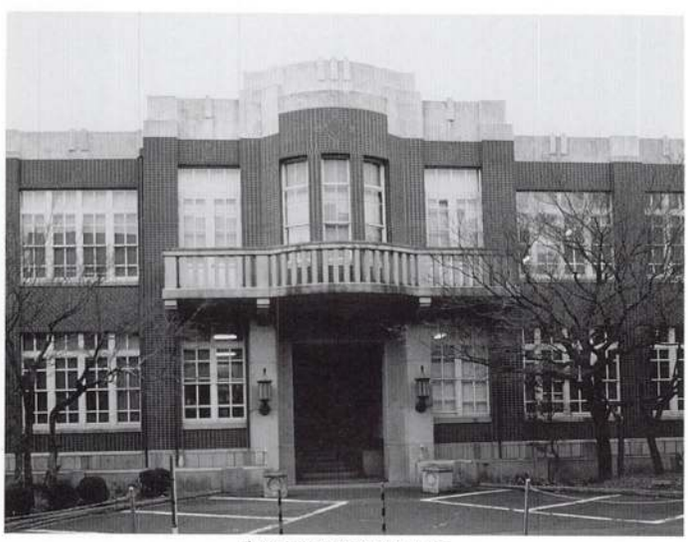
東畑謙三氏は京都大学建築学科の第４期生（大正15年卒業）である。

京都帝国大学工学部に建築学科が新設されたのは今から約80年前の大正９（1920）年８月のこと[*1]で、９月には新学期が始まり、教官４名、新入生14名という小さな世帯で出発した。東畑氏が入学された大正12年の時点では、学生定員は15名、教官は武田五一、天沼俊一、藤井厚二、坂静雄、森田慶一、太田喜二郎、片岡安、阪谷良之進、古宇田実、中牟田三治郎の10名となっていた。

教室は、最初、工学部大教場を使用していたが、大正11年６月、武田五一先生設計の建築学教室本館が竣工し、移転した。東畑氏は、新築第２期生に当たる。外壁にタイルを貼った鉄筋コンクリート造２階建てのこの本館は、木造かレンガ造の建物しかなかった京大構内で、はなはだ近代的な、外壁がチョコレート色に輝く、しゃれた建築物で、学生達にも大人気だったと聞いている。

この頃のことについて東畑氏は、ある座談会[*1]で、次のように発言されている。

“私は12年に入ったんですけれども、高等学校が三高なもんですから、卒業まぎわになってくると、どこへ行かんならぬかといろいろ迷う時代ですね。まあ工学部だから、あの辺ぶらぶら歩いて、どこへ行こうかなと友達と皆集まって相談するわけです。そのときに赤レンガのところにあれがポコッとチョコレート色の建物が建ったんですね。あの色がまあ若い者にとって非常に変ったいい色なんですね。それで建築というやつはおもしろいぞというわけです。(笑) 私のときは15人定員、三高からの応募が12人でした。そのとき30何人からの志願者があって、幸か不幸か11人受けて９人入ったですね。そのときには、こんなことを言うといけませんが先生がどなたであるか、坂先生がいらっしゃるか、武田先生がいらっしゃるか全然知らないんです。建物が変わっているものだからそれに惚れた。(笑) そして皆誘い合わせて来たのを覚えています。そのときはたしか建築志望で東京大学へ行った者は１人もなかったと思います。皆京都へ来たわけです。”


京都大学建築学教室本館

この本館は、今でも建築教室のシンボルとして、およそ当初の状態が良く維持されている。

学術誌「建築学研究」の編集

大正13年４月に、建築学科にも大学院が設置され、東畑氏も大正15年に大学院に進んで、武田五一教授指導のもとで建築意匠設計の研究を続けられた。また、研究のかたわら、その頃、建築学科で創刊された学術誌「建築学研究」の編集にも参加されている。その辺りの事情について、前述の座談会では次のような発言がある。

“私が大学院に、たしか９月に入ってその年から始まったと思います。あれは服部君が主としてやろうじゃないかということで、武田先生のところへ度々行くのですが、どうもうまく行かない。では大学院の学生だけでやろうということになりました。坂先生にも度々お願いに行くのですが、「わしは建築学だ」ということでなかなか書いていただけないのです。(笑) 創刊号はたしか大学院の学生だけで書いているはずです。森田先生のところへ行って原稿をいただいた記憶があります。広告などもとりまして、ペイしまして、損はしなかった筈です。毎月発行して、３年、いやもっと続いたと思います。私がなに（事務所開設）しましてから建築協会へ委託しましたけれども、表紙の図案を画いたのを覚えています。”（中略）

“漢文を横書きにしたのは、あの雑誌が初めてでしょう。私、編集しておって、返り点をどちらに打つかで、だいぶもめたことがありました。”

京大人文科学研究所分館

白亜のロマネスク風、京大人文科学研究所分館（旧・東方文化学院京都研究所）は、東畑氏が大学院時代に設計された建築であり、極めてユニークなものとして、今日に至るまで人々の注目を集めている。この建物の建設にまつわるエピソードを毎日新聞記者の斎藤清明氏が書いているので、その一部を要約させていただく[*2]。

“設計は工学部建築学科教授、武田五一に話が持込まれた。京大の時計台をはじめ、京都を中心に関西の近代建築を手がけた著名なプロフェッサー・アーキテクトである。

武田は、これを当時27歳、まだ大学院生の東畑謙三にやらせた。



京大人文科学研究所分館（旧・東方文化学院京都研究所：京都市左京区北白川東小倉町47）

「外務省が金を出し、十万巻のシナの本を入れ、それを中心に十五、六人の研究者が勉強するシナ文化研究所をつくる計画がある。ひとつやってみないか。」

東畑は、のちに日本建築協会会長もつとめる建築界の大御所となるが、この研究所が最初の大きな仕事となった。ところが、シナ文化と聞いて、東畑は悩んだ。近代建築の祖といわれるフランスの建築家ル・コルビュジエに心酔し、彼を日本に初めて紹介したという東畑にとって、シナ文化の建物といえば、「反った屋根に、柱に竜か何かを巻きつけて、およそコルビュジエとは程遠い」と考えてしまった。しかし、教授の命令を断るには腹を切る覚悟がいる。

そこで、この建物の設計の中心になっているのは誰か調べてみると、浜田耕作（元京大総長）とわかった。偉い教授とはいうものの学部のちがう文学部の先生だと思い切って訪ね、自分の気持を打ち明けた。すると浜田は、

「何をいうとるのや。反った屋根みたいな、わしも嫌いや。……建築というものはシナの研究をするからシナのスタイルという、そんなバカなことはない。建築は建築らしいものをやったらよい。」と東畑を説得したうえ、自分の描いた研究所のスケッチをみせた。

「わしの好きなのは、スペインやイタリアの僧院や。」

浜田はスケッチを何枚も画いて、東畑に示してこういった。

「僧院の感じを出してくれ。うんと強調してくれたまえ。そうすると落着いた気分になり、研究者はゆっくり仕事ができるんだ。」"

当初の設計では赤色だった屋根瓦を黒色に変えたり、塔の平面形を変更したりの妥協もあったが、昭和５（1930）年10月に竣工した。

中国の宮殿建築を模して建てられた東京研究所はラマ寺院のように荘重であり、南欧の僧院を模した京都研究所は軽快にハイカラであると評され、多くのシナ学者を輩出している。

東畑謙三氏は東畑建築事務所を主宰されるかたわら、昭和22（1947）年から同37年まで京大建築学科の非常勤講師として後輩の教育に当たられた。東畑先生の担当科目は「建築計画各説」の講義であった。筆者も昭和26年秋（第２学期）に先生の講義を聴講した１人である。その年の「建築計画各説」の内容は「工場建築」を中心としたものであった。

週に１度の講義の際、東畑先生から毎回いろいろな工場の設計図面（青写真）が教材として配られ、製鉄所や機械工場のレイアウトなどの計画の仕方について興味深いお話があった。教材の図面が大変綺麗に画いてあるのに感心した。筆者にとって、とりわけ強く印象に残ったのは「屠殺場」の設計計画のお話で、中庭に集めた豚を段々と誘導路に押し込み、消毒液で洗浄し、屠殺ラインに至る段階を、先生はユーモアを交じえて詳しくお話して下さった。

何年か後、筆者がサンフランシスコでソーセージを作る工場を見学したとき、東畑先生のその講義を懐かしく想い出した。

先生は、いつも定刻通りに教室に現われ、２時間近く立ったまま堂々たる体軀から出る朗々たる声でゆっくりと講述された。誰にもわかり易く素晴しい講義だった。

東畑先生は、また、大阪大学でも長年、建築専攻の学生に講義をなさっていたと聞いている。

（かねた　きよし）

〈参考文献〉
＊１）「京都大学工学部建築学教室六十年史」、京大建築学教室六十年史編集委員会、昭和55年８月。
＊２）「京大人文研」、斎藤清明、昭和61年１月、㈱創隆社発行。

日本建築総合試験所設立と東畑謙三

横尾　義貫
日本建築総合試験所顧問・京都大学名誉教授

日本建築総合試験所の創設

日本建築総合試験所は、いまから39年前、昭和39年４月に、建設省所管の財団法人として創設されました。昭和42年12月には現在の千里の地に、本館が開かれ、なお多少遅れて昭和47年には通商産業省との共管となっております。

戦後の日本は、昭和35年に成立した新日米安保条約と、池田勇人首相の提唱した所得倍増計画を契機として、安定した国際関係のもとに、驚異的経済発展を遂げますが、試験所の創設はまさに、その新生日本へ向けての飛翔の時期に当たっておりました。当時のシンボリックな出来事をあげますと、まず35年に香里に、37年には千里にニュータウンが開かれております。これらは日本各地に建設されたニュータウンの先駆けをなすものです。39年には、東京大阪を繋ぐ、世界初の高速鉄道、東海道新幹線が開通し、東京には欧米外で初めてのオリンピックが開催され、やがて45年には欧米外初の万博が、大阪千里丘陵に開催されます。

この時期は、日本が全体として、とくに関西が、開発への意欲が高かったように想像されます。関西建築界では増大する工事の質を維持するために、また新建材・新構法開発のために、材料・構造の諸試験を行う公的な、しかも高度のレベルをもつ試験機関を、大阪にもちたいという要望が強くなっていたと思われます。

試験所設立への東畑先生の貢献

当時の日本建築協会会長の東畑謙三先生は、副会長の塚本猛次先生とともに、その高い人望と組織力を発揮されて、地元の要望を集約して、見事に建設省認可の現試験所を実現されます。中央と地元の意向の一致、資金・土地・人に関わる諸問題を解決し、38年６月、近畿の建築関係６団体の会長懇談会をスタートとして、多角的な活動をされ、翌年２月には発起人会を開き、４月には認可に漕ぎつけておられます。驚くべき速さです。なおとくに付け加えておきたいことは、初代所長（のち理事長）には建築工学の権威坂静雄先生を、副所長（のちの事務局長・副理事長）には、優れた建築テクノクラートである、大阪防衛施設局長、錦田直一氏を招致されたことです。なおこれにより試験所のもつ特色、表現しにくいですが、科学性と申しますか、一種の気位のごときものが形成されてきたように思えます。これらの創設前後のご努力は、試験所の機関紙ＧＢＲＣ創立20周年記念号（1984・10）の座談会(1)「財団設立の経緯と将来への展望」の『東畑メモ』によって知ることができます。このメモは、先生を知る第一級の資料であると信じますので、いたずらに抄録することは止め、お許しを得て再録することにいたしました。ぜひご一読下さい。

東畑先生は、創設後も永らく副理事長として、また副理事長を辞された後も理事として、大処高処より試験所をご指導頂きました。厚く感謝の意を表したいと存じます。　（よこお　よしつら）

東　畑　メ　モ

昭和38．6．4　６会長（日本建築協会、大阪府建築士会、大阪建設業協会、日本建築材料協会、日本建築学会近畿支部、日本建築家協会関西支部）午餐会を新大阪ホテルにて開催し、建設省の勧奨による建築試験所を大阪に新設する件について協議。
塚本猛次日本建築協会副会長が中心となって本件に関し調査検討を行うことにした。
その後塚本氏を中心として大阪府関係者並びに６会の副会長、業務局長が再三会合してこの件についての調査検討を行い、この間建設省とも密接に連絡して一応の構想を纏めた。

7．27　塚本、田村史郎日本建材協会事務局長両氏が菅陸二大阪府



日本建築総合試験所


試験所機関紙「GBRC」創立20周年記念号座談会における東畑謙三氏（右から２人目）

建築部長、太田吾郎同次長、山本康雄同指導課長と共に左藤義詮知事に面接し援助方を要請。

7.30　6会長午餐会をガスピル食堂に於て開催、これまでの経過報告の後協議の上、試験所設立についての補助金交付を建設省に陳情することを決定。
なお、設立に関する件については日本建築協会に世話役を依頼することにした。

8.1　東京第一ホテルで建設省三宅俊治指導課長、松谷蒼一郎技官、塚本、田村、東畑の5人で食事。建設省の重点施策として、「特殊法人で建築材料の格付けをする試験所を作りたいという気運」に乗っている。
各種材料がたくさん出てきたので材料の格付けの必要が出てきた。その仕事をこなす機関が必要である。
ところが現在は日本建築センターの設立の話が進行中。建研の支所にしてもいいが、それではお上の話ばかりになってしまうので予算がつかないし、民間の助けを得ないといけない。
大阪で進んでいる話と、建設省の思惑が一致、「それはけっこうな話だ」ということで翌日8.2.

8.2　建設省住宅局長前田光嘉氏訪問。山本幸雄次官は立ち話。前田局長は部屋に入れてくれた。
そのとき同行したのは三宅俊治指導課長、尚明調査官、松谷蒼一郎技官。この話はぜひとも大阪でやってもらわなければいけないので「なんとか予算にのせよう」と松谷氏。設立についての建設省の対応に確信をもって大阪へ帰る。国としてはそんなに金が出るものではない。地方公共団体の援助がなければできないというヒントをもらう。

8.9　市の建築局長、部長、越田正勝課長へ以上の経過を説明し了解を求む。

8.26　科学技術センターで会議。「建築試験所」という仮名でやろうじゃないかということになった。

8.30　指導係松谷氏をへて建設省の次官、局長へ陳情、大阪府建築部の新部長深尾実郎氏の試験所予算案、すでに本省と打ち合わせ済みか？

10.1、10.7、10.26　とたびたび三宅、松谷両氏と会う。松谷氏が色々指示し、その通りに東畑が動く。

12.18　大阪の衆・参議員動かさねば予算がつかないということで、衆議員古川丈吉、大倉三郎氏へ陳情、菅野和太郎氏、原田憲氏、大蔵省主計官青鹿明司氏にもたびたび面会して陳情する。

12.23　建設省前田局長へ予算をつけてもらうよう電文で依頼。

12.25　建設業協会事務局長久米保衛氏、建築協会事務局長手島政男氏来訪、豊中で3,000坪位の土地が手に入らないかの相談。

12.28　田村氏が電報で、建設省の補助金として、「500万円ついた」と連絡してきた。

昭和39.1.6　鷲尾健三、塚本両氏と相談、試験所所長として坂静雄京大名誉教授、菅田豊重氏（大林組）の名が上がる。

1.9　塚本氏と資金の割当を相談。

1.16　大阪市へ。福知秀夫建築局長、増井敏克営繕部長へ説明して試験所設立の資金、人事等について大島助役まで話が上がった。
建設業協会へ、錢高輝之大阪建設業協会会長、渡辺節大阪府建築士会会長へ説明。

1.17　募金額の割当内容決める。人員候補決定。所長に坂先生、専務理事に錦田直一大阪防衛施設局長。

1.19　錦田氏と正式に面会。「防衛庁の許可さえあれば行く」との事で力を得る。

1.21　建設省訪問、前田局長、三宅課長、尚調査官に錦田氏のことも報告、了承。

1.23　中村文夫日本建材協会会長、竹中練一日本建築協会副会長、東畑、塚本、府へ陳情、補助金要請。

1.24　中馬馨大阪市長、大島靖助役へ市からの補助金要請及び陳情。中村氏理事長就任を内諾。

1.27　発起人懇談会。中村理事長、坂所長決定、募金案決定。

2.4　建設省を訪問し、人事決定を報告。錦田専務理事を了解してもらう。

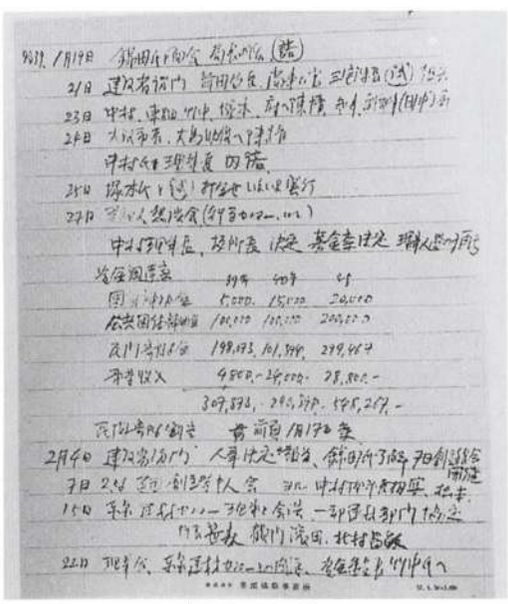
2.7　設立発起人会議。

2.15　建材試験センター理事一行（笹森巽所長、顧問浜田稔東大名誉教授、北村敏正通産省窯業建材課長）をむかえる。「建材試験センターといっしょになれ」という申し入れは「設立の動機が違うので不可能」と返事する。

2.26　府企業局宅地開発部企画課長五百蔵芳明氏が千里ニュータウン内に敷地があるという話をもってくる。主導者は吹田市開発協会。
①錦田氏の件で防衛施設庁長官小野裕氏他に了解を得なければいけない。
②(財)吹田市開発協会常務理事、吹田市総務局長前田清氏に土地をわけていただく交渉に行くこと。

3.3　尚氏から電話で、錦田氏の件、了解つけた。三宅穣審議官へ依頼したところ、3月31日付で局長の職をはずし本部付きにする。文書で地位給料を記載して願書を小野長官に出せ。そこで39年4月1日にさかのぼって錦田氏を出す。

4.2　日本建築協会手島政男君、財団法人届出提出。



東畑メモのコピー

東畑謙三と日本建築協会

佐野　正一
日本建築協会名誉会長、安井建築設計事務所取締役会長

日本建築協会創設の経緯

東畑謙三（1902・明35年出生～1998・平10年死去）は、生涯に数多くの団体活動に関わったが、そのなかで最も深い関心をもち業績を残したのが日本建築協会であった。古い話になるが関係があるのでこの協会創設の経緯からはじめる。

日本建築協会は1917（大６年）３月30日関西建築協会として創立した。理事長は片岡安。理事は池田実、葛野壮一郎、武田五一、宗兵蔵、波江悌夫、設楽貞雄の６名。事務所は大阪市東区今橋の片岡事務所内にあり、この年から機関誌「関西建築協会雑誌」を発行し、1919（大８年）、会の名称を日本建築協会と改称、誌名は「建築と社会」に改めた。1926（大15年）社団法人設立許可されている。

明治期以降の大阪・神戸地区は、東京が政治都市として整備が進むに対し積極的な商業振興によって産業都市として大きく発展し、特に大阪では新しい都市計画手法を導入して近代都市への脱皮を計るべく着々態勢をととのえつつあった時期にある。建築界に於いては欧米流の基礎技術の導入が急速に進み、アールヌーボー、セセッション等の新思潮が次々伝えられ、新しい開発については時代の流れとして比較的積極的に取り入れられた。

明治期大阪で活躍のめだつのは辰野金吾(1854～1919)、河合浩蔵（1856～1934）である。ともに東京に学んで大阪で活躍の場を拡げた。辰野は大阪で後輩の片岡安（1876～1946）が日銀技師として日銀支店建築を終えたあとを誘ない明治37年辰野片岡建築事務所を開設し、以後大阪市公会堂、大阪市庁舎、新聞社、銀行等目立つ公共及び民間建築物の設計を次々実現することになる。同窓に京大教授武田五一（1872～1938）があり、欧米の建築・技術の新しい情報、判断の紹介を得て、互いに啓発し技術の向上をはかり、業務の改善あるいは法令の規制について改善の建議を行い、また都市住宅の計画、設計に提案を行うなど時宜に適しためざましい貢献を果たした。

片岡安の功績はなんといっても近代都市にとって洋風建築が必須であることを社会に認めさせ、欧米流の建築家というあたらしい仕事ぶりを大きく認識させることであった。併せて建築にたずさわる人達のネットワークをつくり、「関西建築界」を形成してお互いの交流と外への発言をはかるようにしたい、また関東には「建築学会」という組織があるが、関西ではもっと建築技術を手がかりに幅広い関係者の人間的な接触をめざした組織にしたい、そういう考え方だったように思える。学会の組織とは違って、関係者であれば幅広く参加を受け入れて自由活発な組織であった。創設者片岡の功績は大きい。

竹腰健造（1888～1981）が建築協会の役員になるのは大正11年からであるが、昭和12年から副会長として片岡会長の補佐の役割を引き受け活動を継承した。しかし今度は苦労の多い役まわりだった。昭和17年戦時体制下で建築界は組織変革の論議の対象にされ、日本建築学会、日本建築協会両会を何らかの方法で合併すべきものとする雰囲気のもとで、竹腰副会長はその議論の矢面に立って昭和17年より昭和20年に亘り折衝の中心にあったが、戦局の進展に伴い昭和20年合併問題は当分延期することに決着し、以降この問題が再びとりあげられることはなかった。建築工事は一般はほとんど停止して建築思潮論議どころではなくなっていた。戦局は不利、雑誌発行の為の用紙入手が難しくなり「建築と社会」誌はついに昭和19年４月号から休刊、昭和22年１月号からようやく再刊となるのである。

第２代日本建築協会会長竹腰健造の任期は1947～1958（昭22年４月～33年３月）である。日本建築学会との合併論議で緊張した経過はすでに終わり戦後は一からやり直しの時期である。東畑謙三の協会への参加はこの時にはじまる。

戦後の建築界の大きな出来事は1950（昭25年）建築士法・建築基準法改正であろう。これに関連して日本建築士会が1952（昭27年）発足し、日本建築家協会も1956（昭31年）発足した。竹腰会長の示唆で建築協会内の組織だった建材部門が1950（昭25年）関西建材会として再発足（昭和９年に創設していた）、1957（昭32年）に社団法人関西建材協会となって独立、1959（昭34年）に社団法人日本建材協会になった上で1965（昭40年）、建設、通産両省認可の「社団法人日本建築材料協会」に改組改称して今日にいたる。戦後の職能団体が次々成立してくる状況の下で、日本建築協会のような職能横断的な懇親団体の将来をどうするか新たな課題をかかえることになった。

近畿建築会館の設立

第３代建築協会会長尾崎久助の任期は1958～1964（昭和33年４月～39年３月）であり、第４代建築協会会長東畑謙三の任期は1964～1971（昭39年４月～46年３月）である。東畑は昭和２～６年は京大大学院で恩師武田の下で欧米の新建築をじっくりと研究し、この間に処女作となる東方文化学院京都研究所の設計を仕上げ、岳父岩井勝次郎のすすめで欧米の建築視察の旅に出る。見るものすべてに驚嘆感銘の連続だったが、当時はドイツ等で盛んだった新建築運動の所産にはそれほど興味を示さず、かえってアメリカのアルバート・カーンの剛接合の鋼フレーム工場建設のたくましさと建設管理の近代的なゆき方に強い共感を覚え、帰国早々、1931（昭７年12月）、独立して建築事務所を開設し、エンジニアリングを総合してあたらしい空間構成をひらくことを大きな目標として行動をはじめる。

東畑は、建築設計は専門分野の技術を総合して成立するものであり、設計事務所はその実践の場となるという考え方だった。1941(昭16年) 京都大学講師、1948 (昭23年) 大阪大学講師委嘱、後輩の育成にも手をかしながら着々業績を重ねた。いわゆる産業建築という新生面を開拓する努力が注目された。在学当時からのつながりで藤井厚二教授を助けて京大建築学科機関誌「建築学研究」の発行を続け、のちに建築協会もその発行事務に協力することとなるのも片岡—藤井—武田—東畑のつながりの濃さを物語っている。

昭和22年竹腰健造が第２代建築協会会長になったことから東畑謙三は竹腰のよき補佐役として役員に登場する。最初の仕事が事務局整備だった。日本建築協会の事務所は大正６年の創業以来、大阪市内のビルを転々とし昭和７年以降は北区中之島の朝日ビルに在った。直接戦災こそまぬがれたものの、戦後の建築関係団体の再興に当たって狭隘で不都合だったところから、昭和31年東区北浜三丁目に空家となっていた伊藤邸跡を協会事務所に恰好のものとしてこれを取得すべく交渉し、若干の増築改修を加え地下１階、地上４階の堂々たる近畿建築会館にまとめたのは東畑謙三（会館設立委員会委員長）の功績である。

旧建物取得に1200万円増築等含む総事業費1600万円に対し、協会の支出は100万円残りは借入れで賄う方針だった。借入金は５年後から返済し完済して東畑の仕事は終わった。開館は昭和31年10月、この時期自己建物をもつ団体は稀であったから協会は他から大いに羨ましがられた。友好団体の関西建材協会、日本建築学会近畿事務所、創立間もない大阪府建築士会、日本建築家協会関西支部が日本建築協会と共に同居し近畿建築会館の名実ともに大阪に強力な建築センターの出現を印象づけた。この会館時代は昭和58年まで長期つづくのである。(上記建物は元大倉三郎氏の設計による)

建築協会の事務所問題はさらにつづく。会館の建物は取得したが土地は大阪府の所有だった。昭和50年代に入って府から土地の買い取りの要請があった。協会としては財政上困ったが、第５代会長塚本猛次 (1910年生) 任期1971～1982 (昭46年４月～57年３月) は昭和55年買い取りを決断し、心要な資金は借入れにより約4100万円を調達して、大阪府と売買契約を締結し所有権の登記を完結した。借入金返済は平成３年完了した。

ところが昭和58年７月隣地ヒサヤ大黒堂から事業拡張の目的で協会の土地建物一括譲渡の希望申出があり、第６代会長福田朝生 (1917～1984) 任期1982～1984 (昭57年４月～59年10月) は慎重検討の結果約３億円で申出に応ずることに決し、移転先として大阪市で新築の大阪駅前再開発ビル第三号棟内で適当な物件を取得し、これに内装等設備を行い、1983 (昭58年12月) 開館の運びとしたものである。この一連の事業は、東畑謙三元会長の周到なアドバイスによって終始誘導されたことを忘れることはできない。

日本建築総合試験所の誕生

いま一つ東畑謙三が建築協会の立場から大きな努力を払って実現したのが、財団法人日本建築総合試験所の創設である。昭和38年建築基準法関連で必要な認定・建築材料の試験等の業務機関を東京と大阪に設立したいとする建設省の勧奨に従って大阪では建築協会が関係建築団体と連絡しながら具体化のため調査検討をはじめることとなった。

東畑謙三はその推進役となり、塚本猛次がその補佐となって、建設省住宅局三宅俊治指導課長、松谷蒼一郎技官等と接触し、また大阪府建築部山本康雄指導課長、日本建材協会等と連絡して官民の出資、土地建物機材の手配、人材確保等の重要事項を遂一具体化し、その間に建材を主管する通産省担当の建材試験センターの取扱いとの調整等曲折した経過があって、国9985万円、大阪府、大阪市各１億円、民間寄付3.2億円、計約6.2億円を財源とし千里丘陵に土地を取得、建物２億２千万円、機械器具その他約３億円の施設を整え1964 (昭39年２月)、日本建築総合試験所は発足した。(以上の数字は昭41年８月刊の要覧による発足時の計画であるが、その後の状況変化で昭和39～47年度の合計で、国の支出は485万円に大阪府は１億１千万円、大阪市5500万円計約１億７千万円に減じ、代って自動車振興会、兵庫県から計約１億２千万円が投資されている)

初代理事長には建材協会会長中村文雄、専務理事には元防衛施設局長錦田直一、試験所長には京大教授坂静雄が夫々就任した。同年４月建設大臣設立認可、昭和47年８月建設省、通産省両省共管、関西にかねて必要とされていた公的試験研究機関が誕生した意義はすこぶる大きく、関西建築界戦後の画期的な出来事といってよい。

第２回日本建築祭と当時の状況

東畑謙三が建築協会会長として尽力した仕事の一つに第２回日本建築祭がある。東畑謙三は1964 (昭39年) 建築協会会長に就任し、1967 (昭42年) は協会創立50周年を迎えていた。戦後数年を経て経済界は大発展をとげ、なかでも建設界は明るい希望あふれる状況にあり、建設関連建築材料の生産も飛躍的に近代化と生産増強が好調だった。協会は創立50周年を回顧しつつ記念式典をあげて今日の盛大を祝った。この年から機関誌「建築と社会」は大判に姿をあらためた。

1970 (昭和45年) 開催の決った日本万国博覧会開催に向けての関係者挙げての大きな動きが始まり、世界各国からの参加を得て「人類の進歩と調和」のテーマをかかげて世界にひろがる人間の叡知のかぎりを示す創造物を会場一杯にくりひろげ、戦後日本が敗戦から立ち直り、あらん限りの力を結集した成果として誇示する機会となった。

わが建築８団体（日本建築協会、日本建築士会連合会、日本建築家協会、日本建築学会、全国建設業協会、建築業協会、全国建築士事務所協会連合会、全日本建築士会）主催、建設省、大阪府、大阪市、万国博協会後援のもとに昭和45年７月23日、会場お祭り広場に於いて関係者４千人を集めて大会を開催、東畑謙三は建築祭委員長として主催８団体を代表して高らかに万国博の成功を祝って建築祭をうたいあげたのだった。東畑にとってめぐりあった好運な役まわりであったが建築界60年の起伏を思い起こし、戦後が終わってこれよりはじまるあたらしい姿を思いやって感慨深いものがあったにちがいない。

(さの　しょういち)

製図室の思い出

東　孝光
建築家、大阪大学名誉教授、千葉工業大学教授

昭和27年から昭和32年までの５年間、大阪大学で建築を学んだが、設計製図については足立孝先生と東畑謙三先生に指導を受けた。最初は足立先生から手ほどきを受け、それから東畑先生から課題が出て、手取り足取りで設計演習を見て頂いた。

時間をかけて中身を育て積み上げていくという設計の呼吸をまだ全然知らない学生の当時の私たちには、エスキース・チェックの当日が大騒動で、直前までスケッチをまとめるのに大わらわ、そこへ定刻には先生がおいでになる。当時まだ40歳代の先生は、きちんと三つ揃えの背広に中折れ帽、革の鞄という紳士然とした姿で埃だらけの製図室に悠然とおいでになる。たちまち我々悪童連に囲まれて、今日は何番から、と宣言されると、どっとどよめきが沸き起こるといった調子であった。

たしか学生ホールか食堂かの課題で、私はＲＣシェル構造の連続ボールトの屋根をデザインしたつもりで、カーブしたスラブの断面をコンパスをつかって平行線で描いていったところ、東君、シェルでも何でも、力が伝わっていくのだから根元は先端より厚みが増えていくのだよ、と自らフリーハンドで私の線を直して下さった。そのとき初めて、建築の中を重力が伝わっていく、その表現というものが先生の鉛筆の動きと重なって、強く鮮やかに実感されたこと、40年以上経った今日でも鮮やかに目に浮かぶ。

東畑先生に推薦状を書いて頂いた郵政省の試験の二度目の挑戦に成功し、上京してしばらくは設計の仕事に夢中、その後坂倉事務所の大阪アトリエに移って同窓会などで先生にお目にかかる機会も持てるようになったが、先生の温顔と時々とび出すユーモアは製図室の時と少しも変わらず、とてもうれしかった。

1992年から３年にかけて、京都の北白川で京都大学の先生の住宅を設計することになった。現地を訪れて住宅地を歩いてみると、戦前戦後のしっとりとした住宅に囲まれて、中央に京大人文科学研究所の白いスパニッシュの建物が目について、なにか懐かしく、惹きつけられるようなたたずまいであった。まわりの住まいも、どこか、この静かでやさしく、凛としたこの建築に、外壁や屋根の色づかいでつながっている。私も心に決めて、外壁の色をこの建物に合わせて使うことにした。この建物が、京大の東方文化研究所として、武田五一先生の下で大学院時代の東畑先生が担当されたことを、あとで東畑事務所の方々から教えられ、あっと思った。百万の言葉での説得も良いが、自分を磨いて凛としていれば、廻りはそれを囲むようにして自ら学んでいく。東畑先生の製図室でのお姿は、終生変わらぬものだった、と今更のように教えられる思いであった。

（あずま　たかみつ）

ベントパイプのことなど

尾亀清四郎
株式会社三晃空調相談役

①昭和21年創業の三晃空調の工事経歴書を見ると、昭和26年の頃に呉羽紡績発注で呉羽紡績鈴鹿工場の消火給排水衛生設備工事を、６ケ月で約2200万円を施工している。別に大林組の下請で京都伏見深草の駐留米軍施設の空調暖房衛生設備を、３ケ月で5000万円を施工している。この年の年商は僅か１億４千万円余であるから、これらの工事は当時の三晃にとっては大工事であった。三晃空調は、前年から斎藤社長以下の主力が沖縄米軍工事に従事していたので、鈴鹿と伏見の工事は私が担当した。

東畑先生は鈴鹿の現場へ時々お見えになり、そのつど懇切なご指導があった。ある日排水用通気管（ベントパイプ）の頂部が露出しているのを目ざとく指摘され、工場建築といえども美的感覚の大切なことを体験させて頂いた。

②東京オリンピックのあと第１回日本建築祭があり参加したが、第２回日本建築祭は千里の万国博会場で挙行された。時の主宰者としての東畑先生の颯爽たる英姿が今も彷彿とする。

③日本建築総合試験所の設立については、私共の設備士会にまで先生がわざわざお運び頂き、出捐団体の一つとして要請があったことは感激そのものであった。設備士会は、その後建築士法の改正で建築設備士が生まれ、㈳建築設備技術者協会となったが、横尾先生が試験所の理事長にご就任のとき私にご指名があり理事の一員に加えて頂いたが、これも東畑先生のお蔭と今に感謝している。

④“建築士の日”が制定されたとき、大阪府建築士会小西岬会長の発案で“建人会”と称して、東畑謙三、森忠一、浦辺鎮太郎、田中良太郎、高橋慶夫（順不同）の諸先生を招き、㈱大阪倶楽部で午餐を共にしていろいろご高説を拝聴した。士会からは小西会長と副会長として足立孝先生と私が参加させて頂いた。毎年の建築団体新年互礼会の席上、東畑先生が該博な智識でその年の干支の話をされたことは有名であるが、建人会での機智に富んだ談論風発もまた大変有意義であった。

その後メンバーに少し移動があり、森忠一、高橋慶夫の両先生に横尾義貫、佐野正一、小西岬の諸先生と私も加えて頂いて建人会が続いているのは誠に喜ばしい。

（おがめ　せいしろう）

十二支の話

小西　岬
大阪府建築士会名誉会長、小西設計会長

東畑先生が社長であった当時の、昭和13年４月に私は長谷部・竹腰建築事務所（現・日建設計）に就職して、７月から約３ケ月間、日本製鉄株式会社広畑製鉄所に設計打合せのため駐在していた時、東畑事務所から出向の後の不二建設株式会社の社長をされた故山口吾郎氏と同室で仕事をしたのが、初めての接触であった。

先生と大阪倶楽部でお会いする機会が割合多かった。「小西さんは頭の毛が少いから、散髪代は半額ですか」と冗談を言われたが、「恰好をつけるのが毛が少ないと難しくて逆に割増金をとられます」と切返したものである。

私が大阪府建築士会の会長をしている時、業界の長老を年一回大阪倶楽部へお集り願って、懇談を兼ね建築士会の運営についてご意見を承り、ご指導を戴く機会を持った。ご出席を賜ったのは東畑先生を始め、森忠一・田中良太郎・浦辺鎮太郎・高橋慶夫・塚本猛次・佐野正一・横尾義貫・堀内三郎・上西喜雄（順不同）の諸先生であるが、東畑先生は大先輩として常に座をリードし和気靄々の中に、色々と有益なお話を承る事が出来た。

また、在阪業界団体の新年会・忘年会では毎年先生より十二支の蘊蓄あるお話を承ったが、原稿なしで細かい数字や難しい名前を並べて、長時間に亘りお話を承る事が出来、楽しみにしておられる方が多かった。

私は十二年間、㈳大阪府建築士会会長の職にあったが、後任の会長について就任６年目位から真剣に考え、これと思う人に当ったが旨く行かず、最後の切札の積りで、東畑先生を訪ねて市川宏氏の就任をお願いしたが、期待していた良い返事を頂戴出来なかった。思えば先生は、市川宏氏を将来、建築協会の会長にと考えておられて、建築士会の会長になる事に賛成されなかったのであろう。

先生は京都帝国大学工学部建築学科を大正13年に卒業されたが、大学卒業の建築家は少なく珍しい時代であった。建築事務所の揺籃期に事務所を開設され、事務所を認識して貰うのにご苦労が多かった事と推測している。戦中戦後の受難時代を切抜け、人材の育成を心掛け、加えて得意先に恵まれて我国でも屈指の大建築事務所に育てられた。業界の先輩、同窓の大先輩として世話を焼き、面倒をよくみられた頼りがいのある方であった。　（こにし　みさき）

東畑謙三先生を憶う

西川　幸治
滋賀県立大学教授、京都大学名誉教授

東畑先生にはじめてお会いしたのは、1960年の春のことであった。京大イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊に参加することになり、隊長の水野清一先生に同行し、事務所を訪ねたのである。チャナカデリ遺跡の大きい岩石を動かすチェンブロックやベルトコンベアーを紹介していただき、これらの調査資材を現地へ運送した。調査を終え、報告にうかがうと注意深くきいてくださった。やがてメハサンダ寺院跡の調査で、私たちははじめてガンダーラの仏像を発掘することに成功した。さっそく先生に報告すると「それはよかった」とわが事のようによろこんでくださった。

東畑先生は人文科学研究所にも、時おり顔をみせられ考古学の研究室で水野先生はじめ、貝塚茂樹、長広敏雄先生らとたのしく談笑しておられた。この北白川の人文研の建物は浜田耕作先生のデッサンをもとに、当時大学院在学中の東畑先生が手がけられた建物であり、研究所には知己の方も多く、先生にとってとりわけなつかしい建物だったのだろう。ヨーロッパ中世の僧院をおもわせるこの瀟洒な建築は、装飾的な柱列を配した玄関まわり、連続したアーチの列柱の回廊でかこみ、その中に池や井戸を配した長方形の中庭、鐘楼をおもわせる書庫を収めた塔屋など、その細心な意匠はスパニッシュ・ロマネスクといわれ人びとに親しまれている。

東畑先生は美術にとどまらず、古書籍・古地図などにも造詣が深く、その蒐集につとめておられた。その一端を見せていただき大いに堪能させていただいたのも、ついこの間のように思いだされる。それにしても、建築家として深い趣味と丹念な蒐集に示されたたのしみと苦心について、もっとうかがっておきたかったと悔まれる。

東畑先生は私たちのガンダーラ遺跡の調査に、深い関心をもっていただき、調査隊の報告会にはいつも顔をみせ、激励してくださった。平成２年２月13日、日本建築協会建築クラブの第214回朝食会に、私は「ガンダーラ仏教遺跡」について話す機会をあたえられた。早朝にもかかわらず出席いただき、恐縮したのもなつかしい思い出である。それにしても、ガンダーラの報告をする先生を失ったことはなんともさびしく、悲しい。

先生のご冥福をお祈りするしだいである。　（にしかわ　こうじ）

阪急・石橋の事務所

平田　定男
平田建築構造研究所相談役

私が東畑先生に初めてお目にかかったのは、京都大学建築科の１年生の時である。先輩で大阪で設計事務所を経営されている工場建築の権威の先生であるとのことであった。高知県の田舎の中学から高知高校を出て入学した私は建築学科とは住宅のプランを考えたり、商業建築の美しいパースを画く所だという知識しか持合せていなかった。工場建築というものが、構造計算で柱とか梁のメンバーを決めて設計するものだという講義を聴いて驚いたものである。建築学教室の西側の第１講義室であったと思うが、あの教室は外にもみぢの木が一面に植えられていて、少し薄暗い教室であったが、長身の先生が黒板に平家の工場のトラスを画いていた記憶が残っている。

第２回目は卒業して１年目の昭和17年である。私は卒業と同時に鴻池組に入社して阪急沿線の石橋に下宿した。石橋と蛍ケ池の中間に青風荘という当時としては高級住宅地があった。私はそこに親戚の家があって、その家から蛍ケ池の駅に出る途中で、偶然先生の事務所の標札が目に止って立寄ってみた。先生と先輩の佐々木保さんにお目にかかった記憶がある。最近、この話を思い出して誰に話しても、そんな場所に設計事務所がなあと言う返事が返って来るばかりである。市川さんも御存知ない様だし、東畑事務所の重役さんに会って、その話をしてみたが全々通じなかった。私は事務所が外壁がグリーンの木造２階建であったと記憶しているけれど、昔のことであるので私の思い違いではなかったかと考える昨今である。

第３回目は終戦の年のたしか６月頃でなかったかと思う。それもまた意外な所で、長岡天神にあるお寺の離れで先生にお目にかかっている。その経緯は少し長くなるが説明をする。それは故坂静雄先生と故錦田直一先輩（日本建築総合試験所顧問）が関係している。

私は昭和19年、病気のため鴻池組を退社して坂静雄先生の紹介で錦田さんの勤務していた軍需省の近畿管理部に就職した。昭和19年のことで敗戦間近いとは知らず、軍需工場を山間の空からみえない場所に疎開さすべく適地探しの仕事をしていた。工場建築の権威の東畑先生に御協力を御願いしようと錦田さんの発案で、私が説得の大役をおおせつかったが、話の内容は何も記憶していない。その時先生が白いカスリの着物で帯をきちっとしめた姿で私を送って下さったこと、その道の両側に背の高い竹林が続いていたことだけは憶えている。先生に初回に御願いしたのは、兵庫県綾部の山間の適地を判定して戴くことであって、それが丁度終戦の８月15日であった。御供の錦田さんの話によれば、綾部の駅の手前の汽車の中で、終戦の御詔勅をお聞きになっている。この話も案外知っている方は少ないかも知れない。

私が先生に最後にお目にかかったのは何時のことであったか。平成５年に私は病気療養のため高知県の生れ故郷に引き揚げていたから、それより少し前の平成２・３年の京大建築会の忘年会の時であったと思う。御元気で乾杯の音頭をとられた姿を記憶している。昨年平成10年の忘年会では先生の姿はなく、病気が少し回復した私が出席者の最年長者として音頭をとることになった。先生に初めてお目にかかってから、約60年の歳月が過ぎている。　（ひらた　さだお）

『空間』という言葉

藤森　照信
東京大学教授

私が住んでいる東京の中央線沿線にはシャレた西洋館がいくつかあるが、その一つを見に行ったら、表札に「東畑」とあった。おそらく名高い農政学者の東畑精一氏の家と思われるが、その時は、精一氏と謙三先生が御兄弟とは知らなかった。後に兄弟と知り、もしや謙三先生の設計かと思ったが、そうではなかった。

東畑謙三先生の思い出といえば、私の場合、まずあの西洋館が浮んでくるのだが、しかし、今はもうない。東畑兄弟ももうおられない。

謙三先生には昔話を聞きにうかがっただけで、個人的に特別深い関係があったわけではないが、昔話は面白かった。武田五一先生の話ではじめて手がけた京大の人文科学研究所のこと、そのスパニッシュ様式のこと、あるいは若き日に接した分離派の運動のことなどを話してくれた。

そうしたなかで、一番面白く、かつ興味深く思ったのは、「空間」という言葉の由来についてだった。

現在、建築について語る時に「空間」という二文字を使わないわけにはいかないが、その二文字をはじめて使用したのは自分であると先生はおっしゃられた。そして、その二文字を造語したのはかの哲学者の三木清だというのである。

なんとなくずっと昔からある言葉のようだが、昭和の初期に、三木清が造語し、東畑謙三がはじめて使った。

その頃、青年建築家であった謙三先生は、建築を語るうえで、構造でも材料でも装飾でも様式でも場所でもない、建築の一つの大事なものについてなんとか言語化したいと考えていた。まだ名もないそれについてはドイツ語に“Raum”という語があり、そのドイツ語を日本語に訳せばいい、と考えた謙三青年は、三木清に訳出を依頼した。当時すでに高名な京大の哲学者であった三木に依頼できたのは、義兄だったからにほかならない。そして、三木が「空間」の二文字を与えてよこしたのである。この二文字を、謙三氏は建築雑誌用の文の中で使い、世に出た。

モダンデザインの隆盛の中で、様式や装飾に代る言葉を求めていた当時の日本の建築界は、空間の二文字を受け容れたのである。

以上が東畑先生の昔話だが、それが正確にはいつ何という建築雑誌のことで、初出の文というのが何なのか私はまだ確かめてない。どなたか、関西建築界の人で確かめてくれれば幸いである。なんせ、京都生まれの言語なのだから。　（ふじもり　てるのぶ）

堅実で繊細なデザイナー

三宗　司郎
昭和設計代表取締役社長

私は、昭和46年に神戸大学大学院修了と同時に、恩師鳥田教授のお勧め通り、東畑建築事務所へ入社させていただいた訳ですが、もう当時でも先生は、時々しか設計室にお姿をお見せにならなかった、雲の上の存在であったと記憶しています。

入社面接の時に、「良い服を着せてもらって、両親に感謝しなさい」と言われたことも忘れられない一言ですし、その昔は工場建築の大家といわれ、その頃は、全ての分野に亘り、卓越した才能を開花させておられ、丁度、完璧な円熟の時代に私はお出合い出来た事を幸いに思っております。

入社して与えられた名刺の肩書きが「技師」。実務は即、サイロの基礎伏図、鉄骨軸組図、鉄骨詳細図、架構図、雑配筋図 etc、極めて基礎的な技術を習得する訓練でスタートをしました。学校を離れればすぐに「建築家」の仕事が出来る様な錯覚をしていた私にとって、何時(いつ)意匠図が描かせていただけるのか、内心、心配していました。勿論、数ケ月の後には、立面図の検討や、大型の開発案件や医療施設等を担当させていただく様になったのですが、先生の堅実なお考えでは、構造を具体的に理解していない設計者は、きっと考えられない存在だったと思われます。

設計室を廻られる先生は、特に若い人々に対しては懇切丁寧に指導下さいました。最初の訓練を通して、力学や納まりを中心に設計される先生ではないかという先入観を持ちかけた浅薄な私の印象を、次の事件が、見事に打ち砕いたのです。

確かバルコニーのデザインに、私が半円のキャンティレバーをデザイナーよろしく作図していた所へ先生が来られ、質問され、「君はどんな形に見せたいのか。」と、「半円に見せたいのです。」とお答えすると、「それなら、コンパスで半円を描いてはダメだ。」と。「何故ですか。」と図々しくお尋ねすると、「半円は下から見上げると楕円に見える。半円に見せたければ、楕円にするべきです。実際のケースを色々見て確認しなさい。」と指導され、あれだけ、学生時代に建築心理学に関心を持ちながら、製図板に向うと、何故か、定規とコンパスに振り廻されている自分を大いに反省したものです。

月日が流れ、円満退社の後に、昭和設計に飛込みの面接を受け、入社させていただいて今日に至っていますが、何より嬉しかったのは、私が担当した神戸ポートアイランドプールとワールド記念ホールの作品展を先生に見ていただいた時に、「よくここまで出来たね。」とおっしゃっていただいて、何となく、中退者に卒業証書をいただいた気持になったことです。

感謝と共に、御冥福をお祈り申し上げます。合掌

(みつむね　しろう)

学成りますか。

森田　司郎
京都大学名誉教授、日本建築総合試験所所長

京都大学を定年退官した際に、今までの自分自身の過ごして来た軌跡をふり返る機会があった。その際に一つの軸となったのが、出会った「人」であった。私のこれまでの生き様、人となりに大きく影響を与えた人物をたどると、「東畑謙三先生」の存在に出会う。

東畑先生との濃い出会いは、私が東畑建築事務所に入社した昭和34年4月から退社までの1年2ケ月間である。この特別の期間を除けば、せいぜい数年に一度程度のものであった。パーティーの会場などで久し振りに御挨拶申し上げると、温顔をさらにほころばされながら、決まって「学成りますか。」と尋ねていただいた。これが私にとっては、他に代え難い刺激になってきた。それと言うのも先生の知遇を得たにも拘らず（これは私のひとりよがりかもしれないが）、事務所を短い期間で辞したことに対する自責の念が、いつも私の意識にあったからである。先生に喜んでいただくには、研究者として少しは一人前にならなければと、怠け心に鞭打ってきた。

最近はご自宅で御療養中と聞いていたが、いつかはひょっこりとお会いできて、「あんたも名誉教授か、この頃は名誉教授の値うちも下がったもんや。」と、にやっとされるだろうなあ、などと想像していたものだった。

「東畑謙三集」を先生の御元気の間に出版する企画が、京都大学の布野修司先生の編集で進められ、私も「東畑建築事務所の思い出の記」と題して小文を寄稿したが、ついに出版を待っていてくださらなかった。

東畑先生は往時の事務所では厳しい経営者でもあったことをよく承知している。その後も、厳格さを加えられたと聞き及んでいるが、外にいる私共にはその側面を、むしろ見せないように配慮しておられたのであろう。現在、私が勤務している日本建築総合試験所にとっては、東畑先生は厳しい育ての親であられたようだ。今でも理事会の議事の検討などの折に、「これは東畑先生がおられたら、厳しく質問されるな。」と言う反省が聞こえてくるのに驚く。

今度お会いした時にはどんなアイロニーがお聞きできるかなと、あの温顔を思い浮かべながら想像していた楽しみが消えてしまったのが悲しい。ともあれ、私にとっては慈父のような存在であり続けている。

(もりた　しろう)

関西建築界の巨人たち

——リアリズムの風土のなかで——

石田潤一郎
滋賀県立大学助教授

1．昭和初年の三巨頭

本号の主人公、東畑謙三に、回顧談をお願いしたことがある。1932年（昭和7）に彼が事務所を構えようとしていたころについて話しているなかで、こんなことを語った。——関西の建築界には大立者が三人いる。片岡安、渡辺節、松井貴太郎だと教えられた、と。筆者が安井武雄さんや村野さんはどういう位置づけだったのですかと尋ねると、有名になってはいたが、三人の次の世代のホープというふうに見られていた、という意味の返答であった。重ねて、武田先生は？　と彼の師について尋ねると、もちろんこの三人と同格であるというニュアンスだった。

片岡・渡辺・松井の3人が大立者と目されていたという事態は、昭和初年という時代と考えあわせると、なかなか意味深い。そして納得できるものである。

片岡安はいうまでもなく、関西建築界に君臨する存在だった。彼には3つの重要な業績がある。一つは設計報酬という観念を社会に認めさせたことだ。彼とそのスタッフは日曜も祭日もなく働きつづけることで彼らの職能の価値を主張し、10年間の苦闘の末にようやく、設計者には設計料を払わなければならないことを大阪人に認めさせる。片岡は、若い者が逆らったりすると、「建築家が設計料を貰えるようになったのは一体誰のおかげだ」と怒ったそうだが、この一言は彼の自負をよく示している。

二つ目は洋風建築と社会の対応関係を築いたことであろう。片岡安は大阪財界の大立者、片岡直温の養嗣子であり、そこを糸口にクライアントを開拓していった。だが、彼はそうした個別の需要の喚起だけにとどまっていなかった。資本主義社会、そして近代都市にとって洋風建築が欠くべからざる存在であることを社会にも建築界にも認めさせたのである。片岡安は、整備された街路網とそれにそって櫛比するオフィスビル——という都市空間のイメージを社会に提示し、大阪をそうしたすがたに変えることに努力を傾注した。

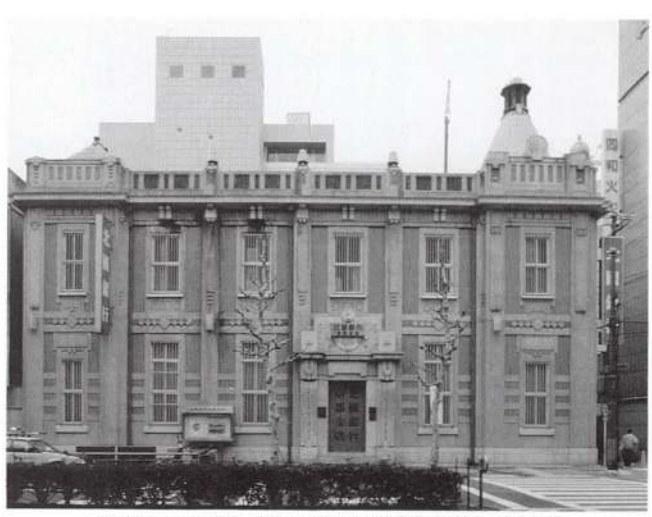
三つ目の功績は、洋風建築にたずさわる人間、特に建築設計者のネットワークをつくり、「関西建築界」と呼ぶに値する組織を生みだしたことである。明治末期までの関西は、孤立した建築家たちがそれぞれの持ち場で砂粒のようにバラバラに活動しているという状態であった。その後急速に若い建築家の数が増えてくる機をとらえて、片岡安は、建築家が連帯して、相互に交流し、また外に対して発言するネットワークを築きあげる。この組織化の終着点が、1917年の関西建築協会(のちの日本建築協会)の結成である。

1931（昭和6）年には事務所を石本喜久治にゆずって、財界人としての活動が主となるが、昭和21年に亡くなるまで、日本建築協会の会長を務めつづける。それだけでなく、前記の石本喜久治との共同のほか、自分が手がけてきた都ホテルの設計を村野藤吾を登用して引き継がせるなど、建築界を左右する実力を保っていた。

二人目の渡辺節は、洋風建築の性格が1920年代にいたって変化してきたことの意味をだれよりも的確に見抜いた人物である。その変化とは、非日常的なモニュメントから、賃貸オフィスビルに代表されるような投資の対象の一つへというシフトにほかならない。彼の事務所のモットーは「安く、良く、早く」である。その中の「早く」に渡辺の真骨頂が現われている。すなわち、建設資金は借入金なのだから、金利に配慮しなければならない。また、建設行為がビル経営という事業の一環である以上、一刻も早くそこから利益を上げて投じた資金を回収しなければならない。そこまで配慮した設計を渡辺は日本で最初に行なった。

渡辺節はクライアントに対し「これだけのお金を余分に出すと、


片岡　安


北國銀行京都支店（設計：辰野片岡建築事務所、1916年）

これだけお得になりますよ」といったアドバイスが可能な人物だった。第一次大戦中の好況期の不動産ブームにおいて経営顧問的な建築家を待ち望む声がでてきた。それを体現して見せたのが渡辺節だった。1929年の昭和恐慌以降、設計事務所の経営は逼迫し、高齢の建築家が次々と引退するような状況になる。そうしたなか、渡辺は財界人から厚い信望を勝ち得ており、ひとり旺盛な活動を続ける。東畑謙三が評判を耳にしたのは、まさに渡辺の地力が際立っていたこの時期のことである。

三番目の松井貴太郎の名はやや意外かもしれない。松井は横河工務所の大阪事務所長である。1906年（明治39）東京大学卒業で、歴史様式をはっきり否定した最初の世代である。同期の岡田信一郎、3期下の後藤慶二と親交があり、彼らとともに反様式の論陣を張った。東京・大手町の日本工業倶楽部に彼の主張を今日でも作品として見ることができる。

こうしたヤンチャな革新性の一方で、松井はクライアントに対しては信義を重んじ、律儀に職務を果たした。横河工務所は三井財閥と鐘紡の仕事を多く受注してきたが、1920年代以降、大阪事務所はそれらの傘下の工場建設に忙殺されることになる。「美術建築」を次々と手がけていた若いころを忘れたように、松井は工場を黙々と作りつづける。松井のそうした姿勢は、横河民輔に心服し、忠勤を尽くした心情の表われである。その中でも彼が実力を蓄えていたことは、丸の内に長大な姿をとどめる三信ビル（1930年）に明らかである。久々にジャーナリズムをにぎわせたこの作品によって彼の成果が高まったことは疑いない。その手腕とまじめさ、それに横河工務所の安定した経営とがあいまって、彼を関西建築界の重鎮と目される位置に押し上げていった。

2．武田五一なかりせば——

最初に触れたように、東畑謙三は三人の大立者のことを口にするとき、武田先生も同格という前提で話した。それはもとよりそのとおりで、彼が世を去ったときの追悼記事を見ても「関西建築界の父」「建築意匠界の泰斗」といった形容が並ぶ。

しかし、武田五一のどこがそんなに偉かったのだろう。三人は上に見たようにワン・アンド・オンリーの業績を築いていた。彼らがいなかったら、関西の建築はかなり違ったものになっていただろう。そう考えた延長で、もし武田五一がいなければ何が起きたかを想像すると少し困ってしまう。たとえば、辰野金吾が明治建築界の父と呼ばれるのは結局のところ、人材を供給するアカデミー、需要を喚起する官界と財界、施工を遂行する建設業界——この三角形のすべてを辰野が作り上げたからである。これに対して、武田五一が身を置いた関西建築界は、まず公共建築は副次的な存在であった。そして、主たる需要を生む財界は、住友のように自前の営繕組織を育てるか、フリー・アーキテクトへ依頼する構図が武田とは関係なくできあがっていった。その人材は、辰野金吾が作り上げた東京帝国大学や工手学校から供給されていたし、建設業界も同様である。最後まで残ったのは建築家の職能の社会的認知の問題であるが、これを片岡が力ずくで解決したのは先に見たところである。

もちろん、武田五一には百数十件の建築作品と種々の工芸デザイン、ストリート・ファニチュアがある。早稲田の佐藤功一と並ぶ、最大のプロフェッサー・アーキテクトといってよい。しかし、足立裕司氏がいうように武田作品に対しては「平板であるとか、メリハリがないとか、彫りが浅いといった指摘」が存在する（「建築家武田五一・人と作品」（博物館明治村編『武田五一・人と作品』）所収）。



日本興業銀行本店（設計：渡辺　節、1923年）



同　営業室

武田に対するネガティブな評価は実は彼が現役のときからあって、京大退官記念の席で、弟子が「先生には代表作がないのでこれからがんばって下さい」とスピーチしたという。それどころか、大学の同期であり、ともに関西建築界をになってきたはずの片岡安は、『建築と社会』の編集者が「武田博士の建築作品」という言い方で話題にすると、「武田君に建築作品なし」と言い捨てたらしい。

こう見てくると、武田五一なんて要らない、といいたくなる。だが、試みに1901年に京都高等工芸学校に赴任しなければ、かわりにだれが来たか、を推測してみよう。東大の１期上には名古屋高等工業学校教授になった鈴木禎次がいる。同期では首席を争った森山松之助(第一銀行から台湾総督府)、１期下には文部省営繕に勤めた中條精一郎あたりに可能性があった。いずれも腕達者で、中條精一郎などは曽禰中條事務所を主宰する以外の人生がありえたと空想するだけでも楽しい。だが、冷静に考えて、彼らの手腕が関西建築界と適合したかどうかは疑問である。それというのも、関西は1910年前後からセセッションが大いに広まる。様式折衷の名手たちがそこで所を得るとは考えにくいのである。

1916年(大正５)、葛野壮一郎は「大阪の建築」と題して次のように述べた。「大阪は万事実行の地で、東京の批評家が机の上で彼是論議して居る間に、此の土地では遠慮無く実行する。ヌーボーとかセセッションとか、兎に角新味の勝った流行的様式がドシドシ取り込まれて、思い切った物が出来る」。

「ヌーボーとかセセッション」の影響を示す作品として早いものには、武田五一の京都府立図書館(1909年)や京都市勧業館(1910年)がある。町場の建築では設楽貞雄の日本毛織会社本店(1908年)、山本藤助商店（1909年）が目立つ。さらに大正年間にはいると、片岡安、河合浩蔵といった大家が「歴史様式のセセッション化」を図っている。こうして葛野がいうような「流行的様式がドシドシ」生まれる。葛野自身、大江ビルディングなどで「新し味の勝った」デザインを提示する。

こうしたとき、関西では歴史様式の価値を強く主張する建築家はいなかった。本来は反体制的なセセッションが体制そのものになってしまう。土着の美意識とシンクロしたといってよい。こういう状況下では、鈴木禎次が来ても中條精一郎が来てもお互い不幸なことになっていただろう。やはり武田五一が来て正解だったのだ。

３．リアリズムとロマンティシズムのねじれ

もう一点、搦め手から武田五一の存在理由について考えてみよう。それはリアリズムとロマンティシズムという観点である。近年、古山正雄氏(京都工芸繊維大学教授)が関西の若手建築家を論評して「カ行の男」と「ナ行の男」という分類を示した(『関西建築フォーラム』)。姓がカ行の音ではじまる人間、すなわち岸和郎、木村博昭、久保清一といったところは建築作品と現実との関係に関心をもっているという意味でリアリストである。それに対して、ナ行ではじまる人々、すなわち根岸一之、新田正樹、中村勇大は現実を超えたものへ関心が向かっているという意味でロマンチストだ――という分類である。いかにも古山氏らしいアッとおどろく着眼点で、なによりリアリズムとロマンティシズムという古典的な二分法が、事態を解釈するのにこんなに有用だということを教えてくれるところがすばらしい。この視点を近代建築史のなかにも導入してみたい。近代日本においては、早い段階から建築は工学であるとする見方と芸術であるとする西洋的な価値観との対立が存在した。だが、二十世紀に入ると、この対立とは次元を異にする分裂が生じる。学問の世界


日本工業倶楽部（設計：松井貴太郎、1920年）



三信ビル（設計：松井貴太郎、1930年）

では、具体的な建築物の設計・建設に結びつく問題を重視する実務主義と、学問それ自体を目的とする学理主義の分裂が生まれる。そして、ここで問題にしている設計の世界でも、クライアントの満足を重視し、個別の問題に最適解を与えることを設計の最大の目的とする立場と、あるべき「建築」像を追求することが設計の目的とする立場の分裂が生じる。前者をリアリズムと呼ぶことに問題はないとして、後者をロマンティシズムとすることには語義を拡げすぎという印象が生じるかもしれない。しかし、ロマンティシズムが「山のあなたの空遠く」にある幸福を求める心性だとすれば、個々の依頼を超えた「建築」を追求する姿勢をそう呼んでまちがいではないのである。

大阪の風土がリアリズムに徹しているというのはしばしば指摘されるところだ。大正期の建築家について、向井正也氏(神戸大学名誉教授)は本誌の建築協会創立70周年記念号にこう書いている。「『もうかりまっか』とか『それでなんぼになる』などがログセの勘定高いなにわの商人を相手に仕事をするからには、一般に彼らの建築観が東京の建築家のそれとは本質的に異なるものになったのは当然のなりゆきといえる」。三人の大立者をこうした観点から見ると、片岡安はあきらかに現状密着型である。目の前の問題を解決することでかろうじて職能が成立していた明治の建築家であればむしろ当然であろう。渡辺節は、「もうかりまっか」に対して「これだけもうかりまっせ」と即答できる建築家であった。リアリズムを研ぎすませることで後発だった渡辺の事務所は存在価値を得た。松井貴太郎はリアリストとロマンチストの顔を使い分けたといえる。彼の代表作が東京にしかないのは、若い日「新しいものにしか生命はない」と揚言した彼のロマンティシズムを関西が育てなかったからであろうか。こうしたなか、武田五一はやはり異色だった。彼は一条の線、一幅のステンドグラスの美しさを建築全体の総合的価値に優先させることを肯定した。そして、「今までにない何か」を求めて、表現の幅を少しずつ広げつづけた。そのロマンティシズムがいささか微温的なものであったとしても、建築の自立した魅力を示すことに大きな意味を持った。今日、一般人の武田五一ファンが増えているのも、武田作品に漂う無条件な楽しさの故であろう。

太平洋戦争後のモダニズムの深化は、上に述べたようなリアリズムとロマンティシズムの構図を崩壊させた。渡辺節の「もうかりまっか」リアリズムは、モダニズムの合理主義に補強されるように見えながら、前提となる歴史様式への評価を突き崩されて破綻する。武田五一の「サムシング・ニュー」ロマンティシズムは、モダニズムの語法が無装飾の幾何学形態に収束したことで窒息する。

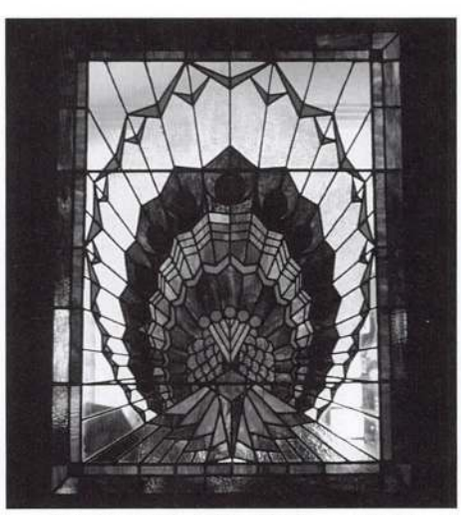
新しいリアリズムは、やがて東畑謙三や佐野正一がもたらす。組織による技術的革新と計画学的考究とが「現実」の望む解決を可能としていった。一方、新しいロマンティシズムは村野藤吾によって姿を現わす。その手続きはアクロバット的であった。まずリアリズムによって教条的モダニズムの「スチューデント・ワーク」を非難する。そのうえで、神戸新聞会館(1956)・新大阪ビル(1958)・米子市公会堂(1958)・早大文学部校舎(1960)など、ザッハリッヒな手法を採用し、そのなかで少しずつモダニズムの語法を拡張していく。その積み重ねによって、村野流のサムシング・ニューの魅力を知らしめることに成功する。東畑謙三も佐野正一も村野を誰よりも高く評価している。リアリズムを突き詰める意義を知る者は、そのむつかしさも知っているのであろう。

酷薄な現実が夢想をきたえる。そして、一途に夢見る力が「現実」のアキレス腱を射抜く。明治の昔から二十世紀末の今日まで、関西はその戦場であった。

(いしだ　じゅんいちろう)


武田五一


名和昆虫研究所(設計:武田五一、1907年)


東本願寺内侍所(設計:武田五一、1923年)

東畑謙三・東畑建築事務所年譜

西暦(年号)		社会の動き	東畑謙三・東畑建築事務所に関わる出来事	主要作品
	1902(M35)		三重県一志郡豊地村に生まれる	
	1920(T 9)		三重県立津中学校卒業	
	1923(T12)		第三高等学校卒業	
	1926(T15)		京都帝国大学工学部建築学科卒業	
	1927(S 2)		京都帝国大学大学院入学	
	1929(S 4)		外務省嘱託として東方文化学院京都研究所設計	
1930	1931(S 6)		大阪市嘱託として新大阪ホテル設計	
	1932(S 7)	第一次上海事変 5.15事件	欧米建築視察 東畑謙三建築事務所開設(大阪市北区)	
	1933(S 8)	日本、国際連盟脱退 地下鉄梅田～心斎橋開通	事務所移転(大阪市東区)	中央毛糸紡績楠工場、関西ペイント東京及び本社工場
	1934(S 9)	室戸台風		徳山鉄板帯鉄工場、日本生命保険神戸支店
1935	1935(S10)		鋸屋根トラスをラーメン構造にして経済性を図る	渡辺栄一商店築港工場・倉庫
	1936(S11)	ベルリンオリンピック 2.26事件		大町紡績大町工場、丸紅西ノ京染工場他、日生病院
	1937(S12)	日中戦争始まる 御堂筋完成	設計監理のため中国に所員派遣 鉄鋼統制により木造立体トラスによる架構開発	天津紡績公司、呉羽紡績天津工場、富国人絹パルプ祖父江工場
	1938(S13)			国産電機東京工場、東畑謙三建築事務所分室、石川制作所工場他
	1939(S14)		無筋・竹筋コンクリートの研究	第二国産電機組立工場
1940	1940(S15)	日独伊三国同盟	豊中市蛍ケ池に分室設置	台湾紡績王田工場、国産電機小田原、大岡工場
	1941(S16)	太平洋戦争開戦 軍建協力会設立	東畑謙三、京都大学講師委嘱	大日本セルロイド新井工場他、淀川製鋼所住宅
	1942(S17)	海軍施設協力会設立		呉羽航空機整備工場
	1943(S18)			ダイセル網干工場
1945	1945(S20)	太平洋戦争終戦、戦災復興院設立、東海地方大震災		呉羽ゴム工業津工場、事務所
	1946(S21)	日本国憲法発布	不二建設㈱設立	大建産業各工場
	1947(S22)		東畑謙三、日本建築家協会入会 日本建築協会入会	
	1948(S23)	建設省発足、福井大地震	東畑謙三、大阪大学講師委嘱	久保田鉄工所本社工場
	1949(S24)			関西ペイント本社、東亜紡績本社
1950	1950(S25)	朝鮮戦争勃発、特需景気 建築基準法、建築士法公布	不二建設㈱分離経営 紡績無窓工場を我国で初めて採用	大阪鋼材本社、神戸博覧会外国館
	1951(S26)	サンフランシスコ講和条約	株式会社東畑建築事務所に改組 一級建築士事務所登録 東畑謙三、日本建築協会副会長に就任	伊藤忠名古屋支店、富士写真フイルム大阪支店
	1952(S27)			三重県立博物館
	1953(S28)			伊勢会館、甲南高校
	1954(S29)			大和銀行堂島支店、EL PROGRESO TEXTILE S. A
1955	1955(S30)	日本住宅公団設立、神武景気	東畑謙三、日本建築学会理事	大阪国際見本市展示場、三重いすず自動車本社
	1956(S31)	日本、国連加盟可決		富士写真フイルム足柄研究所、徳島ビルディング
	1957(S32)	ソ連人工衛星スプートニク１号 建築基準法改正、なべ底不況	九州支所開設(小倉市八幡区) 本社新築移転(大阪市東区)	兵庫県農林会館、GENERAL TEXTILE MI-LLS
	1958(S33)		東京支所開設(東京都中央区) 東畑謙三、大阪府知事表彰	大阪営林局庁舎、INDUSTRIAL TEXTILE-S-A
	1959(S34)	岩戸景気、伊勢湾台風		大阪府農林会館、甲南大学５号館
1960	1960(S35)	ベトナム戦争勃発	東畑謙三、日本建築家協会理事 名古屋支所開設(名古屋市中区) 東畑謙三、建設大臣表彰	大阪府立大学図書館、大和銀行堂島支店
	1961(S36)	市街地改造法公布 株式大暴落		大阪府千里丘共同住宅、美津濃東京支店
	1962(S37)		東京支所を東京事務所に昇格・移転 東畑謙三、藍綬褒章受章	大阪府農林技術センター、三重県庁舎、岩井産業本社
	1963(S38)	ケネディ大統領暗殺	名古屋支所を名古屋事務所に昇格	大阪駅前第一ビル、山陽特殊製鋼本社研究所
	1964(S39)	東京オリンピック開催 東海道新幹線全通	東畑謙三、日本建築総合試験所副理事長 日本建築協会会長	甲南大学15号館、富士写真フイルム中央研究所
1965	1965(S40)	中国、文化大革命 名神高速道路全通	東畑謙三、日本万国博覧会会場計画委員	大阪市工業技術試験所、専売公社米子たばこ工場
	1966(S41)		清林永田町ビル竣工、東京事務所入居 東畑謙三、大阪商工会議所議員	大阪見本市恒久展示場第３号館、亀戸二丁目市街地住宅
	1967(S42)		北九州支所、名古屋事務所移転 東畑謙三、日本万国博覧会建設顧問	農林省中央研究所本館、鈴鹿市民会館
	1968(S43)	３億円事件、十勝沖地震、 都市計画法公布	東畑謙三、日本建築家協会終身会員	三重県伊勢総合庁舎、寧楽美術館
	1969(S44)	アポロ11号月面着陸 都市再開発法公布	東畑謙三、大阪市建築審査会会長	万国博覧会インターナショナルプレイス、小倉競馬場

西暦(年号)		社会の動き	東畑謙三・東畑建築事務所に関わる出来事	主要作品
1970	1970(S45)	日本万国博覧会開幕 建築基準法改正	東畑謙三、大阪府開発審査会会長代理	徳島県立中央病院、ダイヤモンドファミリー西大寺
	1971(S46)	ドルショック	東畑謙三、日本建築協会名誉会長 DEMOS導入	神戸市文化ホール、兵庫駅前市街地住宅
	1972(S47)	沖縄返還、札幌オリンピック、日本列島改造論	東畑謙三、日本建築学会名誉会員 勲三等瑞宝章受章	大阪市環境科学研究所、鈴鹿市体育館
	1973(S48)	第一次オイルショック	東畑謙三、沖縄国際海洋博覧会協会建設顧問 市川　宏、大阪府建築士会理事 日本建築家協会関西支部幹事	神戸市北区総合文化センター、日商岩井大阪本社
	1974(S49)	国土利用計画法公布 国土庁発足	本社大阪事務所完成・入居 東畑謙三、日中建築技術交流会副会長として友好訪中	森の宮市街地住宅、大阪府立砂川厚生福祉センター
1975	1975(S50)	ベトナム戦争終結、沖縄海洋博開幕、宅地開発公団発足	北九州支所移転 市川　宏、大阪建築設計監理協会副会長	兵庫県新農業会館
	1976(S51)	建築基準法改正		豊橋勤労福祉会館、岡山県立津山総合体育館、大阪市此花区総合センター
	1977(S52)			
	1978(S53)	日中平和友好条約調印 第二次オイルショック		大阪府勤労青少年研修センター、ＤＣ寝屋川ショッピングセンター
	1979(S54)	東京サミット		京都市下京区総合庁舎、興亜火災海上本社、ホリディ・イン南海大阪
1980	1980(S55)	イラン・イラク戦争勃発	北九州支所、九州事務所に昇格	筑波学園都市農林省関連施設、大工大中央図書館、神戸市中央区役所、四日市カントリー倶楽部
	1981(S56)	神戸ポートアイランド博 住宅・都市整備公団発足		京都社会教育総合センター、静岡中央警察・消防署合同庁舎、岡山県倉敷温水プール、鈴鹿市立図書館、甲南大学理学部棟
	1982(S57)	フォークランド紛争勃発	市川　宏、日本建築協会副会長 東畑謙三、取締役会長に 市川　宏、取締役社長に	徳島県立三好病院、京都府伏見港公園体育館、愛仁会高槻病院
	1983(S58)	中国自動車道全通	横浜支所開設	京都駅南口再開発、大阪駅前第４棟、東和薬品岡山工場、KKR東京共済病院
	1984(S59)	専売公社・電々公社民営化 建築士法・建築基準法改正	千葉支所開設 総務・財務・ＯＡ化	吹田市文化会館メインシアター、天理市庁舎、つくば科学博警備・消防本部・情報センター
1985	1985(S60)	つくば科学博開幕		インテックス大阪、名古屋港ガーデン埠頭休憩所、長居公園球技場、兵庫県農業共済会館、京都市消防局本部庁舎
	1986(S61)	チェルノブイリ原発事故発生 円高不況	市川　宏、黄綬褒章受章	神戸市外国語大学、三重県立一志病院、神奈川県立相模原球場、小山田記念温泉病院、三木市文化会館、瀬戸大橋架橋記念会館
	1987(S62)	イラン・イラク戦争終結 NTT株上場 ＪＲ11社発足	福岡支所開設（福岡市博多区）	京都府総合見本市会館、名古屋国際見本市会場、足立区婦人総合センター、社会保険庁富山厚生年金休暇センター
	1988(S63)		大阪事務所CAD導入 週休２日制導入	鈴鹿市文化会館、愛媛県警察本部庁舎、東京モード学園
	1989(H1)	ベルリンの壁崩壊 天安門事件 平成景気、消費税導入	九州事務所移転 東畑謙三、紺綬褒章受章	京都市国際交流会館、興亜火災海上保険日吉センター、佐賀市総合文化会館、国際花と緑の博覧会政府苑・いちょう館、河内長野駅前再開発
1990	1990(H2)	東西ドイツ統一 国際花と緑の博覧会開幕		三重県議会棟、静岡県立水泳場、鳥取銀行本店、愛媛県生涯学習センター
	1991(H3)	湾岸戦争勃発 ソビエト連邦消滅 バブル経済崩壊		コンベックス岡山、松下電器産業淀川寮、京都市障害者スポーツセンター、神戸市王子動物園どうぶつとこどもの国、大和銀行本店、立川市福祉会館
	1992(H4)	地球環境サミット開催		草津市庁舎、千里ライフサイエンスセンター、広島ピッグアーチ、横浜市障害者スポーツ文化センター、奈良ファミリー
	1993(H5)	ＥＣ統合市場スタート Ｊリーグ発足 北海道南西沖地震		神戸市フルーツフラワーパーク、姫路科学館、大阪市立総合医療センター、静岡県厚生年金健康福祉センター、京都市健康増進センター
	1994(H6)	GATTウルグアイラウンド妥結 関西新空港開港	名古屋事務所移転 市川　宏、勲五等双光旭日章受章	神奈川県産業技術総合研究所、愛知青少年公園センターゾーン施設、香川県産業交流センター、北九州穴生ドーム、横浜市環境事業局鶴見工場
1995	1995(H7)	米国・ベトナム国交正常化 地下鉄サリン事件 阪神・淡路大震災	東北支所開設（仙台市太白区）	大阪府立産業技術総合研究所、中国銀行大阪支店、宮崎県立農業大学校、八潮市生涯活動センター、警視庁渋谷警察署庁舎
	1996(H8)	アジア欧州首脳会議 ワールドカップ日韓共同開催決定	新伏見町ビル全館使用開始	泉佐野総合文化センター、京都ガーデンパレス、大阪プール、秦野市総合体育館、江戸堀センタービル、大野城市多目的複合施設
	1997(H9)	香港、中国への返還	東北支所移転（仙台市青葉区） 東畑謙三、取締役名誉会長 市川　宏、代表取締役会長 真塚達夫、代表取締役社長	横浜国際総合競技場、交野市総合体育施設、長野県障害者福祉センター、警視庁東京空港警察署庁舎、大阪城天守閣改修
	1998(H10)		４月29日、東畑謙三逝去（享年97歳）	

東畑謙三先生を偲んで

有志

（50音順）

アーキヤマデ株式会社 代表取締役社長 山出 満 〒564-0053 大阪府吹田市江の木町24-10 TEL06-6385-1261

株式会社 INAX 関西統括支社 取締役支社長 橋本武彦 〒550-0013 大阪市西区新町1-34-15大阪グレンチェックビル TEL06-6539-3500

浦安工業株式会社大阪支店 専務取締役支店長 谷 進 〒530-0043 大阪市北区天満2-3-5 TEL06-6351-7502

オイレス工業株式会社 代表取締役社長 江草利幸 〒550-0012 大阪市西区立売堀1-11-2 OT ビル TEL06-6534-1951

株式会社 大林組 取締役社長 向笠慎二 〒540-8584 大阪市中央区北浜東4-33 TEL06-6946-4578

株式会社 岡村製作所関西支社 取締役関西支社長 室 正高 〒542-0081 大阪市中央区南船場4-1-9南船場第一東洋ビル3F TEL06-6282-4001

株式会社 奥村組 取締役社長 奥村正太郎 〒545-8555 大阪市阿倍野区松崎町2-2-2 TEL06-6621-1101

カシマ工業株式会社 代表取締役社長 加島陸源 〒536-0011 大阪市城東区放出西3-1-1 TEL06-6967-1221

鹿島建設株式会社関西支店 常務取締役支店長 井保武寿 〒550-0011 大阪市西区阿波座1-3-15 TEL06-6536-3311

川崎重工業株式会社関西支社 関西支社長 角田文昭 〒530-0004 大阪市北区堂島浜2-1-29古河大阪ビル7F TEL06-6348-8271

株式会社 きんでん 代表取締役社長 岡 泰造 〒531-8550 大阪市北区本庄東2-3-41 TEL06-6375-6000

株式会社 熊谷組大阪支店 取締役支店長 山口啓二 〒534-0025 大阪市都島区片町2-10-5 TEL06-6352-1151

栗原工業株式会社 取締役社長 栗原信英 〒530-0017 大阪市北区角田町1-1 TEL06-6313-1101

コクヨ株式会社 取締役社長 黒田章裕 〒537-8686 大阪市東成区大今里南6-1-1 TEL06-6976-1221

株式会社 三晃空調 取締役社長 齋藤 穎 〒530-0047 大阪市北区西天満3-13-20 TEL06-6363-1671

三精輸送機株式会社 代表取締役 本多 孟 〒564-0063 大阪府吹田市江坂町1-13-18 TEL06-6385-5624

株式会社 三冷社関西支社 取締役支社長 新司恒夫 〒550-0003 大阪市西区京町堀2-9-8 TEL06-6446-0901

シーメンス株式会社大阪営業所 所長 岡本義廣 〒530-0047 大阪市北区西天満4-11-22 TEL06-6364-4551

清水建設株式会社 常務取締役関西事業本部長 増島修二 〒541-8520 大阪市中央区本町3-5-7 TEL06-6263-2800

関ヶ原石材株式会社大阪支店 支店長 三品秀雄 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-20-26 TEL06-6922-7661

株式会社 錢高組 社長 錢高一善 〒550-0005 大阪市西区西本町2-2-11なにわ筋ツインズウエスト TEL06-6531-6431

大成建設株式会社関西支店 専務取締役関西支店長 遠藤郁夫 〒542-0081 大阪市中央区南船場1-14-10 TEL06-6265-4534

株式会社 髙島屋建装事業本部 関西建装事業部長 堀口賢治 〒556-0005 大阪市浪速区日本橋3-5-25 TEL06-6632-3190

株式会社 竹中工務店 取締役社長 竹中統一 〒541-0053 大阪市中央区本町4-1-13 TEL06-6252-1201

東畑謙三先生を偲んで

有志

（50音順）

第一工業株式会社大阪支店　常務取締役支店長　齋藤宗一　〒530-0047　大阪市北区西天満3-6-14　TEL06-6364-6661

大建工業株式会社　西部建築部部長　小川賢治　〒530-8210　大阪市北区中之島2-3-18　TEL06-6228-3472

株式会社 築柴　取締役社長　築柴宗晴　〒604-8414　京都市中京区西ノ京小倉町10　TEL075-811-6171

株式会社 テクノ菱和大阪支店　常務取締役大阪支店長　鈴木茂男　〒530-0043　大阪市北区天満2-7-3　TEL06-6352-4881

戸田建設株式会社大阪支店　取締役支店長　河口允昭　〒550-0005　大阪市西区西本町1-13-47　TEL06-6531-6095

東急建設株式会社大阪支店　専務取締役支店長　常田左門　〒531-0072　大阪市北区豊崎3-19-3　TEL06-6377-6514

飛島建設株式会社大阪支店　常務取締役支店長　兵頭賢蔵　〒540-0034　大阪市中央区島町2-2-21　TEL06-6942-2481

ナブコドア株式会社　代表取締役社長　黒崎幸雄　〒550-0005　大阪市西区西本町1-13-8　TEL06-6532-5841

株式会社 内外テクノス　取締役社長　小西壽一　〒574-0074　大阪府大東市谷川2-7-1　TEL0720-72-2161

日本電気硝子株式会社　常務取締役建材事業本部長　戸谷文隆　〒532-0003　大阪市淀川区宮原4-1-14　TEL06-6399-2728

日本ドアーチェック製造株式会社　取締役社長　出向井康司　〒544-0014　大阪市生野区巽東3-17-10　TEL06-6758-1251

日本ピーマック株式会社大阪支店　支店長　清宮　仁　〒530-0054　大阪市北区南森町1-4-19サウスホレストビル　TEL06-6362-6655

株式会社 ハマキャスト　代表取締役　濱中清海　〒553-0006　大阪市福島区吉野3-2-32　TEL06-6463-6684

フドウ建研株式会社大阪支店　常務取締役支店長　関山泰道　〒541-0046　大阪市中央区平野町4-2-16　TEL06-6201-3737

不二建設株式会社　代表取締役　大藪昌昭　〒540-0011　大阪市中央区農人橋1-1-22　TEL06-6946-2270

不動建設株式会社　取締役社長　市吉正信　〒541-0046　大阪市中央区平野町4-2-16　TEL06-6201-1121

富士技研興業株式会社　代表取締役　金子敏雄　〒541-0053　大阪市中央区本町2-3-6ビジネスビル3階　TEL06-6261-5222

福西鋳物株式会社　代表取締役社長　中森英夫　〒550-0015　大阪市西区南堀江4-25-17　TEL06-6541-2924

株式会社 藤木工務店　取締役社長　藤木鐵三　〒540-0028　大阪市中央区常盤町1-3-8　TEL06-6966-0400

文化シャッター株式会社関西支店　取締役関西支店長　松本義明　〒541-0057　大阪市中央区北久宝寺町4-3-11エーユー本町ビル6階　TEL06-6282-0945

株式会社 松村組　取締役社長　福田耕作　〒530-8588　大阪市北区東天満1-10-20　TEL06-6353-1131

ヤマギワ株式会社近畿営業部　常務取締役営業部長　平畑輝夫　〒556-0005　大阪市浪速区日本橋3-4-9　TEL06-6643-3211

株式会社 ユニオン　代表取締役　立野純三　〒550-0015　大阪市西区南堀江2-13-22　TEL06-6532-3188

日本建築協会事務局一同

芝生から

桑原 誠二 Kuwabara Seiji KAJIMA DESIGN



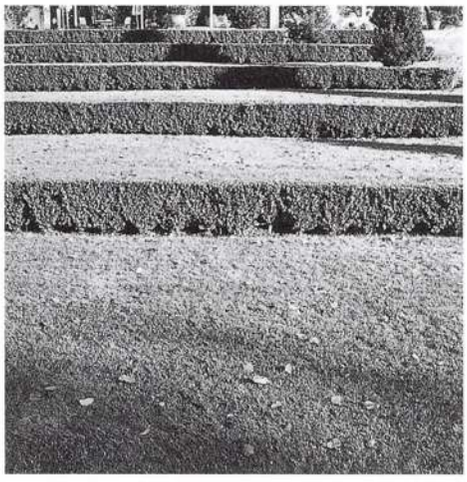
素材、技術の源流へのRe-approachによって新たなる創造性に向かうことを企画するシリーズ第17回は「緑」について考える。
建築の世界では「緑」は外構や造園という分野に類別され、建物に付加されるものと捉えられがちである。今回は、建築を構成する素材としての「緑」の可能性から、新たな空間の展開を模索してみる。（「素材と技術が生み出すdesign」幹事会）

Care

芝生の「芝」とは芝草の一般名である。「しば」は古くから「頻（しばしば）」すなわち何度もくり返すことから「繁る」の意になり、そこから由来するといわれている。室町時代には芝生の上が「猿楽」や「曲舞」等の芸能を見物する場となり、これがのちの「芝居」の語の起源となった。

芝生が造り出す緑の広がりは美しく、人々がその中に入りその雰囲気を味わいたい気分に駆られる。芝生は人にとって最も親しみやすく、気軽に利用できる緑であるといえる。緑の評価をアンケート調査した結果からも、安らぎ感や雰囲気の明るさの項目においては、芝生は緑量の多い森林よりもその評価が高いことが指摘されている。

日本のように温暖で植物の成長しやすい風土の国では、放っておくと芝生の中にたちまち多種の植物が紛れ込み成長を始める。一般の高麗芝は、長くのびると害虫、病気の発生、根腐れになり易いため、健康な状態に保つには、定期的に刈り込み風通しを良くする必要がある。つまり心地よい芝生の環境を保つためには、それだけ頻繁に人の手が入らなければならないのである。我々の芝生に対する親密感は無意識のうちにそこに人の手の痕跡を見いだしているからなのかもしれない。





Healing

草花の香りをかぐと野山を駆け回った少年時代の記憶がよみがえるという方も多いだろう。近年この香りには様々な効果があることが科学的に明らかになりつつある。植物が揮発する芳香性炭化水素「フィトンチッド」がその香りの成分であるが、この物質には細菌を殺す作用や人間をリラックスさせたりする効果があることが分ってきている。

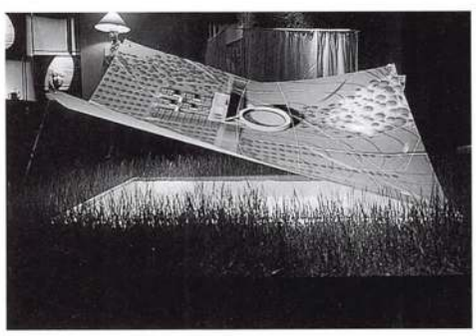
また植物を見たときの視覚的効果として、脳内のα波総量が増加するという実験結果や身体の疲労回復効果、さらには心理的な騒音低減効果もあることが認められている。こうした効果を利用して、フィトンチッドを抽出したエッセンシャルオイルを用いるアロマテラピーや患者の精神面の問題を癒やすために用いられる園芸療法が医学の分野で応用されている。

甘い花の香りは民族や性別を問わず誰もが惹きつけられてしまう。人が花の香りを心地よいと感じるのは、学習効果によりきれいな花を連想するためと一般的に言われているが、むしろ人間と昆虫には香りに対する共通の嗜好があると考えるほうが自然なことのように思われる。

Breath

植物は光合成を行う際に二酸化炭素とともに空気中の様々な物質を吸収する。屋内の緑化はシックビルシンドロームの原因となる物質の吸収により汚染浄化の役割を果たし、さらに蒸散作用により室内の加湿効果も期待できる。室内観葉植物により火災時の輻射熱を減少させることが出来るというデータもある。

しかし、植物はこれらの物質をすべて分解してくれるわけではない。一時的に保管しているだけで、植物が枯れてしまえば大気や土壌へ放出される物質もあることを忘れてはならない。すべての生物は生命活動のプロセスで様々な物質を生体に取り込み、その物質は食物連鎖を通じて生物間を移動した後再び環境へ戻っていくというサイクルを何度も繰り返す。そして人間もこの自然界の原理原則の中で生命活動を営んでいるのである。



Technology

緑をめぐる商品開発は巷のガーデニングブームにも乗って百花繚乱である。特に屋上緑化は最も手軽に行えるエコアーキテクチュアの手法であるため、軽量土壌に関する技術の開発はめざましい。その工法の一つに超軽量無土壌地盤緑化工法というものがある。これは土壌の代わりに不織布を基盤として用い、その上に芝生を張る工法である。土を使わないことから設置場所の自由度が広がり、たとえば室内床仕上げ材としての応用や壁面への施工も考えられる。

室内には日照不足、空調による乾燥、温度較差、葉面への埃の堆積など生育を抑制する条件が多いが、それらを技術的に克服する様々な取り組みが現在研究されている。しかし室内のように人工的な環境の中で植物を生育させるためには、もともと外部の自然が持っている高度なシステムを人が自らの手で補完することが、どんなに技術が進歩しても必要となっていくであろう。



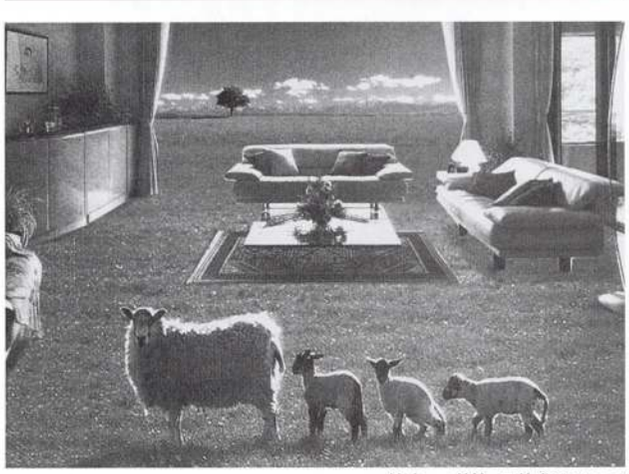


部屋を草原に

日本建築の特徴の一つは外部の自然と一体になる空間構成である。室内から縁側を介し軒下、庭、さらに借景となる山々へと連続的に連なる空間の流れが日本人の鋭敏な季節感を養ってきた。庭園に関しても日本庭園は自然の景相を呈しながらも、そこには驚くほどの手間が掛けられている。最近は室内やバルコニーで観葉植物やハーブ類を育てている家庭やオフィスも多いが、それらのほとんどは比較的手入れを必要としない品種であり、人間が眺めるために自然から遠く切り離して持ち込んだ緑のように感じてしまう。

都市の中でも自然と一体となる生活はできないだろうか。たとえば壁も床もすべて芝生や苔で覆われている室内空間を作れたら、そこでの生活はどの様なものになるだろう。裸足で草原を歩く喜びをいつでも味わえ、様々な昆虫や小動物と共存することになる。リスが走り回るリビングや羊のいる寝室なども良いかもしれない。しかし人間がそこで心地よく生活するためには、植物にとっても心地よい環境を作らなければならない。良く知られているように植物が音楽に反応するという実験結果を挙げるまでもなく、日常の中での意識レベルでの対話を通じて、植物にも「こころ」があると感じている人も多いであろう。

近年地球環境論が花盛りである。しかし現代の都市生活の中で、自然の微妙な変化を見つけ、環境保全の必然性を実感として捉えることは難しい。人が植物と共に生きる環境を作り上げていく過程から、他種との機能的な相違と個性を認識し、競合・協調を繰り返しながら自らの生活環境そのものを変えていく「相利共生」の関係が始まっていくのではないだろうか。外部の自然へと意識が連続する緑の空間に暮らすことが、かつて我々が持っていた自然に対する鋭敏な感覚を取り戻す一つのきっかけになることを期待したい。



協力　（株）日比谷アメニス

“人間サイズのまちづくり”の始動

宮本比佐志
兵庫県まちづくり部まちづくり政策課課長補佐

1995（平成７）年１月17日、午前５時46分―。兵庫県南部を突如、大地震が襲い、一瞬にして、多くの尊い生命を奪い、愛するまちを破壊した。1995年という、くしくも高度経済成長を遂げた戦後50年目にこの大震災は発生したのである。

振り返れば明治維新以来、私たちは欧米先進国への仲間入りをしようと懸命に努力してきた。しかしながら、特に第二次世界大戦後は、経済発展を急ぐあまりに、人間にとって本当に大切なものを置き去りにしてきた観がある。

このことは、まちづくりにおいてもいえるのではないだろうか。現在のまちが、本当に安全に安心して暮らすことができるまちになっているのか、本当に愛着を持って暮らすことができるまちになっているのか……。大震災は、私たちが抱える基本的な課題を端的に露呈させ、そのことを真摯に見つめ直す機会ともなったのである。

兵庫県では、一日も早い震災復興を推進する一方で、復興に携わる行政としての責任として、また自らも被災した者の使命として、阪神・淡路大震災とその復興の過程で得られた貴重な教訓を次世代に引き継いでいくために、これからの成熟社会を切り拓く新しいまちづくりの在り方を検討してきた。

そして、その成果の一つとして、「まちづくり基本条例」が、本年３月17日、第256回定例兵庫県議会において議決され、同18日、公布されたのである。

本稿においてはこの「まちづくり基本条例」の制定の背景、経緯、そして条例がめざすところを論じることとし、兵庫県が今後進めていこうとする新しいまちづくりについて、少しでも多くのご理解とご協力をいただくことができればと考えるところである。

まちづくりの背景と課題

(1) 近代化とこれまでのまちづくり

まずは、本条例の制定をめざす要因ともなったわが国におけるまちづくりの背景と課題について簡単におさらいしたい。

今日のようなまちづくりは明治維新とともにはじまったといってもいい。もちろん平城京や平安京の造営といった歴史的なまちづくりは当然わが国にも存在するが、まちづくりが全国的な動きで行われてきたのは明治時代にはじまる。鎖国時代の深い眠りから目を覚ましたわが国は、明治維新とともに国家政策として近代化に全力を傾け、欧米先進諸国へのキャッチアップをめざした。

明治初期のわが国の人口は、推計で約4,000万人だったといわれている。明治以降近代化を進めることにより、経済が大きく発展すると、人口を養う力も大きくなる。その結果、いまではわが国の人口は約１億2,600万人となり、明治維新から130年の間に３倍強に増えた。人口増加のみならず、特に第二次世界大戦後には、近代産業の発展に伴う人口の都市集中が急激に進んだ。こうした人口増加、人口移動に対する受け皿づくりに効率的に対応するため、官主導・中央集権の下でまちづくりが進められてきたのである。

(2) まちの現状

その結果、まちの状況はどうなっているか。

若年層を中心として、農山漁村からは多くの人口が流出して都市へと移動した。農山漁村に残った人たちは当時は壮年期であっただろうが、若年層が集落を後にして30年近くたっている。当然、高齢者になっている。農山漁村の過疎・高齢化は今後さらに進む状況にある。

一方、都市はどうか。

雇用の機会に恵まれている大都市に人口は集中した。平成７年の統計では日本の都市部に住んでいる人口は、約80%。つまり、１億2,600万の人口のうち、１億近い人々が都市に住んでいる状況にある。この数字だけを見ると、都市には活気があふれているように思われるが、実際はそうとはいえない。

確かに都心部に人々が集まったが、経済の発展とともに、土地の生産性が上がり、地価が上昇した。地価が上がると住宅地として都心部に住むことは難しくなる。そこで、若い人を中心として郊外につくられたニュータウンへ移住する。すると都心部は、いわゆるインナーシティといわれるように、高齢者が取り残され、生活環境の悪化したなかで居住している状況となった。

阪神・淡路大震災はこのような大都市を直撃した。痛ましくも亡くなられた6,400名を超す方々のうち、50歳以上の方が実に52%を占めている。いかに神戸を中心とする大都市の被災地に高齢者がたくさん住んでいたか、ということを如実に示した数字である。このことは、神戸だけではなく、恐らく日本の大都市における共通の現象になっているであろう。

このようなことを振り返ったとき、明治以来130年かかって豊かになってきた日本だが、農山漁村においても、都心部においても、あるいは郊外の新しいまちにおいても、人間が本当に心豊かに暮らせるまちになっているのか、という問いかけに疑問を持たざるを得ない状況となっている。

阪神・淡路大震災の教訓

(1) まちの安全

そういう状況のなかで、阪神・淡路大震災は発生した。この震災から、私たちは多くの教訓を得たが、その一つが、『安全』の重要性であった。

農村がある程度自然の摂理に従ったまちであるのに比べ、都市は、科学技術等の力により自然領域を侵す形で拡大してきた。人工的な基盤の上に巨大サイズ化する都市では、自然と人間との調和が保たれず、安全よりも危険に近づくものとなる。ひとたび大きな災害が起これば、被害も甚大なものとなる。山の斜面に造成した宅地などが示すように、都市は巨大化すればするほど危険とも隣り合わせとなる。このことは、地震などの災害が多く、“脆弱列島”といわれる日本においては、なおさらのことといえる。

(2) まちの安心

大震災での初期の救命・救助活動においていわれた「人の命は、結局、人が救った」という言葉に象徴されるように、震災初期の救助・救援活動や被災者の心のケアに大きな力を発揮したのは、住民同士の助け合いだった。私たちは、生活に安心感をもたらし、生きがいをもつくりだす地域コミュニティの大切さを改めて痛感した。このように本当に人間が安心できる暮らしは人と人とのつながりのなかで醸成されるといえる。人間はまったくひとりでは生きていけないのである。いつ、どこから、どのような災害や事故が襲ってきて、助けの必要な状況におかれるかも分からないのである。しかし

まちづくり基本条例（平成11年３月18日兵庫県条例第29号）

近代化の幕を開いた明治維新以降、経済の発展とともに、我が国の人口は著しく増加し、第２次世界大戦後の高度経済成長期には、農山漁村から都市へ大量の人口が流入した。

このような急激に変化した人口動態に対応して、我が国におけるまちづくりは、郊外での大規模なニュータウンの開発等に見られるように、増大する都市の人口の受入れ等に一定の成果を収めてきた反面、生活よりも経済性を優先し、個性に乏しい画一的なものになりがちであった。

そうした背景のなかで、兵庫県においても、都市では都心における住民の高齢化や空洞化が進む一方で、農山漁村でも住民の高齢化や過疎化が進み、都市と農山漁村の双方においてこれまで兵庫県の発展を支えてきた基盤ともいえる地域社会が脆弱化しつつある。

著しい経済の成長や人口の増加が終わり、人々が多様な価値観のなかで真の豊かさを求める成熟社会の到来を迎えつつあるいま、急速に少子化及び高齢化が進むとともに、豊かな人間関係が息づく地域社会が形成され難い状況が生じており、これらの社会現象は、これからのまちづくりの在り方にさまざまな課題を投げ掛けている。そして、それらの課題を解決するために、地域の住民による主体的な創意工夫を生かした新しいまちづくりが求められている。

こうしたなか、私たちは、阪神・淡路大震災において、一人一人が地域社会のなかで、安全に、安心して暮らすことができるまちづくりの必要性と地域への愛着をはぐくむ魅力あるまちづくりの重要性を改めて認識するとともに、被災地において広く芽生えた住民による自発的かつ自律的なまちづくりへの取組に、これからの新しいまちづくりの在り方を見いだすことができた。

いまこそ、私たちは、阪神・淡路大震災によって得た教訓を次の世代に伝えていくためにも、災害に強く、高齢者等の利用に配慮した住宅、公益的施設等の整備を行うとともに、良好な地域社会の形成を促進することにより、21世紀の成熟社会におけるまちづくりを進めていかなければならない。

このような認識に基づき、すべての県民が共有できる新たなまちづくりの基本理念を明らかにするとともに、成熟社会におけるまちづくりの推進に関する基本的な施策を定めることを目的として、この条例を制定する。

第１章　総則

（生活者の視点に立ったまちづくり）

第１条　成熟社会におけるまちづくりは、一人一人が地域社会のなかで、安全に、安心して暮らすことができるまちづくり及び地域への愛着をはぐくむ魅力あるまちづくりを旨として、生活者の視点に立って行われなければならない。

（理解、信頼及び協働によるまちづくり）

第２条　成熟社会におけるまちづくりは、県、市町、県民及び事業者の相互の理解、信頼及び協働の下に行われなければならない。

（県の責務）

第３条　県は、前２条に定める成熟社会におけるまちづくりについての基本理念（以下「基本理念」という。）にのっとり、まちづくりに関する基本的かつ総合的な施策を策定し、及びこれを実施するとともに、市町が実施する基本理念にのっとったまちづくりに関する施策を援助し、かつ、その総合調整を図るものとする。

（市町の責務）

第４条　市町は、基本理念にのっとり、当該地域の状況に応じたまちづくりに関する施策を策定し、及びこれを実施するとともに、県が実施する基本理念にのっとったまちづくりに関する施策に協力するものとする。

（県民の責務）

第５条　県民は、基本理念にのっとり、自発的かつ自律的にまちづくりに取り組むよう努めるとともに、県及び市町が実施する基本理念にのっとったまちづくりに関する施策に協力しなければならない。

（事業者の責務）

第６条　事業者は、その事業活動がまちづくりと密接な関係にあることを自覚し、基本理念にのっとり、県民と協力してまちづくりに取り組むよう努めるとともに、その事業活動を通じて、県及び市町が実施する基本理念にのっとったまちづくりに関する施策に協力しなければならない。

第２章　まちづくりの推進に関する基本的施策

第１節　まちづくり施策等

（安全なまちづくり）

第７条　県は、基本理念にのっとり、すべての人々が安全に暮らすことができるまちづくりを推進することを旨として、次に掲げる施策を講ずるものとする。

(1)災害、犯罪及び事故から人々の安全の確保を図る暮らしを守るまちづくりに関する施策

(2)高齢者等を含むすべての人々が公益的施設等を円滑に利用することができるバリアフリーのまちづくりに関する施策

(3)環境との調和に配慮した自然と共生するまちづくりに関する施策

（安心なまちづくり）

第８条　県は、基本理念にのっとり、すべての人々が安心して暮らすことができるまちづくりを推進することを旨として、次に掲げる施策を講ずるものとする。

ながら、現代のまちづくりは、経済合理性に比重をおくあまり、人間の生活よりも産業経済的な価値を生み出すことを優先して行われてきたきらいがある。例えば、都市の再開発においても、住民の立場に立った暮らしやすさよりも、経済的な尺度で機能配置が行われ、住んでいる人にとっては安心して暮らしにくい、ある意味では人間関係を疎外した無機質なまちとなっている。

(3) まちの魅力

わが国では、全国総合開発計画の下にさまざまな分野の社会資本整備計画が策定され、それをもとにした、効率性を重視したまちづくりが行われてきた。その結果、全国一律の基準による、均質的で地域の魅力に乏しいまちとなり、わがまちへの愛着や誇りが失われつつある。かつてニュータウンに住み着いた若年層の人々が、今や壮年、さらには老年期を迎えようとしている。ニュータウンの子どもたちは、核家族化したこともあり、成人してニュータウンを出て、別の場所で生活をはじめようとしている。このままでは、ニュータウンがオールドタウンになってしまう。ニュータウンに限らずそれぞれのまちにおいて、このまちに住み続けよう、このまちが好きだ、という愛着をはぐくむまちの魅力を創出することが大切だ。

兵庫県の「まちづくり基本条例」の制定

(1) 条例制定のプロセス

条例案の作成に当たっては、こうした課題を認識するとともに、県民の意見を広く聴くことを心がけた。いわば、行政主導から県民主導の案づくりへの転換である。このため、「まちづくり県民フォーラム」を県下各地で開催し、ホームページ「インターネットまちづくり県民フォーラム」を立ち上げ、常時、意見を募った。

まちづくり県民フォーラムは、同じフロアーでパネリストを参加者が取り囲む形式とした。つまり“話す側”と“聴く側”を分離することなく、発言者と参加者に同じ目線でこれからまちづくりについて考えていただくのがねらいだった。会場には一体感が生まれ、パネリストの発言に耳を傾ける参加者の熱気さえ感じられた。まさに成熟した自律的市民社会の到来の感を身をもって体験したのである。

神戸・阪神・淡路地域を対象とした県民フォーラムでは、「まちづくりプロセスへの住民参加が重要だ」「まちに対する愛情がまちづくりにつながる」「情報公開、情報共有からまちづくりははじまる」「まちづくりを進めるには自己責任、自己管理が大切」といった意見が出された。

「行政と市民が協働して取り組むパートナーシップのまちづくりが大切」「人が歩ける範囲で考えるヒューマンスケールのまちづくりが大切」「ＮＰＯ、コミュニティビジネス、地域連携がキーワードになる」。これは播磨地域からの意見である。

但馬・丹波地域からは「少子高齢化社会におけるまちづくりを真剣に考える必要がある」「まちづくりの触媒、コーディネーターとなる人材、組織をつくる手法が課題」との指摘があった。

さらに、これらの地域フォーラムでの議論を集大成するため開催した総合県民フォーラムでは、「少子高齢化を前提として、地域連携、共生、ユニバーサルデザイン、協働、自律の新しい理念に基づくまちづくりが大切」という意見が示された。

基本条例の案は、これらのフォーラムでいただいた県民の皆さんや学識者の方々からの数多くの貴重なご意見・提言などをもとに作成されたのである。

(2) 条例の理念

①生活者の視点に立った“人間サイズのまちづくり”

条例の第１条では「成熟社会におけるまちづくりは、一人一人が

(1)住民が共に支え合う地域社会の形成を図る連帯のまちづくりに関する施策
(2)保健、医療及び福祉のサービスの利用、日常生活に必要なものの入手等を身近に行うことができる暮らしやすいまちづくりに関する施策
(3)情報網及び交通網の整備等により地域社会相互の連携を図る交流のまちづくりに関する施策
(魅力あるまちづくり)
第9条　県は、基本理念にのっとり、地域への愛着をはぐくむ魅力あるまちづくりを推進することを旨として、次に掲げる施策を講ずるものとする。
(1)地域の風土、歴史、伝統等の特性を生かした誇りの持てるまちづくりに関する施策
(2)地域の経済的な基盤を生かした活力のあるまちづくりに関する施策
(3)文化、芸術、スポーツ等に身近に接することができる感動のあるまちづくりに関する施策
(まちづくり基本方針)
第10条　知事は、前3条に規定する施策(以下「まちづくり施策」という。)を総合的に講ずるための基本方針(以下「まちづくり基本方針」という。)を定めるものとする。
2　知事は、まちづくり基本方針を定めようとするときは、あらかじめ、附属機関設置条例(昭和36年兵庫県条例第20号)第1条第1項に規定するまちづくり政策審議会の意見を聴くものとする。
3　知事は、まちづくり基本方針を定めたときは、これを公表するものとする。

第2節　地域の住民による自発的かつ自律的なまちづくりの促進等

(まちづくり施策に関する情報の提供)
第11条　県は、地域の住民による自発的かつ自律的なまちづくりを促進するため、地域の住民に対して、当該地域におけるまちづくり施策に関する情報を提供するものとする。
(地域の住民の意見の反映)
第12条　県は、地域の住民による自発的かつ自律的なまちづくりに関する意見を当該地域におけるまちづくり施策に反映させるよう努めるものとする。
(市町に対する援助)
第13条　県は、市町が地域の住民による自発的かつ自律的なまちづくりを促進するため、次に掲げる措置を講ずる場合において、当該市町に対して技術的援助又は財政的援助を行うことができる。
(1)地域のまちづくりを行い、又はこれを支援していると認められる団体が基本理念にのっとった当該地域のまちづくりに関する提案を市町に対して行うことを促進するための措置
(2)地域の住民が当該地域内の一定の区域を定め、互いに当該区域における基本理念にのっとったまちづくりに関する協定を締結することを促進するための措置
2　市町は、県に対して、県が当該市町の区域内においてまちづくり施策を講ずるに当たって、前項第1号に規定する提案又は同項第2号に規定する協定に配慮するよう要請することができる。
(まちづくりに資する活動を行う団体に対する支援)
第14条　県は、地域の住民による自発的かつ自律的なまちづくりを促進するため、広域的に活用することができるまちづくりに関する知識及び技術についての調査研究及びその広域的な普及を行う団体の活動が、基本理念にのっとったまちづくりに資するものであると認められる場合において、当該団体に対して必要な支援を行うことができる。
(まちづくりに関する知識及び技術に係る提案等)
第15条　広域的に活用することができるまちづくりに関する知識及び技術についての調査研究を行うものは、県に対して、当該知識及び技術に係る提案を行うことができる。
2　県は、前項に規定する提案が、基本理念にのっとったまちづくりに資するものであると認められるときは、当該提案を地域におけるまちづくり施策に反映させるよう努めるものとする。

第3節　まちづくりを推進するための基盤の整備

(まちづくりの推進体制の整備)
第16条　県は、基本理念にのっとったまちづくりを総合的に推進するための体制の整備に努めるものとする。
(まちづくりに資するための調査研究の推進)
第17条　県は、基本理念にのっとったまちづくりに資するための調査研究を推進するものとする。
(まちづくりに関する知識及び技術の普及)
第18条　県は、県民による自発的かつ自律的なまちづくりに資するため、まちづくりに関する知識及び技術の普及に努めるものとする。
(まちづくりを推進するための措置)
第19条　県は、前3条に規定するもののほか、基本理念にのっとったまちづくりを推進するための基盤の整備に必要な措置を講ずるよう努めるものとする。

第3章　雑則

(表彰)
第20条　知事は、基本理念にのっとったまちづくりに関して著しい功績のあったものに対して、表彰を行うものとする。

附則

(施行期日)
1　この条例は、公布の日から起算して6月を超えない範囲内において規則で定める日から施行する。
(2～3　略)

地域社会のなかで、安全に、安心して暮らすことができるまちづくり及び地域への愛着をはぐくむ魅力あるまちづくりを旨として、生活者の視点に立って行われなければならない」という基本理念を掲げ、これまでのまちづくりの、ともすれば経済活動に視点をおいた考え方から、人間の生活に視点をおいた考え方へと、転換していくことを宣言している。つまり、拡大し巨大サイズ化してきたまちづくりからまちの内側に目を向ける、物質的な経済サイズで考えてきたまちづくりから安心感や心のゆとりといった内面に目を向ける、個性に乏しい画一サイズのまちづくりから地域の持つ個性・魅力へと目を向ける、まちづくりを行っていこうとするものである。

つまり、商店やレストランなどの利便施設をはじめ、公園や美術館などの公共空間が身近なところにあり、まち全体が住民にとって安全で安心な魅力ある一つの生活空間として、住み、憩い、学び、働くまちとなるような、生活者の視点に立った“人間サイズのまちづくり”を進めていくことを意図している。この“人間サイズのまちづくり”を進めていくことで、地域に住むすべての人が、まちをわが家のように使い、そして愛し、その結果として温かいふれあいのある地域コミュニティが生まれ育つことを期待しているのである。

今後は、この基本条例に基づき、まちづくりの基本方針となる「まちづくりグランドデザイン21」を策定し、

ⅰ自然と共生し、災害に強くバリアフリー化が進んだ“安全なまちづくり”(巨大サイズから人間サイズへ)
ⅱ住民同士の連帯、地域社会相互の交流が活発な“安心なまちづくり”(経済サイズから人間サイズへ)
ⅲまちへの愛着をはぐくむ地域の個性が生かされた、感動や活力あふれる“魅力あるまちづくり”(画一サイズから人間サイズへ)

を総合的に展開していくこととしている。

② 住民とのパートナーシップによるまちづくり

わが国では、少子高齢の成熟化の時代を迎え、民自律・分権型への構造改革が急務となっている。

そのなかで、私たちは、震災を契機とするボランティアやNPO活動の広がりに公民協働への大きな流れを実感するとともに、被災地において広く芽生えた住民による自発的かつ自律的なまちづくりへの取り組みに、これからの新しいまちづくりの在り方を見いだすことができた。そして、この動きを今後も大切にすべきであるということは、まちづくり県民フォーラムでも議論されたところであった。

こうしたことを踏まえ、基本条例においても、第2条において「成熟社会におけるまちづくりは、県、市町、県民及び事業者の相互の理解、信頼及び協働の下に行われなければならない」と規定し、住民や行政等のパートナーシップによるまちづくりを基本理念として掲げている。これを受け、第11条以降においてまちづくり施策に関する情報提供や住民の皆さんからの意見・提案の施策への反映等について規定しているのである。

今後は、まちづくりの実践において、県民の主体的なまちづくりが県土全域にわたって展開されるよう努めていきたいと考えており、このため、市町における住民主体のまちづくりを推進する体制整備への支援、市町と住民が協働してまちづくりを行う場合の活動助成、住民によるまちづくり計画の策定支援、アドバイザー派遣等を行うこととしている。

これからも基本条例を礎に、市町等との連携を図るなかで、地域住民の自由な発想と創意工夫を生かした自律的なまちづくりが展開できる環境整備に全力を注いでいきたいと考えている。

(みやもと　ひさし)

低電圧床埋込式ネオンサイン

東　信良
㈲ダイリン取締役企画部長

ネオンは従来のイメージを打ち破り、米国を中心に大きな進展をみせている。その特記すべき要点は、①ネオン管の品質・性能の向上、②ノンサポート工法の開発(当社開発)、③インバータトランスの製品化（ダイヘン社製）などに要約され、従来のものより施工性や加工性に優れた低電圧ネオンが普及したことである。

当社では、このような特徴を活かして独立型・埋込型など、これまでにない新しい形態のネオンの展開を図っている。

こういった新しい試みの一つとして、平成10年11月に和歌山県田辺市のＪＲ田辺駅前飲食街に“光るネオン道”（名称：味光路）を展開した。これは、田辺市が県の助成金を受けて駅南に広がる約260店の飲食街の活性化を図るために実施した事業で、路面整備や排水路埋設とともに８つの道路に３タイプの異なるネオンを埋設し、地域の活気と魅力あるスポットを整備したものである。

光るネオン道の展開

光るネオン道は、１kV低電圧インバータトランス１個を内蔵したネオンを、全路線に用途に応じて点型、面型、線型に埋設し、地区全体を一つのテーマのもとに一体感のある街路として構成したものである。

１）点型：床埋込式ネオンフットライト

約15m間隔に計64基のネオンフットライトを埋設。足元の太陽、月、魚など田辺と地区の風物を象徴する９種類の図柄を５色のネオンがソフトに照らし、飲食客を店へと誘導する機能をもたせている。

２）面型：床埋込式ネオンフロアサイン

飲食街の出入口道路６カ所にネオンサインを埋設。飲食街の名称［味光路］の文字をネオンで浮き出させ、効果的に飲食客を地区へ案内する存在表示サインとしての機能をもたせている。

３）線型：ネオンライトウェーブ

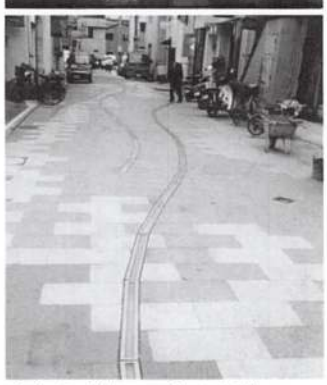
地区のメイン道路（幅６×長さ130m）に３列のネオンライトウェーブを波形に構成。150基を連結させて、舗石のデザインにあわせて波が海岸に打ち寄せるイメージを表現する。５色のネオンが自動点滅により定期的に一定時間、大波、小波のウェーブを繰り返し、地区の夜の賑わいを演出する機能をもつ。





ネオンフットライト(田辺仕様)





ネオンライトウェーブ(田辺仕様)

各タイプの仕様

１）床埋込式ネオンフットライト（サイズ：200×200×210㎜）
ネオン管：８㎜（米国EGL社製）、曲げ加工：９種類の図柄
トランス：インバータ１kV１個（ダイヘン社製）100V
　　二次電圧660Vrms　入力電流0.30A
防水型BOX：２㎜厚ステンレスSUS304
上部ガラス部：12＋４㎜強化合わせガラス、表面ノンスリップ加工

２）床埋込式ネオンフロアサイン（サイズ：1183×283×210㎜）
ネオン管：13㎜（米国EGL社製）
トランス：インバータ１kV２個（ダイヘン社製）100V
　　二次電圧660Vrms、入力電流0.30A
防水型BOX：２㎜厚ステンレスSUS304
上部ガラス部：12＋６㎜強化合わせガラス、表面ノンスリップ加工

３）床埋込式ネオンライトウェーブ（サイズ：86×900×210㎜）
ネオン管：８㎜（米国EGL社製）
トランス：インバータ１kV１個（ダイヘン社製）100V
　　二次電圧660Vrms、入力電流0.30A
防水型BOX：２㎜厚ステンレスSUS304
上部ガラス部：12＋４㎜上部強化ガラス、下部スリ加工

光る道開発の検討事項

低電圧ネオンを応用した光る道の開発に当たり、懸案となった検討事項は次のようなものである。

①地区を巡る道路は県道であるため、車両通行に対応できるものであること。また、道路管理者との協議により構造や形態にかかわらず許可を得る必要があること。

②往来する通行者に危険性がないこと。(スリップ防止、漏電防止)

③地区の電飾看板等の明るさにより、照明効果が減衰しないこと。

④イニシャルコストとともに、ランニングコストが安価で、維持・管理が容易なこと。

これらの課題に対して、実施に当たっては本体ボックスは、平米当たり14ｔの荷重に耐える構造とし、県警との協議により車両交通に極力支障のない寸法と形態を採用することになった。

また、危険性の対策としては、表面ガラスを強化ガラスにするとともに、滑り止め加工を施した。さらに、ボックス内のトランス結線、及び二次結線に関しても二重、三重の漏電防止を施した。

製品の改良

現在、製品は改良を進め、上記３点（田辺仕様）のほかに、ネオンフットライトでは、上部ガラスに成型ガラスブロックを使用したＧＢ200型(サイズ：221×221×221㎜)、ＧＢ130型(サイズ：134×134×221㎜)を完成した。ネオンライトウェーブでは、上部ガラスに厚さ16㎜、幅34㎜の成型強化ガラスを使用した極細タイプ（50シリーズ）のＳ200型（サイズ：50×253×144㎜)、Ｓ300型（サイズ：50×333×144㎜)、Ｓ400型（サイズ：50×416×144㎜）を完成させている。

それぞれ、逐次、品質向上のため改良を加えている。

（あずま　のぶよし）

2成分形ポリイソブチレン系シーリング材

村瀬雅明
サンスター技研㈱住環境事業本部 技術部 製品技術グループ長

はじめに

最近の建築物の長寿命化、外装の美観向上を重視する流れの中で建築物の「防水」に大きな役割を担っている弾性シーリング材も例外ではなく、より高い耐久性能と意匠性能を兼ね備えた材料が新しい市場ニーズとして要求されてきている。その一つとして、卓越した耐久性能から高層、超高層のガラスや塗装金属パネルのカーテンウォール目地等に使用されるシリコーン系シーリング材の低分子シリコーン化合物の遊離による各種外壁表面の『撥水汚染』の解消があげられる。

このような背景から、当社ではユーザーの要望に応えるべく、98年春に2成分形シリコーン系シーリング材と同等の性能を有しながらこの『撥水汚染』がない『2成分形ポリイソブチレン系シーリング材　ペンギンシール7000』を開発、上市し、すでにほぼ全国の物件に採用され、施工実績を重ねつつある。

本稿では、今回開発したこの新製品の性能特徴を『汚染性』性能の結果を中心に紹介する。

ポリイソブチレン系シーリング材の概要

そのポリマー主鎖構造はシリコーン系のケイ素（Si）と酸素（O）からなるシリコーンポリマーや変成シリコーン系のポリエーテルとは相違してイソブチレン単独カチオン重合体からなる完全飽和炭化水素である。その末端に反応性に富んだ官能基が導入されている事から、触媒（硬化剤）の存在下で空気中や材料中の水分によって硬化していく機構をとる。ただ、その硬化物自身の非透湿性能から現在のところ2成分形に限定される。

ペンギンシール7000の性能特徴

当社が長年培った配合技術の応用により、以下の高耐久性・高耐候性・低汚染性・良好な被塗装性の特徴を有している。

1）目地周辺の『撥水汚染』がない。

結晶化ガラスを被着体とした目地にペンギンシール7000を充填・硬化させた後、9ヵ月間南面30度傾斜にて屋外暴露した時の結晶化ガラスの撥水汚染状況の目視観察結果と横目地界面上、下中心部からの所定地点の水滴の接触角の測定結果を**表1**に示す。脱ヒドロキシアミン型の2成分形シリコーン系シーリング材（以下SR－2）と目地充填のない被着体（以下ブランク）と比較すると、SR－2が明らかに目視で撥水汚染現象を呈して接触角も増加しているのに対して、ペンギンシール7000は目視及び接触角の測定結果からもブランクと同様に撥水汚染は確認されなかった。**（写真1）**現在もこの屋外暴露を継続しており、この結果の信頼性を追試中である。

表1　屋外暴露後の撥水汚染状況と接触角測定結果

試験材料	目視観察結果	接触角（θ）					
		目地上面			目地下面		
		6.0cm	3.0cm	0.5cm	0.5cm	3.0cm	6.0cm
7000	○	43	21	27	33	33	39
SR－2	×	88	108	126	122	90	84
ブランク	○	36	50	45	45	50	36

※○：異常なし　　×：撥水汚染あり
※（　）cm：目地界面からの距離

表2　ガラスに対する接着耐久性試験結果

サンシャインウエザーメータ暴露時間（hr）	M_{50}（N/㎟）	Tmax（N/㎟）	Emax（%）	破壊状態（面積%）		
				CF	TCF	AF
0	12	42	430	100	0	0
2000	14	52	450	100	0	0
4000	16	54	440	100	0	0
6000	17	55	450	100	0	0

※ M_{50}：50%引張応力、Tmax：最大引張応力、Emax：最大荷重時の伸び
※破壊状態：　CF：シーリング材の凝集破壊
TCF：シーリング材の薄層凝集破壊
AF：シーリング材の界面破壊

2）ガラス耐候接着性に優れており、ガラスまわりの目地にも適用可能である。

ガラスに対する接着耐久性試験結果を**表2**に示す。透明フロートガラスに対してサンシャインウエザーメーター暴露6000時間まで確認した結果、物性、破壊状態の低下はまったくなく良好な接着性を保持していた。また、ISO 11600に基づき改正された新JIS A 5758ではタイプG、Fクラス25LMに、附属書2内の旧JISの耐久性区分では10030及び9030Gに相当する事を確認している。

3）硬化前の性能（作業性、仕上性、スランプ）や硬化後の性能（硬化性、各種金属・多孔質被着体への接着性、塗装適性）は変成シリコーン系シーリング材と同等以上である。

以上の一般特性については当社の2成分形変成シリコーン系と同様、環境依存性の少ない性状、硬化特性を有しており、相対的に塗料の汚染性に関してはこの系を上回る結果も得ている。詳細は弊社「カタログ」、「技術資料」に譲る。

おわりに

以上、簡単に当社新製品の特徴を『非汚染性能』を中心に記述したが、この『ペンギンシール7000』は当社としては全ての部材に適用できる可能性があること、また、現在「撥水汚染」を呈している2成分形シリコーン系シーリング材の改修材料にもなりうることから21世紀を見据えた新しいコンセプトのシーリング材と位置づけ、更なる社会資産価値の維持・向上に貢献できるものと確信している。今後の皆様方のご支援を期待するところである。

（むらせ　まさあき）

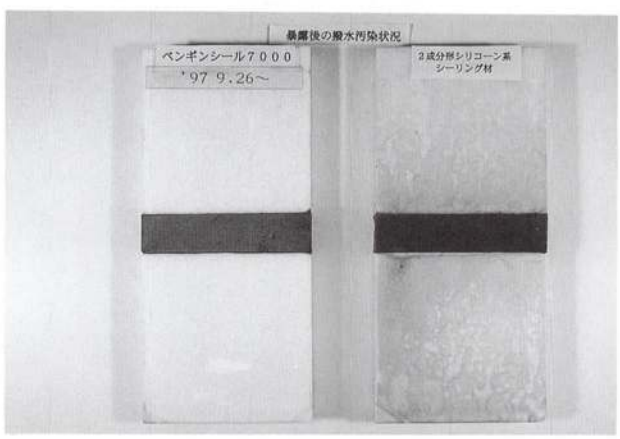


写真1　屋外暴露後の撥水汚染状況

連結送水管

由上雅章
ヤマトプロテック㈱

連結送水管の設置（一般建築物）

■連結送水管はどういう建物に必要か

消防法施行令第29条に規定されています（表1）。

表1　建物区分と設置要件

建物区分	設置面積	階数	有効設置包含距離
地階を除く階数が5以上の建物（防火対象物）		7以上	3階以上 50m
	6000m²以上	5以上	3階以上 50m
地下街（令別表第1の16の2）	1000m²以上		50m
延長50m以上のアーケード防火対象物で道路の用に供される部分			25m

消防法以外、火災予防条例により、表1以外でも設置が必要な場合があるので注意を要します。

なお、連結送水管は消防隊の消火活動上必要な施設であるため、消防の意向が完全に反映されなければならない施設です。

■連結送水管をシステムとして構成させるには

表2　連結送水管の設置に関する技術基準

送水口 放水口	・連結送水管の立管の数以上の数を、地盤面からの高さ0.5m以上1m以下に設けること ・送水口、放水口は見やすい箇所に標識を設けること
放水口の設置条件	・階段室、非常エレベーターの乗降ロビー、その他これらに類する場所で、消防隊が有効に消火活動できる位置
11階以上の放水口	・放水口は双口型とすること
配管	・主管の内径は100mm以上とすること ・鋼管はJIS G 3442、G 3452、G 3454に適合する管、またはこれらと同等以上の強度・耐食性及び耐熱性を有するもの ・配管の設計送水圧力（ノズルの先端における放水圧力が6kgf／cm²〈消防長または消防署長が指定する場合にあってはその放水圧力〉以上となるように送水した場合における、送水口の圧力をいう）が10kgf／cm²を超える場合にはJIS G 3454のSCH40以上のものを用いること
管継手	・配管の設計送水圧力が10kgf／cm²未満の場合 フランジ継手：JIS B 2210 ねじ込み式：JIS B 2301 溶接継手：JIS B 2220 フランジ継手以外の継手：JIS B 2311またはB 2312 ・配管の設計送水圧力が10kgf/cm²を超える場合 フランジ継手：JIS B 2210もしくはB 2220に適合する管継手のうち、呼び圧力16kgf/cm²以上のもの フランジ継手以外の継手：JIS B 2312に適合する管継手のうち呼び厚さでSCH40以上のもの
バルブ	・JIS G 5101、G 5501、G 5502、G 5702、もしくはH 5111に適合するもの
配管の耐力	・当該配管の設計送水圧力の1.5倍以上の水圧を加えた場合に、当該水圧に耐えるものであること ・加圧送水装置を設けた場合の当該加圧送水装置の吐出側の配管の耐圧力は、加圧送水装置の締切圧力の1.5倍以上の当該水圧に耐えること
加圧送水装置	・地上11階以上、かつ70mを超える建築物にあっては、加圧送水装置を設けること。なお、連結送水管は湿式とすること ・ポンプの吐出量は隣接する二の階に設けられる放水口の設置個数を合計した個数のうち、最大となる当該設置個数（設置個数が3を超えるときは3とする）に800l/minを乗じた量以上の量とすること。ただし、連結送水管の立管ごとに加圧送水装置を設ける場合のポンプの吐出量は1600l/min以上の量とすることができる ・火災等の災害による被害を受けるおそれの少ない箇所に設ける
起動装置 ホース格納箱	・起動装置は直接操作でき、かつ、送水口の直接または中央管理室に設けられた操作部から遠隔操作できるものであること ・11階以上には、放水用器具を格納した箱を付置すること（放水用器具は長さ20mのホース4本以上、筒先2本以上） ・格納箱は一の直接階段について、階数3以内ごとに一の放水口から歩行距離5m以内で消防隊が消火活動できる位置

中間水槽の設置は法基準では定められていませんが、技術的に必要であり、ポンプの性能試験や、ポンプより下層階の配管の充水源として有効です。水槽が中継ポンプの位置以上となるように設け、当該ポンプの一次側に専用の配管を接続することが必要となります。

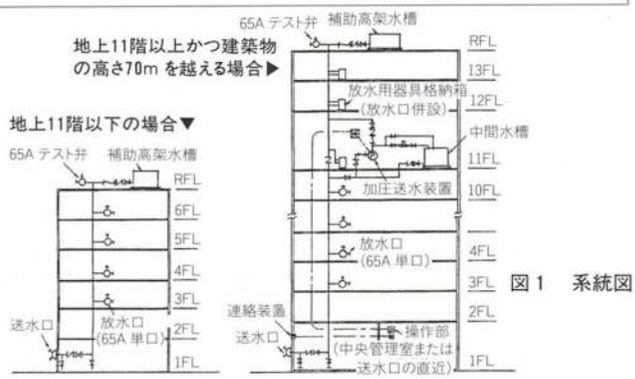


図1　系統図

なお、水槽の有効水量については所轄消防と打ち合わせて下さい。

例：大阪市運用基準：8m³

中継ポンプ

■中継ポンプ（ブースターポンプ）の設置階

送水口から設計送水圧力で送水したときに、ノズル圧力6kgf/cm²が得られない階以下の階を設置階とするのが一般的です。

設計送水圧力＝ノズル圧力＋ホース損失＋落差損失＋配管摩擦損失

ノズル圧力＝6kgf/cm²　ホース損失＝4m×2

送水口の摩擦損失＝4.7m（大阪市のみ）

落差損失＝送水口からポンプ設置階の放水口までの高さ

配管摩擦損失＝送水口からポンプ設置階の放水口までの必要な流量にて発生する損失の合計

■中継ポンプの押込圧力の計算

ポンプ設置階から最上階の放水口に揚水するが、送水口からは必要水量が送水されてきます。

押込圧力＝設計送水圧力－（落差損失＋配管摩擦損失）

落差損失＝送水口からポンプ吸込口までの高さ

配管摩擦損失＝送水口からポンプ吸込口までで、最上階の放水口に必要な流量にて発生する損失の合計

■最上階の放水口から中継ポンプまでの揚程計算

揚程＝ノズル圧力＋ホース損失＋落差損失＋配管摩擦損失

落差損失＝最上階放水口の位置からポンプ吐出口までの高さ

配管摩擦損失＝最上階放水口へのポンプ吐出量での損失の合計

■中継ポンプの揚程の計算

中継ポンプの揚程＝最上階放水口から中継ポンプまでの揚程－送水口から中継ポンプへの押込圧力

消防当局から計算方法を指示された場合は、それに従って下さい。

■連結送水管の構成機器の一例



（ゆかみ　まさあき）

BOOK STATION
ブックステーション

住まいづくり・まちづくりの仕事
榎田基明・小伊藤直哉・田村宏明・坂東亜希子 編著

昭和堂
1999.4.10刊
B5判　208頁　本体3000円



家族・福祉・まちなみ保全などの視点から、住み手とつくり手のパートナーシップに根ざした建築計画を考える。

住まいのノーマライゼーションⅡ
ーバリアフリー住宅の実際と問題点
菊池弘明 著

技報堂出版
1999.3.01刊
B5判　184頁　本体3800円



高齢者や障害者の自立した生活と尊厳の基本となる「住まい」について、これからの在り方を模索する。

町家点描
藤島亥治郎・藤島幸彦 著
田畑みなお 写真

学芸出版社
1998.3.25刊
A5判　320頁　本体3500円



半世紀以上にわたり日本各地で調査を続けてきた著者は今年5月で満百歳。貴重な資料をもとに第一級の町家30件を選び、伝統の美と文化に映えるたたずまいの意匠と歴史的背景を写真と図版で綴る。

マンションライフ法律相談
九鬼正光 著

日経BP社
1999.1.25刊
四六判　355頁　本体1800円



マンション特有のトラブルの実体など判例を具体的に紹介しながら分譲マンションの仕組みやルールを比較的詳しく解説。

鉄筋最前線
豊島光夫 著

建築技術
1999.3.01刊
四六判　206頁　本体1600円



鉄筋工事について分かりやすく解説。また、鉄筋工事百年の歴史についても触れられている。

日本建築史
藤田勝也・古賀秀策 編

昭和堂
1999.4.10刊
A5判　240頁　本体2400円



京都・奈良・大阪の近畿圏を中心として、建築の種類ごとの多様性に注目し、その歴史的変遷の過程を概観。また、現代的課題としての保存と活用制度の変遷と実態についても触れる。

よむ住宅プランニング
宮元健次 著

学芸出版社
1999.1.25刊
B5判　127頁　本体2400円



住宅の設計を学ぶ学生などの解説書として、古今東西の優れた住宅の平面図を各空間別に分類し、そのよみ方や考え方についてわかりやすく説明。

建築知識（スーパームック）
木造住宅(私家版)仕様書　架構編
松井郁夫・小林一元・宮越喜彦 著

建築知識
1998.12.20刊
A4判　179頁　本体2800円



構造、架構の設計手法、監理術などを含め、独自の仕様を豊富な写真や図版とともに解説。

フォーラム「いま危ない日本の宝」

「地震火災から文化財を守る協議会」(小松左京会長)の主催で、文化財の地震火災による焼失を防ぐ手だてを探るフォーラムが開催される。参加費無料。

日時　1999年5月16日(日)　13：00〜17：00
会場　東京・有楽町マリオン11階（朝日ホール）
内容　●挨拶／小松左京氏、新野幸次郎氏
●基調講演／上田正昭氏
●特別講演／大林宣彦氏
●討論「あらためて文化財の21世紀について考える」／大町達夫・小林隆彰・杉浦日向子・竹内謙・土岐憲三の各氏
申込　住所・氏名・年齢・職業・TEL/FAXを記入し、ハガキまたはFAXで下記あて。
㈱アドスリー内地震火災フォーラム係
〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-16-7
FAX03-3459-6894

「建築設備診断技術者」講習会

過去4回の講習で約2200名の「ビルディングドクター（建築設備）」を誕生させた標記講習会が開かれる。主催は㈳建築・設備維持保全推進協会（BELCA）、㈶日本建築設備・昇降機センター。

●東京会場／日本都市センター（千代田区平河町）
1999年7月6日(火)〜9日(金)、定員200名
●大阪会場／千里ライフサイエンスセンター（豊中市）
1999年7月27日(火)〜30日(金)、定員150名
申込受付　1999年4月1日〜5月31日（先着順で締切）
受講料　52500円（テキスト代・消費税含む）
申込先　受講願書、その他問い合わせはBELCA事務局（〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-8-1TEL03-5252-3873、FAX03-5252-3871）へ。

第15回'99総合建築材料・設備展

'99総合建築材料・設備展は、大阪では唯一の建築材料及び設備の展示会である。海外からの出展は約30%と多く、国際色豊かな展示会となる。入場無料。

テーマ　"建築は人を語る"人が「快」と感じる環境
主催　㈳日本建築材料協会、日本工業新聞社
会期　1999年5月11日(火)〜14日(金)
10：00〜17：00（最終日16：00まで）
会場　インテックス大阪4号館
大阪市住之江区南港北1-5-102
併催　●建築トレンドセミナー（国際会議ホール）
竹村公太郎氏（建設省近畿地方建設局局長）
東孝光氏(千葉工業大学教授、大阪大学名誉教授)
広原盛明氏（前京都府立大学学長）
●出展各社による製品説明会（C・D会議室）
問合　㈳日本建築材料協会　TEL06-6443-0345

5人の舞台裏ー竹中・意匠展ー

竹中工務店設計部の意匠設計者5人によるグループ展は、プロジェクト推進のプロセスの創造的部分に光を当て、発想から現実への舞台裏を表現することを意図している。入場無料。

■展示会
日時　1999年5月17日(月)〜5月24日(月)
11：00〜20：00
場所　ハービスOSAKA 4階
リビングミュージアム円形ギャラリー
大阪市北区梅田2-5-25
展示　スケッチ、エスキース、図面、写真などのパネルおよびモックアップ

■フォーラム
日時　1999年5月17日(月)　18：00〜20：00
場所　ハービス6階・ガーデンシティークラブ
テーマ　「発想から現実への舞台裏」
講演者　吉引顕久／島田保美／小梶吉隆／仲晴男／山羽ひとみの5人
定員　50名（定員になり次第、締め切り）
会費　2000円（要予約）
予約先　「5人の舞台裏フォーラム申込み」と明記の上、参加者氏名・会社名・TEL/FAXを記入して5月10日までにFAXで、竹中工務店設計部情報部門（FAX06-6538-5506）へ。

1999年作品展&記念セミナー

■作品展　1999年5月27日(木)〜29日(土) 10:00〜20:00
作品　大阪ガスインテリアデザインスクールの'98年度卒業生の卒業制作作品を中心に展示
場所　大阪ガスインテリアデザインスクールのA教室（備後町オークビル内）

■記念セミナー「インテリアデザインにおける20世紀の流れと21世紀の展望」
日時　1999年5月29日(土)　13：30〜16：30
基調講演／樋口治氏
トークセッション／樋口治氏 vs 島崎信氏
場所　備後町オークビル3Fホール
大阪市中央区備後町3-6-14
定員　150名（先着順・電話受付）
受付 TEL06-6262-4103
参加　入場無料

●樋口治／㈳インテリアデザイナー協会名誉理事
——1936年京都高等工芸学校卒業。高島屋設計部長を経て京都工芸繊維大学教授に就任。1979年退官。船舶の内装をはじめ、大規模インテリアデザインを手がけた。このたび国井喜太郎産業工芸賞を受賞。
●島崎信／武蔵野美術大学教授
——1956年東京芸術大学工芸科図案部卒業。デンマーク王立芸術アカデミー建築科1959年修了。ホテル、商空間、住宅などのインテリアデザイン、インテリア関連製品の企画開発とコンサルティングに携わる。著書に「椅子の物語」など。

村井修写真展『港まちグラフィックス』

写真家・村井修氏が建築や彫刻を対象とする仕事の合い間にある港町で見つけた人間の無意識の営為を記録したカラー写真35点で構成する、『港まちグラフィックス』と題した作品展が開かれる。

日時　1999年5月7日(金)〜5月19日(水)
11：00〜19：00　会期中無休
会場　アユミギャラリー　TEL03-3269-1577
東京都新宿区矢来町114


写真／村井修

「ノート'99」ーアートスペース虹でー

作品に至るプロセスの中には、現実となるまでの豊かな世界が残されている。「ノート」に書き留められた思索、希望、アイデア、気まぐれは、作品に一歩踏み込む手がかりとなるのではないか？
この展覧会では、いま活躍中の現代美術作家3人のそんな「ノート」をのぞいてみる。

日時　1999年5月11日(火)〜5月30日(日)
11：00〜19：00（最終日18：00）月曜休廊
作家　森村泰昌氏ー「テクノテラピー」展などー
ヤノベケンジ氏ー「史上最後の遊園地」展などー
やなぎみわ氏ー「VOCA展'99」などー
会場　アートスペース虹　TEL&FAX075-761-9238
京都市東山区三条通神宮道東入る3丁目東町247

'99建築プロフェッショナルセミナー

設計事務所実務者を対象に、空間創造にかかわる各分野の第一人者を講師に迎えてのセミナー（年6回開催予定）の第1回「素材を活かす建築術」が始まる。

テーマ　素材との対話
講師　竹原義二氏（建築家、無有建築工房主宰）
日時　1999年6月2日(水)　15：00〜17：00
会場　大阪ガス本社ビル3階ホール
大阪市中央区平野町4-1-2
定員　200名（予約制・先着順）ー参加費無料ー
申込先　指定申込書（セミナー事務局へ請求・受付TEL06-6262-4089)に記入して、FAXで大阪ガスインテリアデザインスクール内建築プロフェッショナルセミナー（FAX06-6262-7202）へ。



2666

2666 JR奈良駅前第1街区再開発ビル

設　計：都市設計連合・日本設計・大林組
施　工：大林組・村本建設・浅川組共同企業体
a．奈良市三条宮前町
b．5,401.41㎡
c．4,467.70㎡
d．40,369.54㎡
e．SRC＋RC、B2F、10F、P1F
f．平成7年6月～平成10年2月

この建物は、ホテルと商業施設の複合建築物で、国際文化観光都市「奈良」の玄関口の景観形成と、周辺のまちづくりの核となることをめざした。外観デザインは、基本設計をアルド・ロッシが担当し、3層構造のデザインと色で古都奈良にふさわしい重厚な存在を主張して、周辺との調和をはかった。ホテルのインテリアはモダンシルクロードをメインテーマにして、ロビー・宴会場・料飲等の施設毎にデザインテーマを設けて個性ある空間づくりをめざして、オリエントの香りのする格調高いシティホテルをねらった。
設備面でも地域冷暖房の導入、コージェネレーションの採用等で省エネルギーをめざし、井水の利用、雨水の流出抑制をおこない、環境に配慮した設計をした。

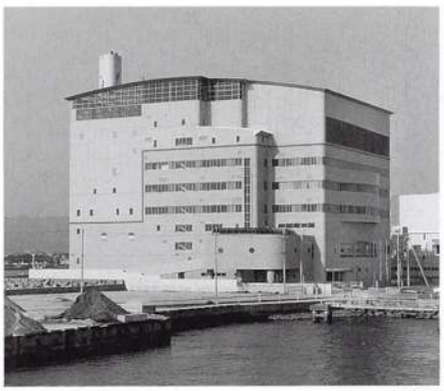


2667

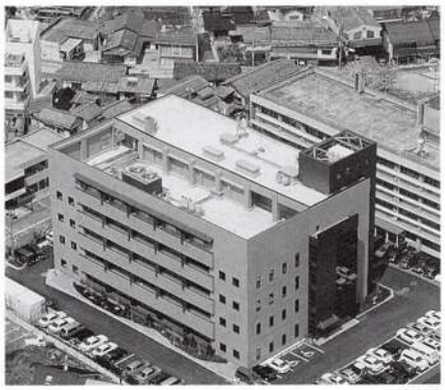
2667 ヴェルドワイエ芦屋

設　計：大林組本店一級建築士事務所
施　工：大林組
a．兵庫県芦屋市東芦屋町16-55
b．1,700.61㎡
c．612.73㎡
d．1,221.18㎡
e．RC、3F、B1F
f．平成9年9月～平成10年7月

この建物は、阪神大震災により被害を受けたオーナー住宅を再建し、併せて賃貸マンションを設けるためにつくられた。3階が二世帯のオーナー住戸、1、2階は賃貸住戸となっている。
計画地は斜面地で、眺望もよく緑の多い閑静な住宅地である。その恵まれた環境を取り込み、溶け込むよう配慮すると共に、復興の芽として力強く育っていくようなイメージで計画した。
既存の地形を利用して駐車場と住戸の2棟を上下に配置し、駐車場の屋上を緑化した。これによって、周辺への圧迫感を低減すると共に、住戸内からも四季の移ろいを楽しめるように配慮した。施主の要望による『ペット（犬・猫）と共存できるマンション』という方針のもとに、ディテールにもアイディアを盛り込み、入居者からも好評を得ている。



2668



2669

2668 和歌山市青岸クリーンセンター

設　計：神戸製鋼所
施　工：　同上
a．和歌山市湊1342-39
b．6,990.65㎡
c．3,865.65㎡
d．14,437.13㎡
e．RC及びSRC
f．平成6年10月～平成10年3月

2669 広島県庄原合同庁舎増築

設　計：大旗連合建築設計
施　工：奥村組・玉川工務店共同企業体
a．広島県庄原市東本町一丁目4-1
b．13,976.49㎡
c．2,703.89㎡
d．6,799.35㎡
e．RC、5F
f．平成8年10月～平成10年3月



2670



2671

2670 福岡法務局八幡出張所

設　計：九州地方建設局営業部
施　工：山九
a．北九州市八幡西区樋口町41-2
b．2,000㎡
c．894㎡
d．1,525㎡
e．RC、2F
f．平成9年3月～平成10年3月

2671 大阪府営大東末広第1期中層・高層住宅

設　計：大阪府建築部営繕室、㈶大阪府建設監理協会
施　工：住友建設、淀建設工業、冨田建設
a．大東市末広町
b．13,257.5㎡
c．2,279.39㎡
d．12,643.75㎡
e．RC、3～5、10・11F、166戸
f．平成8年6月～平成9年11月



2672



2673

2672 キングマンション天神橋Ⅱ

設　計：大林組本店一級建築士事務所
施　工：大林組
a．大阪市北区天神橋7丁目81番1
b．1,747.19㎡
c．988.25㎡
d．18,110.17㎡
e．RC、30F、P2F
f．平成7年12月～平成10年1月

2673 松原市消防本部消防署庁舎

設　計：松原市都市整備部建築課
施　工：三菱・末広特定建設工事共同企業体
a．松原市阿保1丁目16-2
b．1,026.61㎡
c．665.19㎡
d．2,104.54㎡
e．RC、4F
f．平成9年6月～平成10年3月

凡例

a．所在地

b．敷地面積

c．建築面積

d．延床面積

e．構造規模

f．工期

日本建築協会

月間の動き

【平成11年2月分】

通常総会

24日　5時～5時45分・於本会会議室
出席者　市川会長ほか26名
議　事　(1)監事選挙の件
(2)本部所属評議員選挙の件
(3)監事および評議員重任の件
(4)名誉正会員推挙の件
(5)平成11年度事業計画（案）承認の件
(6)平成11年度収支予算（案）承認の件

理事会

第6回定例理事会
24日　4時～4時50分・於本会会議室
出席者　市川会長ほか19名
議　事　(1)平成11年度事業計画（案）承認の件
(2)平成11年度収支予算（案）承認の件
(3)監事・評議員改選の件
(4)平成10年度第3回定時評議員開催の件
(5)入退会承認の件
(6)後援協賛名義の使用承認の件
(7)事業報告

第1回総務担当理事会
9日　3時～4時・於本会会議室
出席者　三品副会長ほか5名、鶴田評議員
オブザーバー／市川会長
議　事　国の「公益法人に対する指導監督基準の改正」に伴う本会の定款の改正等に関する件

第2回編集理事会
20日　4時～5時・於本会会議室
出席者　金多副会長ほか4名
議　事　(1)「建築と社会」の編集内容について
(2)「建築と社会」の収支状況について

編集委員会

第10回構造分科会
3日　6時～8時30分・於本会会議室
出席者　田辺幹事ほか3名
議　事　(1)「構造の頁」の企画
(2)10月号構造特集の企画

第9回施工材料分科会
4日　4時～6時・於本会会議室
出席者　十倉幹事ほか4名
議　事　6月号「施工材料」特集の企画

第11回会員企画小委員会
4日　7時～8時30分・於本会会議室
出席者　塚口副委員長ほか2名
議　事　(1)シリーズものの報告と掲載予定
(2)新しい企画案について

第10回広告企画小委員会
8日　5時～6時・於本会会議室
出席者　内田委員長代行ほか2名
議　事　(1)「北信濃―街並み修景と地域文化の再構築」特集広告経過報告
(2)「都市のパブリック」特集広告経過報告
(3)5月号「関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる」特集広告経過報告
(4)6月号「大阪城天守閣平成の大改修」「堂島アバンザ」特集広告経過報告
(5)作品作風
(6)独自特集経過報告
(7)表紙4面広告掲載紹介の協力要請
(8)収支状況報告

第11回編集委員会
8日　6時～8時30分・於本会会議室
出席者　内田委員長代行ほか4名
議　事　(1)3月号「東海支部会員作品」「北信濃―街並み修景と地域文化の再構築」特集経過報告
(2)4月号「都市のパブリック」特集経過報告
(3)5月号「関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる」特集経過報告
(4)6月号「大阪城天守閣平成の大改修」特集経過報告
(5)シリーズ頁経過報告
(6)平成11年度収支予算案
(7)収支状況報告

第11回素材と技術が生み出すデザイン幹事会
10日　6時30分～9時30分・於本会会議室
出席者　遠藤幹事ほか5名
議　事　2～5月のテーマの内容検討

第4回計画―インテリア・住宅系―分科会
22日　7時～9時・於本会会議室
出席者　石川幹事ほか4名
議　事　9月号インテリア・住宅特集企画

第11回法令分科会
24日　2時～5時・於本会会議室
出席者　炭崎幹事ほか4名
議　事　(1)「法令コーナー」の企画
(2)7月号「改正建築基準法」特集の企画

第11回設備分科会
25日　6時30分～8時30分・於本会会議室
出席者　谷津委員ほか3名
議　事　(1)「設備の頁」の企画
(2)8月号設備特集の企画

第11回作品作風小委員会
25日　7時～8時30分・於本会会議室
出席者　前川副委員長ほか4名
議　事　(1)作品の掲載状況・掲載予定の報告
(2)作品の選定
(3)「gallery」「SKETCH BOOK」報告・予定

事業委員会

第10回若い会員の集い小委員会
3日　7時30分～8時35分・於本会会議室
出席者　杉本副委員長ほか10名
議　事　(1)今後の予定
(2)「30's EYE 記録編集」
(3)当小委員会の今後
(4)「委員の時間」

第6回30's EYE 記録編集分科会
3日　6時～7時30分・於本会会議室
出席者　米井主査ほか9名
議　事　(1)30's EYE 記録編集
(2)今後の予定

出版委員会

第10回出版委員会
18日　5時30分～6時45分・於本会会議室
出席者　山田委員長ほか11名
議　事　(1)〈プロのノウハウ〉と特装本の経過報告
(2)今後のテーマと執筆者選定
(3)第19回〈プロのノウハウ〉講座申込状況

建築クラブ

第322回朝食会
9日　8時30分～10時・於リーガグランドホテル
演　題　「21世紀は沙漠の時代」
―沙漠緑化は世界平和への道―
講　師　遠山正瑛氏（日本沙漠緑化実践協会会長）
参加者　58名

80年史編纂委員会

17日　3時～5時30分・於本会会議室
出席者　長谷部委員長ほか7名
議　事　80年史編纂

入会者（敬称略）

〔個人会員6名〕

田中　義治（田中義治建築設計）
竹内　謹治（T&P 設計事務所）
共田　秀雄（三建設計）
富田　一夫（ミキ建築設計事務所）
増田　博（増田工務店）
山田　栄治（山田栄治建築設計事務所）

〔準会員1名〕

河尾　晋平（大阪工業大学）

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社

大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03—3344—1851(大代)　大阪本社☎06—6448—3603(代)
大阪支社　☎06—6448—5851(代)　名古屋支店　☎052—211—1535(代)　中国支店　☎082—247—5541
九州支店　☎092—431—2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

ガス設備の設計・施工のご相談は
大阪ガス指定工事会社・大阪ガス住設機器特約店

大晃設備株式会社

本　　社
大阪営業所　大阪市此花区西九条2丁目13番28号　電 06—6466—2268
枚方営業所　枚方市甲斐田東町9—3　電 0720—49—2128

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　大島　剛
取締役関西支店長　本木　満

関西支店　大阪市中央区北浜2-2-21　電話 06(6202)3071(代表)
本社・東京本店　東京都千代田区有楽町1-4-1　電話 03(3502)6111(大代)
支　　店　名古屋・九州・北海道・中国・東北・北陸・横浜・東関東・北関東・京都・神戸・四国

給・排水・衛生・消火・空調設備

株式会社 西原衛生工業所大阪店

大阪市北区中津6丁目8番4号　電話大阪(6458)3628番
支店・営業所　福岡・京都・天理・川西・神戸

空気調和設備
衛生設備 設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町3番5号　電話(6352)1131(代)
本　　社　東京都中央区日本橋蠣殻町2—22　電話(3667)3431(大代)
支　　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

OKUJU
スペース クリエイター

建築に革命をもたらした技術がある

「大規模天井無足場工法」

内外装創作パネル・システム天井・間仕切
株式会社 オクジュー

本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530—0047
TEL(06)6312—4131　FAX(06)6312-7998
東京・九州・横浜・名古屋・宮崎・京都

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社 三晃空調

本　　社　大阪市中央区城見2丁目1番61号ツイン21MIDタワー　電話06-6949-1371
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡

Digital Pri-Press

AOBA PRINTING CO.,LTD.,

代表取締役社長 依藤孝行

青葉印刷株式会社

〒534-0027 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-6351-5428 Fax.06-6351-5299

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　　社　大阪市中央区瓦屋町2丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
〒542-0066 電話 大阪 (06) 6768—5031代表
メンテナンス　電話　大阪（06）6768—1651代表
東京支社　東京都文京区小石川1丁目12番14号(日本生命小石川ビル7階)
〒112-0002　電話 (03) 5689—2351代表

特殊壁装材製造販売　和室に最適
●聚楽壁紙●ホクシノン(無機質壁紙)

(株)ホクシンクロス

〒583-0881　大阪府羽曳野市島泉8—173—1
TEL（0729）39—3610

工場　〒580-0046 大阪府松原市三宅中8丁目1番9号
第一　〒639-1042 奈良県大和郡山市小泉町2744
第二　〒597-0051 大阪府貝塚市王子501

夢×技=∞ 無限大
何時もあなたの街で
お会いしている
クリハラの技術



電気・計装・空調・土木
栗原工業株式会社
本社/〒530-0017大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル)
TEL06(6313)1101
創業1919

CHOYO
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。
電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役 山本貴士
本 社 〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代) FAX 06(6385)1050

電気設備設計施工
株式会社 三興社
代表取締役社長 上田正雄
本 社 大阪市中央区北浜3－6－13（日土地淀屋橋ビル）
電 話 06（6205）3671（代）
支 店 東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電 話 03（3666）1478（代）
営業所 堺・泉州・泉南・滋賀

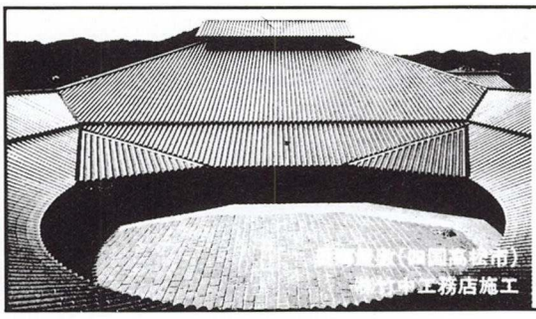
電気設備工事設計施工
東光電気工事株式会社
関西支社
取締役支社長 伊藤義信
大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号 電話大阪(6202)0325～9番
本 社 東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支 社 北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

人と都市の快適な環境をつくります
営業種目 設計・施工・監理
●電気設備
受変電・幹線
動力・制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装
●空調・給排水・衛生設備
空気調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム
●プラント
プラント計装
システムエンジニアリング
●情報通信設備
情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム
●電力流通設備
受変電
架空送配電
地中送配電
住友電設株式会社
大阪本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06)6537-3400
東京本社 〒105-0014 東京都港区芝2-2-17 ☎(03)3454-7311

電気設備・計装制御設備・空調設備・クリーンルーム設備・プラント設備
給排水衛生設備・エネルギー集中監視システム…設計施工
SANPO
三宝電機株式会社
取締役社長 嘉納秀一
本 社 〒530-0047 大阪市北区西天満2-6-8(堂ビル) TEL.06(6364)1471・FAX06(6364)5533
東京支社 〒105-0003 東京都港区西新橋3-3-5(ランディック新橋ビル) TEL.03(5472)3311・FAX03(5472)0085
名古屋支店 〒462-0847 名古屋市北区金城3-12-14 TEL.052(991)5131・FAX052(914)7535
神戸支店 〒657-0035 神戸市灘区友田町3-6-11K・Tビル TEL.078(842)6411・FAX078(842)6416
堺研究所 〒590-0906 大阪府堺市三宝町七丁369 TEL.0722(27)8408・FAX0722(27)1424

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工
株式会社 川岸窯業商店
本 社 大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06—6532—0641(代表)
FAX.06—6535—5181
天理営業所 天理市丹波市新町49

学校建築のトータルアドバイザー
二葉工業株式会社
黒板・掲示板・家具
電動黒板装置・サイン・スクリーン
〒547-0001 大阪市平野区加美北3—4—5
TEL06(6792)5858 FAX06(6792)2810



〒556-0024
大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
ナニワ瓦株式会社
ファックス 六五六一～七四五四
六五六一～七四一六
あらゆる屋根工事の相談は、

新鮮
情報処理／編集・企画／印刷・製本
ハード&ソフト…プリンティングの先端を拓きます。
ND
日本電植株式会社
〒530-0043 大阪市北区天満2丁目5番15号
TEL.06(6352)7502㈹ FAX.06(6355)2714

省エネルギー時代の断熱用シート防水材
日立バイナリーシートP
日立バイナリーシートPは,日立防水シートに発泡ポリエチレンを独自の貼り合わせ技術で積層した,二重構造の断熱兼用二重防水シートです。
日立電線株式會社 本社 東京都千代田区丸の内2丁目1番2号(千代田ビル)

Construction chemistry for the future.
コンクリート用混和剤／コンクリート用補修材
高性能無収縮材／コンクリート用高性能床材
Master Builders Technologies
株式会社 エヌエムビー
株式会社 ポゾリス物産
本 社：東京都港区六本木3－16－26
大阪支店：大阪市中央区北浜3-2-23(信愛ビル)
TEL06-6202-3294

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・綾野（07727）2−2220
舞鶴（0773）76−0133

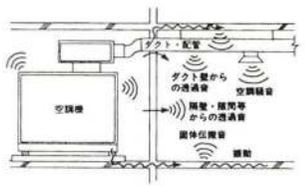
金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332−6861
TEL 東京（03）3272−8501

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443−6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252−6000

東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83−2381
TEL 大阪（06）6877−1581

（（プロのノウハウ））



建築と音のトラブル

第一線の
技術研究者が
わかりやすく
鋭く解説

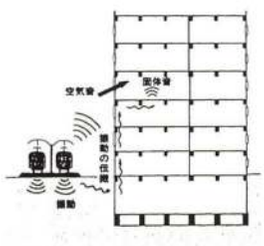


企画・日本建築協会

田野正典、中川清、縄岡好人、平松友孝著
（鹿島建設）（清水建設）（大林組）（大成建設）

四六・224頁（2色刷）・2300円＋税　ISBN 4-7615-2197-X

生活騒音、建物の構造や配置プランによる騒音、設備機器からの騒音振動、配管の伝搬経路の騒音など、建物に関わる様々な音のトラブルの解決方法をゼネコンの第一線の技術研究者が解説。約50の重要事例について具体的な内容→原因→対策→解説→ヒントとして整理し、建築設計や施工監理の実務担当者に役立つよう構成した。



学芸出版社

京都市下京区木津屋橋通
西洞院東入　〒600-8216
tel 075-343-0811
fax 075-343-0810

ビルの白いキャンバスを
美しく彩る。
それが不二サッシの仕事です。



豊かな都市空間にとって、そこにある建築ファサードが担う役割は計り知れません。それぞれの面に現われる表情にはそこに関わる全ての人々に対するメッセージ、創り手の「夢」が込められているのです。不二サッシはこの多様なビルの表情を彩る役目のお手伝いをさせていただいています。ビルをスクリーンのように映し出す外壁材カーテンウォールもその一つ。私たちの技術が新しい建築文化を創造していきます。

窓から夢をひろげていきます
不二サッシ

東京本部 〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町9-8 TEL.03-5458-7283
ホームページ http://www.fujisash.co.jp/

雑誌 03379-5

Vol.80 通巻926号 平成11年5月1日発行 毎月1回1日発行 昭和24年3月19日第3種郵便物認可 ISSN 0912-8182

社団法人 日本建築協会 〒530-0001 大阪市北区梅田1-9-3-2-100 電話大阪06(6348)0635 FAX06(6348)0634 振替口座〇〇九一〇-九一三九七五

定価1,200円（●本体1,143円●消費税57円●送料共）正会員の購読料は会費に含めて徴収